

官能のプリマ

ヴァージョンVII

祭り

アカマル

目次

1. キリン	1
2. 母子	11
3. 商談	17
4. 憎悪	25
5. ショー	34
6. 八木節	43
7. 稽古	53
8. デザイナー	63
9. 祖父	70
10. 面談	80
11. まつり	90

1 キリン

肌に粘り着いてくる暑い湿気が朝の微睡みを不快にさせる。

寝汗にまみれた綿毛布を床に落とし、Mはベッドで寝返りを打った。大柄な裸身が青いシーツの上で緩慢に回転する。カーテン越しに差し込む光が汗ばんだ肌を白々と照らしだした。深い尻の割れ目になまめかしい陰影が浮かぶ。

部屋の窓は北に面している。南側に玄関がある不思議な造りのワンルームのアパートだった。もっとも、南隣には軒を接するようにして四階建ての医院があった。後から建てられた二階建ての木造アパートにしてみれば、どうしようもない間取りといえた。

Mがこのアパートに移り住んでから、もう三年になる。金貸しの老人の殺人事件を機に、遊郭跡のアパート富士見荘から仕方なく引っ越してきたのだ。家主が犯人として逮捕された以上、木造三階立ての元遊郭も最後の命運が尽きたといってよかつた。取り壊される運命の富士見荘に残された、三人の老婆の身の振り方を考えるのはケースワーカーの天田の仕事だった。だが、Mの身の振り方まで天田に考えさせるわけにはいかない。Mは勤務先の警備会社の交通業務主任の紹介で月五万円のこのアパートに転居した。家賃は約十倍になってしまったが、入社六か月で正社員になれたMには住宅手当がついた。その後、警備会社が新たに始めた総合人材派遣部門を担当して二年が過ぎ、今や手取り二十五万円の派遣業務主任だった。極めて普通の生活が続いているといってよかつた。

しかし、今もって市にいることを、折に触れてMは疑問に思う。ピアニストの自殺によって、戸籍上の未亡人になったときに市を去るべきだったと悔やむこともある。結局、求められれば応じるのがMの生き方だった。祐子が、チーフが、そして警備会社も、ピアニストの父の歯科医さえMを求めた。何にも増して睦月の愛憎がMを放さなかった。修太を殺したと言いつのり、ことあるごとに睦月はMを責めた。睦月の説の半分は認めざるを得ないMには、修太の子の進太の成長を見守る義務もあった。それがピアニストの妻の役割にも思える。少なくとも、自分の死で現金強奪事件と修太を始めとした十二人の死に責任を取ろうとしたピアニストの意志は尊重したかった。

Mは仕方なく、歯科医に請われるままピアニストの遺産を相続することにした。弁護士に言わされたとおり書類にサインし押印しただけで、今もって財産がどれほどあるか知らない。預貯金に手をつける気きえない。書類はすべて祐子に預けてしまった。コスモス事業

団の理事長の遺産を相続していた祐子が、管理者として適任だと思えたのだ。遅れて刑務所を出所してくる極月や霜月を迎える心配も、ピアニストの妻の仕事に思えた。二人とも帰るところなどあるはずがない。同じ傷を負った者同士が、ひっそり寄り添うしかない。幸い、蕩児の帰郷に市は極めて寛大なのだ。これまでのMと睦月の暮らしがすべてを証明している。ピアニストにまつわる一切のしがらみがMをこの市に縛り付けていた。一人で都会に逃げ帰るわけにはいかない。三年間は瞬く間だった。

目覚まし時計の耳障りな電子音が響いた。

Mは手を伸ばしてサイドテーブルに置いた時計のベルを止める。ついでにエアコンのリモートコントロール・スイッチを入れた。窓の上に取り付けたエアコンが静かな唸り声を上げ、蒸し暑い部屋の空気を追い払っていく。素肌に浮いた汗が瞬く間に消え去っていった。

肌の冷えを感じるまで待って、Mは起き上がった。真っ先にカーテンを開ける。今にも降り出しそうな分厚く垂れ下がった梅雨空の下に水道山の緑が広がっている。北向きの窓だが、心が落ち着く景観だった。

山の中腹のこんもりとした森陰に鮮やかな黄色の屋根と青い屋根が見える。青い屋根は像舎で、黄色のほうはキリン舎の屋根だ。どちらも市が近隣に誇る市立動物園の人気者だった。特に二年前に来たキリンは子供の夢を刺激し続けている。小学校の一年生になったばかりの進太も例外ではない。入学する前は毎日欠かさずキリンに会いに行くのが習慣だった。今は日曜日の度に出掛けている。昼近くならなければ起きない睦月の目を盗んで、進太は毎週動物園に通い続けていた。キリンと会った後は、決まってMの部屋を訪ねて來たが、これも睦月には内緒だった。もうじきノックもせずに進太が訪れ、心ゆくまで遊んでいくはずだった。ベッドから起き出したMが裸でも、進太は何の頓着もない。まさに傍若無人な子供だった。それもMや祐子、チーフの前だけで、母の睦月といふときはおどおどとした振る舞いが目立った。進太は睦月の体罰が怖くて仕方ないので、進太を取り巻く大人たちにとっては周知のことだった。睦月は誰の目の前でも遠慮なく進太を折檻した。母子だけのときは生命に関わるほど責めるに違いない。折檻と言うより虐待と言った方が近い。進太の身体にはいつも生傷が絶えない。皆が眉をしかめていたが、誰も睦月に意見することができなかった。興奮した睦月が、それこそ進太を殺しかねないと危惧していたからだ。睦月はしつけのための愛の鞭と言って憚らなかった。Mは睦月のアパートと五百

メートルも離れていない部屋を選んだことを悔やむ。でも、進太の逃避先と思えば諦めがついた。しばらくぶりに、進太を動物園に迎えにいってやろうと思う。今日は午後から人材の派遣先と、新たな事業の打ち合わせをするために会社に行く予定だった。新しい仕事は幸い忙しかった。休日出勤を前に、進太と他愛ない時間を過ごすのも楽しそうな気がした。

Mは窓のカーテンを閉め、ユニットバスに向かった。小さなバスとトイレ、洗面台が備え付けになった玄関脇の一角で顔を洗う。冷たい水が気持ちよい。睦月が進太に与える虐待の記憶を吹き飛ばそうと、思い切って水を使う。素肌に飛沫が跳ぶが、水滴をはじき飛ばす皮膚の張りが失われたことが寂しくなる。四十五歳の素顔が正面の鏡に映っていた。

進太はいつものように正門の職員通用口から園内に入った。幼いころから動物園に入り浸りだった進太は、すべての飼育員と顔見知りだ。誰にも見咎められることはない。開園前でも朝の動物園はにぎやかだ。餌を求めて鳴き交わす動物の声が、山麓を切り開いた園内に響き渡る。

進太はコンクリートの壁の上で、フェンスに背をもたれさせて座っていた。垂らした足の四メートル下にキリン舎の運動場が広がっている。

「サクタロウ、おいで」

真向かいの砂地に並んで立った三頭のキリンに進太が呼び掛けた。しばらく前に家族の元に帰っていた特別大きいサクタロウが声に応じ、ゆっくりと向きを変えて進太の方に歩いて来る。サクタロウは網目キリンの雄で、キサラギの夫でキリタロウの父だ。父になってまだ半年しか経っていないためか、子供の進太にも頼りない動きに見える。ただ背はあきれるほど高い。長い首を伸ばし、巨大な顔を四メートル上にいる進太に近付けてきた。いたずらそうな黒い目で進太を見つめながら、もぐもぐと口を動かして目の前まで顔を寄せる。不意に長い舌を伸ばし、膝に置いた進太の手を舐めた。温かいヤスリを手に当てられたようなざらついた感触が心地よい。多量の涎で手がぐしょ濡れになる。

「ダメッ」

進太が怖い顔で言うと、きっと首を上げて大きな目で見つめた。邪気のない目がかわいくてならない。進太はサクタロウの唾液で濡れた手を背中に回し、フェンスの下に茂った草を抜き取る。相変わらずもぐもぐと口を動かして食物の反芻を続いているサクタロウの

目が進太の動作を捉えて輝く。すっと長い首を伸ばし、進太の手を追う。意地悪くサクタロウの目の前で草を振ってみるが、進太の上半身ほどある顔と口の前では空しい。瞬く間に草の束はサクタロウの口の中に消えた。すぐ後ろで様子を見ていたキリタロウが父の真似をしようとするが、子キリンでは壁の半分の高さまでしか首がとどかない。母のキサラギがとがめるように見つめている。キリンの一家でも母は怖いのかと進太は思う。でもキリタロウには、子供のようで頼りないが父のサクタロウがついている。母のキサラギも折檻できないに違いないと思って羨ましくなる。

草を噛んでいたサクタロウが首を曲げ、進太の膝に巨大なあごを載せた。剥き出しの腿が針で突かれたように痛い。昨夜、ママに物差しで打たれたばかりの、赤く腫れ上がった痣が飛び上がるほど痛んだ。キリンの毛は短く、歯ブラシのように固いのだ。皮膚はぱんぱんに張り切っていて、まるでブラシの毛を植え付けた大太鼓のようだ。

「サクタロウ、僕を背中に乗せてよ」

進太はサクタロウのあごを撫でながら真剣な声で頼んだ。声を聞いたサクタロウが首を上げ、少し離れて訝しそうに進太を見る。

「サクタロウ、乗せて」

また進太が頼んだ。サクタロウが笑う。笑ったように進太には見えた。さっと巨体を翻し、狭い運動場の端に向かって軽やかに駆ける。蹄の音が静けさの中に響いた。黄色と黒の網目が目にまぶしく美しかった。

サクタロウの首に抱きつけなかったことを進太は今日も悔いた。たとえサクタロウが背中に乗せてくれず地面に転落したとしても、それがどうしたと痛切に思う。進太はきつく唇を噛みしめ、四メートル下の地面をじっと見つめた。胸の底に押し殺していた記憶がまた喉元まで込み上げてくる。まだ幼かったころ、ママは何度も僕を、胸の高さから布団の上に落としたのだ。泣き声もでなくなった僕を、ママは敷き布団の上に落とし続けた。恐ろしいほど真剣なママの目を今も覚えている。とてもキリンのように反芻したくはない圧殺したい記憶だった。今更転落が恐ろしいとは決して言わせないと自分を叱る。

真っ白になった進太の視界の隅で、そのとき黒い影が揺れた。数回まばたきをして進太は影を見つめる。上り坂になったキリン舎の正面の道をMが上ってくる。黒のTシャツにブラックジーンズを合わせたいつもの格好だった。身体の線が見て取れる姿が、進太の目にも美しく見える。歩みに連れて長い髪がふくらと揺れた。進太の表情が一瞬に輝きだす。

「Mっ」

立ち上がって大声で叫び、両手を上げて左右に振った。途端にフェンスの向こうから飼育員の梅田さんの声が響く。

「進太、客が来る前にフェンスの外に出ろよ」

「はい」

明るい声で答え、進太は金網のフェンスをよじ上る。フェンスのてっぺんにキリン舎を見下ろすと、三頭のキリンがそろって進太を見上げていた。

「僕もパパが欲しいな」

アパートのドアを開けて玄関に入ると同時に、進太がMに言った。Mは面食らって進太の顔を見つめる。とっさに答えが見付からない。当たり前の話だ。父のいない子供が父を欲しがっている。Mに答えられる道理がなかった。

「サクタロウみたいな頼りないパパでいいんだ。パパさえいればママに叱られなくて済む」

Mの答えなど求める風情もなく興奮した口調で言って、進太は部屋の中に飛び込んでいった。

真っ先にキッチンに行き、冷蔵庫を開いてミルクと食パンを持ち出す。八畳の部屋に置いたテーブルの前に座り、牛乳パックから直接ミルクを飲む。細い喉が鳴り、唇の端から白いミルクがこぼれる。続けて食パンをモリモリと頬張る。

「トーストにして、バターを塗ってやろうか」

見かねてMが声を掛けるが、答える暇を惜しむかのようにパンを食べてミルクを飲む。睦月の冷蔵庫は今朝も空に違いないと思い、Mは暗澹とした気持ちになる。一週間前に用立ててやった五万円を使い果たしてしまったに違いなかった。つい聞かなくてもよいことを聞きたくなる。

「進太、昨日の晩御飯は食べたの」

「抜きだよ。勉強しないでテレビを見ていたから、ママに叱られたんだ」

やっと人心地がついた様子の進太が、吐き捨てるように答えた。Mには睦月の子育て振りが残酷に見えてならない。だが、食べ物を買う金がないことを子供に告げるのと、子供の罪をとがめて絶食を命じると、どちらが子育てにかなっているのかMには判断できな

い。育児は各家庭の個性に属するものと言えた。

「M、甘い物が食べたいな。給食のデザートみたいなのでいいよ」

食べ散らかしたまま立ち上がった進太が、Mの答えも聞かずにキッチンに消える。自分の家では間違ってもするはずがない進太の振る舞いが、いつもMを戸惑わせる。睦月の厳格さとMの放任と、どちらが進太のためになるかを考えてしまう。当然、責任が無い分だけMの方が分が悪い。やはり進太の将来に渡って責任を負うのは睦月しかいない。それが進太を生んだ睦月の母としての務めに違いなかった。

「わーすごい、アップルパイがあったよ。全部食べていい」

キッチンから嬌声が聞こえ、進太がケーキの箱を持って戻ってきた。人材を派遣した先の会社社長が、お礼にと言って金曜日に持ってきたものだ。社員が十人ほどの情報サービス会社だが、時流に乗って手広く事業を広げていた。当然、理工系の基礎知識を持った人材を求めてきた。有能な調査員が欲しいという要求に応え、Mは思いきって刑務所を出所して半年になる極月を交通誘導部門から引き抜いて派遣した。つい一か月前のことだ。極月はコンピューター・システムの基礎調査員として、めざましい働きをしているという。極月の能力を持つてすれば、喜ばれるのも当たり前のことだった。今日の午後会うことになっているのは、水瀬産業というその会社の社長だった。久しぶりで極月に会えるかも知れないと思うと、つい口元がほころんでしまう。

肘掛け椅子に座って極月の仕事ぶりに思いを馳せたMにお構いなく、進太はアップルパイを丸ごと貪り始めていた。あまりの傍若無人振りに、つい注意をしたくなる。立ち上がろうと椅子を鳴らした途端、背中を見せて座り込んでいる進太がパイを嗜みながら声を出した。

「ねえM、サクタロウはいつも食事をしているんだ。便利でいいよね。ひもじい思いをしなくて済む」

立ち上がり掛けたMは、また椅子に腰を下ろす。進太は背中に目があるのかと疑いたくなる。行儀の悪さを注意しようと思った気持ちが、ひもじさと聞いてつい不憫さに変わってしまう。何と言っても世は飽食の時代なのだ。今時小さい子供を抱えて冷蔵庫を空にしておく家庭など考えもつかない。

「ねえM、聞いてる。サクタロウは僕を背中に乗せてくれるかも知れないんだ。そうしたら、僕は一緒にアフリカまで旅にでる。サクタロウがいればママなんて要らない」

進太は返事に困ることばかり言う。いつものことだった。Mと会話をするのではなく、

一方的にしゃべりまくり食べまくる。食べ終わった後は決まってテレビゲームを始める。もちろん睦月に内緒で買い与えたものだが、進太は怖くて家に持て帰れない。テレビに接続したままになっているゲーム機を持ち出し、掛け声をかけながらゲームに熱中する。Mのことなど眼中にないのかと思っていると、隙を窺くように話し掛ける。

「M、なぜママはいつも裸でいるの。Mも裸でいることがあるけど、ママほどではないよね」

ゲームに熱中しながら、唐突に問い合わせた今朝の問いも珍妙だった。Mは頬を赤く染め、口を開けたまま絶句してしまった。

三年前にチーフが再開したクラブ・ペインクリニックで、睦月はSM自縛ショーを自作自演している。スナックのホステスではプライドが許さなかったようだ。クリエイティブな仕事をしたいと言うのが睦月の口癖だった。しかし、舞台の上で裸になり、自らを鞭打ったり滑車を使って天井から吊り下がってみたりするショーがクリエイティブだとは到底思えない。Mは睦月のショーを見たことがない。人の目も気にせず励む、ショーの練習を見せられるだけで十分だった。睦月がなぜSMを選んだのかMは知らない。恐らくSMショーの女優をしていたチーフの影響だと思うが、チーフにも睦月にも問いただしたことはない。Mの嫌ったクラブ・ペインクリニックを再開するからには、チーフにも相当の覚悟があったはずだった。チーフも三十八歳になる。サロン・ペインの経営者としての自負もあったと思う。結局、睦月は舞台に熱中した。今では前衛舞台のアーティストと思い込んでいる雰囲気すらある。新しいアイデアが浮かべば自宅でも、すぐ裸になって縄を持ち出し、自縛の稽古に余念がない。子供の進太の目を怖れる睦月ではなかった。進太が言うように、いつも睦月が裸でいるわけではないが、子供心には強烈な印象を与えるに違いなかった。それでも、幼いころから裸の睦月を見慣れた進太は、Mの裸にも頓着しない。たまたまMが裸でいるときも、平気でズカズカと部屋に入ってくるだけの話だった。むしろ羞恥心の育たない進太の成長に問題があると思う。

Mの心の動きを察したように、テレビの画面に見入っているとばかり思っていた進太が急に振り返った。真剣な表情でじっとMの目を見つめる。

「M、お願ひ。今ここで、僕に裸を見せて」

ボーイ・ソプラノで訴えた声が、Mには妙に大人びて聞こえた。もちろん返事につまる。「私はママではないわ。裸で仕事はしない」

答えてしまってからMの心を悔いが走り抜ける。まるで職業蔑視を絵に描いた答えのよ

うに感じた。全身がかっと熱くなり顔が真っ赤になった。すかさず進太がMの長い足に絡みつく。

「ねえM。お願ひだよ。Mはママと違うのはよく知っている。Mは夜の仕事はしないものね」

無邪気なのか、ませているのか判じかねるソプラノで訴え、椅子に座ったMの膝にのし掛かってくる。Mの頬が益々赤く染まる。子供見くびりを指摘されたような気さえした。もうMに勝ち目はなかった。進太が両手を身体の下に差し込み、Mのジーンズのボタンを外す。

「裸になってくれないなら、僕が脱がしちゃうぞ」

甘える声が耳をくすぐり、叱りつけるタイミングを失ったMのジーンズのファスナーが下ろされてしまった。

「今度だけよ」

我ながら陳腐に聞こえる言葉を口にしてから、Mは黒いTシャツを脱いだ。高く上がった豊かな乳房が進太の目の前で揺れる。進太は息を呑んで後ずさる。Mは静かに立ち上がってブラックジーンズを脱いだ。恥ずかしいところなどない裸身だが、子供の進太に穴の空くほど見つめられると、さすがに全身が羞恥で赤く染まった。高く切れ上がった股間で黒々とした陰毛が天を突く。

「わあー、Mはきれいだね。大きくていいよ。大きなお人形さんみたいだ。ママとは段違いたね」

感嘆の叫びを口にして、進太が胸に飛び付いてきた。素っ裸のMが進太を抱き留め、背中を抱く。ちょうど臍の所にきた進太の顔から温かな滴が湧き出し、Mの素肌を濡らした。進太が泣いているのだ。抱き締める腕に力がこもった。

「サクタロウと違って、Mの裸は柔らかで気持ちがいい」

啜り上げる声で進太が訴える。不吉な兆候だった。Mは進太を抱いた腕を解き、静かな声で言う。

「進太、ママの方が私より二十歳も若いのよ。ママの肌の方がずっと張りがあって柔らかいと思うわ」

「僕はママに抱かれたことはない」

怒った声で進太が叫んだ。続けてまた啜り泣く。Mの部屋で始めて見せる態度だった。Mの裸身が全身で戸惑う。

もしかしたら、とMは思い悩む。

進太は睦月とMの二人に、同時に母を見ているのかも知れなかった。そんな馬鹿など、Mは浮かんできた考えを打ち捨てようとしたが、進太の心の中まで見ることはできない。これまで進太の逃避先だとばかり思ってきたMが母に変わる。Mの背筋を冷たい感触が走り抜けた。全身がわなわなと震えだしそうだった。その時、臍の辺りにあった進太の顔が急に下がった。小さな顔をMの股間に埋める。小さな手が両膝を押し開き、あごを持ち上げて口で股間をまさぐる。突き出た性器が強く吸われた。Mの高揚した気持ちが急速に静まっていった。やはり、進太は他人だったとつくづく思って安心する。小さくとも進太は立派な男だ。舌こそ使えないが、乳首を吸う要領で性器を吸い続けている。緊張の解けたMの股間が熱くなり、官能の火が灯る。陰部が濡れてくるのが分かった。きっと睦月も子供のままなのに違いないと、苦い思いが唐突に告げていった。

昼近くになると蒸し暑さがつのってきた。

Mはエアコンのスイッチを除湿から冷房に切り替えた。裸のままだが十分すぎるほど暑い。進太を意識するあまり、服を着るタイミングが今もって見いだせないでいた。まったく不器用だと思うが仕方がない。つくづく子供は苦手だと思うしかなかった。進太は満ち足りた顔でテレビゲームに戻っていた。小さな背中が時折震え、興奮した声が口から漏れる。子供が安心できる場所はゲームの中にしかないのかと思って空しくなる。

「アーア、また負けてしまった。M、お腹が空いたね」

ゲーム機を投げ出して進太が大声を出した。肘掛け椅子に座り、雑誌をめくっていたMの手が止まる。また進太が難題を持ち出しそうだった。

「Mのつくったご飯が食べたいな。家に帰っても、きっと食べさせてもらえないよ」

再び泣き出しそうな、情けない声で進太がMにせがむ。今日の朝食兼昼食は、出社の途中で外食することに決めてあった。元々料理などは得意でない。できるならば食べずに済ます方法を知りたいくらいだった。

「Mのつくったものは、みんなおいしいんだ」

進太が追い打ちを掛けるように言って、Mの顔を見上げた。

「素っ裸で料理はつくれないわ」

服を着るチャンスだと思ってMが即座に応える。

「ママは裸で料理もするよ」

にべもない答えがMを打ちのめす。家に帰っても昼食が食べられそうにない進太を、このまま帰るのが不憫になる。やはりMは負け続けるしかなかった。

「スパゲッティ・ミートソースをつくろうか」

「うん」

即座に進太の明るい声が部屋に響き、昼食のメニューが決まってしまった。

湯で上げたスパゲッティにレトルト・パックのミートソースをかけただけの食事を、Mと進太はテーブルに向かい合って食べた。

「M、おいしいね。Mのつくったものはみんなおいしい」

進太が歯の浮くようなほめ言葉を言う。だが、本当においしそうにスパゲッティを口に運ぶ。Mは料理の天才になったような気がしてまんざらでもない。本屋でレシピを買ってきて、真面目に料理を勉強しようと決心する。

「本当においしい。コンビニエンス・ストアのスパゲッティと同じ味だよ」

進太の一言がMの決心を粉々に打ち碎く。しょせん子供は正直なのだ。素っ裸で食べるレトルト食品の味が気分を最悪にする。黙って服を着ようとMは思った。もう一時間近く素っ裸のままでいるのだ。いい加減にうんざりする。

Mは黙って立ち上がった。

「悪いけど、家まで送ってくれない」

山盛りのスパゲッティを軽く平らげた進太が目を伏せたまま頼んだ。

「いつも一人で帰るでしょう」

答えたMの声がつい荒くなる。

進太は黙ったまま顔を伏せている。しばらくして小さな声で話した。

「僕はおいしいスパゲッティを食べたけど、ママはきっと何も食べていないよ。きっと叱られる。お願い。送っていって」

見下ろしたMの目に、半ズボンの裾から伸びた細い腿が見える。白い肌の上に幾筋もの赤い痣が盛り上がっている。部屋に来たときから気付いていた折檻の痕だ。自然に目頭が熱くなってしまう。

「送っていくわ。でも着替えるまで待って。午後は会社で仕事があるの」

Mが無理に明るい声で答えると、進太が顔を上げた。表情に輝きが戻っていたが暗い目をしている。不吉な予感がMにまで伝わってきた。

2 母子

Mと進太はアパートの南側にある鉄の階段を並んで降りた。Mはサマーウールのアイボリーのスーツを着ている。胸元からのぞくブルーのシャツが、厚く垂れ込めている雲に明るく映えた。二人は北側の市道に回る。アパートの部屋は二階にしかなく、一階は道路に面してガレージになっていた。人が階段を上り下りして暮らし、一階には自動車が収まる。車なしでは暮らしにくい地方都市らしいレイアウトだった。

一番端の駐車スペースに真っ赤なMG・Fが止まっている。祐子から無理やりプレゼントされた車だったが、年式が古くなった割に走行距離は短かった。コスモス事業団の理事長の遺産の中でも、しょせんMしか使わなかった車なのだ。ありがたく使うことにしていた。黒い幌を巻き上げ、MG・Fをオープンにしてエンジンをかける。バックで右に曲がって路上に出たところで助手席に座る進太を見た。不審そうな目をしている進太のアパートは逆方向だった。胸の中で大きく溜息をつく。再びガレージに鼻先を突っ込み、逆にバックする。会社と反対方向に向かうことがおっくうでならない。嫌な予感がまた心をよぎる。思い切りアクセルを踏み込むとエンジンが吼え、鋭い加速感に全身が震えた。やっと平静な気分に戻れそうなところで進太のアパートに着いてしまう。道路の右端に駐車して、仕方なく路上に降り立つ。すぐ目の前がコンクリート造りの平屋のアパートだった。道路に面した壁面にドアが五つ並んでいる。古ぼけているがMの部屋より間取りは広い。二LDKのゆったりした造りだ。

「ただいま」

進太がドアを開き、小さな声で呼び掛けた。先ほどまでの元気がどこへ行ってしまったかと、いぶかりたくなるような陰鬱な態度だ。玄関の奥から返ってくる声はない。開いたドアに手を掛けたまま、進太が首を回してMを見上げる。今にも泣き出しそうな怯えた目だ。消え入りそうな声でMに訴える。

「お願ひM、一緒に入って」

そのまま回れ右をして帰りたい気持ちを押し殺して、Mは進太の開けたドアから玄関に入った。

「こんにちは。睦月、お邪魔するわね」

ことさら明るく声を掛けた。

玄関から伸びた短い廊下を渡って奥のリビングに向かう。Mの後に続く進太は、他人の家に忍び込んだように足音を殺している。藍染めの大きな暖簾を開けてリビングに踏み込むと、西側にキッチンを配した十畳の部屋が一目で見て取れた。南向きの掃き出し窓を背にして、睦月が食卓の椅子に座っている。テーブルの上にはコンビニエンス・ストアーの弁当が二つ並んで置いてあった。眉を吊り上げた睦月の視線がMの身体を突き抜け、背後の進太を見据えている。険悪な雰囲気が部屋中に満ちた。

「進太。朝から無断で出歩いて、人の背に隠れて帰ってくるのか」

鋭い怒声が部屋に響いた。Mの背に張り付いた小さな身体が震える。

「ママ、遅くなってごめんなさい」

観念したように身体を固くした進太がMの前に回って、うつむいたまま小さな声で謝った。

「さあ、早く手を洗ってらっしゃい。ママと一緒にお昼にしよう」

進太の姿を見た睦月の顔が急にほころび、明るい声で言った。

上目遣いに、食卓に載った弁当を見た進太の表情が歪む。Mの目の下で小さな肩先が震えた。二つ並んだ弁当はスパゲッティ・ミートソースだった。

「一人暮らしのMの家にいたんじゃ、お腹が空いたでしょう。早く食べよう」

うつむいたまま立ちつくす進太を訝しそうに見つめ、再び睦月が優しい母を演じる。Mに縁のない家庭の雰囲気を誇っているのだ。

「ママ、僕、お腹が空いてない」

消え入りそうな声で進太が答えた。緊張して怒らせた両肩がブルブルと震えている。一緒に立ちつくすMも居たたまれなくなる。

「睦月ごめんなさい。私がお昼をつくって食べさせてしまったの。進太は満腹で、とても食べられないはずよ」

進太に代わって答えたMの顔を睦月は見ようとしない。優しさを装った顔が途端に険悪になった。

「進太、自分で答えなさい。ママは進太のために無理をしてお弁当を買いに行ったのよ。あなたの好きなスパゲッティを選んだわ。ママの気持ちがこもっているんだから、少しでも食べなさい」

無理強いされた進太の全身が硬直し、うつむけた首を横に振った。

「何を食べたのよ」

再び睦月の怒声が部屋に響いた。

「スパゲティ・ミートソース」

進太の掠れた声が終わらないうちに睦月が立ち上がった。食卓のスパゲッティのパックをやにわにつかみ、進太に向かって力いっぱい投げ付ける。透明のセロファンでラップされたスパゲッティのパックが進太の薄い胸にあたり、貧相な音を立てて床に落ちた。

「進太、そんな身勝手はないでしょう。ママの愛情をないがしろにするなんて許せないわ。懲りるまで罰します。こっちに来て裸になりなさい」

意外に冷静な睦月の低い声が響いた。固く唇を噛んだ進太の身体から急に緊張が解ける。罰が決まれば後は耐えるしかない。肉体を襲う痛苦を耐えることに慣れきった進太の態度がMには悲しい。母と子の異常に緊密な時間がMの目の前で始まるのだ。この場を引き上げるきっかけをMは必死で探すが、隙を見せる睦月ではない。うつむいたまま一步前に進んだ進太の頬に、睦月が強烈な平手打ちを見舞う。頬で鳴るかん高い音と同時に、小さな進太の身体が一メートルほど飛んで床に倒れた。

「素っ裸になって正座するのよ」

左頬を真っ赤に腫らせ、唇の端から血を流した進太に睦月が冷たく命じた。進太は返事もしないで立ち上がり、白い半ズボンとパンツと一緒に脱ぎ、Tシャツを脱いだ。南向きの窓から差し込む梅雨空の薄暗い光が、素っ裸で床に正座した瘦せた身体を陰惨に彩る。

睦月は進太の裸身を憎々しい目で見た。我が子ながら苛立たしさがつのってくる。特に、貧相な股間で自己主張をするようにぶら下がるペニスが憎らしくてならない。まだ勃起することもない、皮を被ったままの排泄の役にしか立たないペニスだが、やがてこのペニスが成長し、女を喜ばすかと思うと醜悪でしかない。なぜ二十八歳の私が、自分のためにならない醜悪な性の面倒を見続けなければならないのかと思ってしまう。自分の命を刻むようにして乳を与える、下の世話をし、しつけをしてきたのに、思うような答えが返ってきた試しはない。日毎夜毎、空しい苛立ちだけがつのっていく。私の可能性と希望はどこに行ったのかと思い悩み、ただひたすら進太を責める。悪い母だと思うが、道は閉ざされたままだ。進太ではなく修太に逢いたいと、睦月は今、心の中で叫んだ。大きく息を吸って睦月は小さな裸身から目を反らす。食卓の下に置いた箱からSM自縛ショーで使う乗馬鞭を取り出し、正座した進太の正面に座った。

「あやまれ」

低い声が響き、乗馬鞭が進太の太股を打つ。小さな膝を合わせて正座した太股には、昨

夜鞭打たれたばかりの赤黒い痣が浮かんでいる。その痣の上にまた鞭が飛んだ。

「ヒィー、ごめんなさい」

哀れな悲鳴と謝罪の言葉が進太の口を突くが、睦月は容赦しない。何度も何度も乗馬鞭が幼い素肌を責める。鞭打たれる度に進太は小さな尻を窄め、腰を振って悶える。股間に見え隠れする小さなペニスが淫らに蠢く。やがて太股を襲う逃れがたい苦痛が、幼い股間に快楽の小さな火を灯す。進太は全身に脂汗を吹き出させ、腰を振り続けるうちにペニスの芯が熱くなってくるのを感じた。リビングの隅に立ちつくしたまま、陰惨な光景に釘付けにされたMの目にも、股間で膨らみ掛けたペニスが見えた。

「ママを馬鹿にするの」

一声大きく叫んだ睦月が鋭くペニスの先を打った。

「ムゥー」

切ない悲鳴を残して進太の身体が前に崩れる。

「ちゃんと正座しなさい。ママはまだ許していないわ」

睦月が残酷に告げる。もうMには耐えきれなかった。

「やめなさい睦月。お願い、許してやって」

Mの悲痛な声に睦月が振り返った。今日初めて、二人が視線を交わし合う。Mが大きくうなずいて口を開いた。

「進太に、お昼を食べさせたのは私よ。私にも責任がある。いくらあなたの家庭のしつけだと言っても居たたまれないわ。度を過ぎた虐待にしか見えない」

乗馬鞭を握ったまま睦月が腕組みをして、じっとMの顔を見上げた。

「M、余計なお世話よ。進太は修太と私の子供よ。あなたに修太を殺された私には進太を一人で育て上げる責任がある。子無し女のMには、その責任がないんだから気楽なものよ。それとも進太に代わってMが罰を受けるつもり」

意地悪く言った睦月が胸を張ってMを挑発した。とんだ矛先が向かってきたものだと思って、Mは内心辟易とする。睦月の苛立ちが哀れでならない。子供が子供を産んで育てているとしか言いようがなかった。だが、睦月は進太の母に違いないのだ。その進太を守る義務がMには確かにあると思い定めるしか、この場を納める道はなかった。

「いいわ、私が代わる。睦月、私を責めなさい。あなたの折檻はただの気晴らしで、しつけとは何の関係もない。いくらあなたの子供でも、進太を病的な世界に巻き込む権利はないわ」

「M、よく言ってくれたわね。私は好きこのんで進太を育てているわけじゃない。文句があれば修太を返せ。これまでも散々子育ての邪魔をして、進太を無責任に甘やかせてきたのはMだ。隠そうとしても私はみんな知っている。二度と子育ての邪魔ができないように、懲りるまでお前を折檻してやる。進太と同様素っ裸になれ」

憎々しく言い切った睦月の目の奥で、暗い炎が燃えている。満たされぬ性と、出口の見えない絶望感が、卑屈な炎になって燃え上がろうとしているのだ。Mの全身を深い悲しみが満たす。

「いいわ。好きなようにしてみるがいい。でも、私はこれから会社で仕事がある。午後五時まで待って。絶対戻って来るから、もう進太は許してやって」

しっかりした声で答えたMを遮り、睦月が憎々しい声で応じる。

「Mは狡い。本気じゃないんだ。いつでも私を軽んじている。仕事と子供とどっちが大事だ。Mが戻るまで進太は許さない」

睦月は右手の乗馬鞭を投げ捨て、食卓の下から青いロープを取り出す。SM自縛ショードを使う柔らかで弾力のある太めの繩だ。正座した進太の後ろに睦月が届み込み、細い両手を裸の背中にねじ上げ、進太を厳しく縛り上げてしまった。

「Mが戻るまで、進太はこうして縛っておく。トイレも使わせない。みんなMのせいだ。子供がかわいそうなら早く戻ってくるんだね」

口元に薄笑いを浮かべ、Mを見上げて声を高めた睦月の顔は、とても母の顔には見えない。敵対者に哀れな人質を見せつける卑怯者と変わりがなかった。あ然としたMの口元に力無い苦笑が浮かぶ。

「睦月、正気とは思えないわ。進太はあなたの子よ。まるで敵の子供のように責め苛んでいるわ」

静かな声で抗議するが、睦月は動じようとしない。相変わらず薄笑いを浮かべ、進太の剥き出しの二の腕をつねった。

「ヒィー、M、お願い、早く帰ってきて」

進太の悲鳴と睦月の高笑いが重なり、十畳のリビングに陰惨な臭気が満ちる。

「きっとMは、急いで帰るでしょうよ」

悲惨な光景に背を向けたMに、睦月の声が追い打ちを掛けた。

Mは歯を食いしばって短い廊下を渡り、玄関に出る。これ以上、異常な母子に翻弄されてたまるものかと決心して靴を履く。足を通した黒いパンプスの隣に、汚れきって穴の開

いた進太の運動靴が並んでいた。こわばったMの頬を涙が伝う。悲しすぎる母子が、Mを底なしの沼に引き込むのだ。

3 商談

バイパス沿いにある警備会社の構内には、パトロール車両が二台待機していた。日曜日にも関わらず、普段と変わらない緊張した雰囲気がMの気持ちを落ち着かせる。鉄筋コンクリート造り四階建ての社屋は貸しビルだが、現在は全体を警備会社が使用している。警備業務に加え、手広く人材派遣業に業態を拡張した社の業績は順調だった。Mが工事現場の交通誘導要員として働きだした三年前は、一階のオープンスペースしか借りていなかった。たかが三年が経過しただけだが、社業の発展には誇らしささえ感じられた。Mは社屋裏の職員駐車場に向かう。

正面玄関前の来客用の駐車スペースには紺色のシーマが駐車してあった。これから人材派遣の仕事で会うことになっている、水瀬産業社長の愛車に違ひなかった。新興の中小企業の経営者にふさわしい車だ。ベンツやBMWとは人に与える信頼度が違う。地道な商売を続けていく意気込みを、問わず語りに取引先に伝えることができる。Mは約束の時刻に遅れたことを恥じた。ダッシュボードの時計は午後二時を七分回っている。十分間の遅刻になりそうだった。職員駐車場に回るのをやめ、Uターンしてシーマの横にMG・Fを止めた。急いで玄関をくぐり、Mに敬礼する当直の警備員に目礼を返しながら正面階段を上った。二階の応接室のドアの前で、Mは大きく息を吸って呼吸を整える。軽くノックしてから勢いよくドアを開いた。

「いらっしゃいませ。お世話になります」

はっきりした節度ある声が室内に響いた。Mは約束の時刻に遅れたわびは言わない。まだ商談の内容がはっきりしないのだ。始めから下手に出る必要はなかった。Mの声で、ソファーに並んで座っていた三人の男女が一齊に立ち上がった。次々に挨拶の言葉を述べる。水瀬社長と極月の間にいる、今日初めて会う長身の男は沢田と名乗った。三人にそれぞれ挨拶を返してから、Mは改めて席を勧めた。テーブルを挟んで全員が席に着くと同時に、水瀬社長が口を開く。

「早速だがMさん。今日は二つのことで相談に乗ってもらいたい。私は人事案件は日曜日に済ますのがモットーなので、ご迷惑だろうがご協力願いたい」

早口で用件を切り出した水瀬社長は、薄くなった髪をきちんとなでつけ地味なグレーのスーツを着た目立たない男だ。社長というより銀行の支店次長といったタイプに見える。

太い眉の下で丸い目が忙しなく動く。頭の回転も速いに違いない。人事案件という言葉で、用件の一つはMに予想できた。極月の処遇に相違なかった。優秀すぎる人材を派遣すると、往々にして派遣先に引き抜かれることがある。人材を評価されたうれしさはあるが、今後の営業を考えると頭が痛くなる話だ。人を商品として売り込むビジネス特有の悩みでもあった。

「まず、一点目は言い出しにくい。率直に言えば、極月を我が社に譲り受けたい。もう一点は、マネジメントのできる人材を三人、一ヶ月ほど派遣して欲しい。この二点で相談がしたい」

水瀬社長が短く言って口をつぐんだ。意見の撤回はしないという強烈な意志が口元に溢れている。答えを促すように丸い目でMを見つめた。Mは黙ったまま水瀬社長の隣りに座る極月に目を移した。モスグリーンのスーツを着た極月の頬がほんのりと赤くなっている。襟元にのぞくベージュのシャツが、窓から入る日を浴びてまぶしい。しなやかな身体を真っ直ぐに伸ばし、Mの視線を捕らえて口を開いた。

「Mにも警備会社にも、仕事の機会を与えてくれたことを感謝しています。でも、自分の能力を認められ、求められることは恥ずかしいほど誇らしい」

至極当然の言葉だった。自らの価値を認められて喜ばない者はいない。Mは小さくうなずき、水瀬社長に視線を戻した。

「派遣した人材が喜ばれてこそその仕事です。本人も移籍を望んでいる。私の一存では即答できませんが、恐らく問題はないでしょう。移籍に当たっては能力に見合った処遇をお願いします」

「ありがとうございます。もちろん最高の処遇で迎えますよ」

満面に笑みを浮かべ、弾む声で水瀬社長が答えた。

「M、ありがとう。そう言ってくれると思っていたわ。二つ目の案件については水瀬産業の社員として、私が説明します」

水瀬社長の言葉を引き取るように極月が言い、Mの前に名刺を置いた。水瀬産業の社用の名刺だ。氏名の前に「社長室システム開発課長」と誇らしく肩書きが印刷されている。何のことではない、すでに処遇は決められ、事後承諾を求められただけのことだった。Mは憮然とした表情で極月の目を見つめた。極月は口元で小さく微笑み掛けてくる。まるで、小さないたずらをとがめられた少女が見せる仕草のように邪気がない。はじめからMの寛容を信じ切っている風情だ。Mの表情に動じる気配も見せず仕事の話を始める。

「これからお願ひすることは、弊社とは直接関係がありません。広域チケットサービスのコンピューター・ネットワーク開発事業に付随して依頼されたものです。七月一日から三十一日までの一ヶ月間、こちらの沢田さんが率いる劇団が稽古のため煉瓦蔵に合宿します。この合宿のマネジメントができる人材を三人派遣して欲しいのです」

極月が簡潔に用件だけを切り出して、隣りに座る沢田に目を向けた。極月の後を引き取って沢田が話し始める。

「劇団・真球は国際演劇祭に向け、この市で稽古に専念したいのです。いわゆる裏方の業務の一切を、御社が派遣する人たちにこなしていただきたい。煉瓦蔵はアーティストのイメージを駆り立ててやまないロケーションです。せっかくのイマジネーションを雑事で惑わされたくないのですよ」

沢田の声は歯切れのよいバスだ。腰のまわりに鳥肌が立ちそうなほどセクシーな音質だった。しかし、早口で神経質なところがMの気に障った。自分の声の美しさを武器にできない者に、どれほどの芝居ができるのだろうかと思ってしまう。言っている内容も空疎で自己勝手な要望だけだ。Mを見つめる大きな目も、違和感を感じるほど熱く燃え上がっているように見えた。

「何名様が、どこで合宿なさるのですか」

努めて冷静な声でMが尋ねた。

「十五人。いや、今回は九人。だから、余計なスタッフ業務はさせられない。僕は今回の出し物に、芝居生命を賭けているんだ。すべての役者に、肉体表現の限界まで演じさせてみせる」

宙を見つめた沢田の口から素晴らしいバスがこぼれた途端、またMの耳の底で言葉が空疎な呪文に変わる。Mの気持ちを察した極月が、沢田の話を急いで引き取った。

「沢田さんのイメージでは、煉瓦蔵の周辺のアパートや民家などに分散して宿泊したいそうです。一ヶ月間を煉瓦蔵を中心とした地域の中で暮らすことによって、演劇のインパクトを高めたいのだそうです。しかし、この暮らしはあくまでも擬似的なもので、人為的に創作して欲しいとのことです」

沢田の希望を代弁する極月の口元がまた笑っている。地に足の着いていない話はもう懲り懲りだった。極月と沢田のどちらへともなくMがつぶやく。

「具体的に言って欲しいですね」

「私見では、煉瓦蔵を中心とした地域をホテルのような感覚でアレンジして欲しいと言う

ことでしょう。ビジネスホテルに泊まるより、臨場感があります」

さり気なく極月が答えた。

「そうそう、ようは離れた旅館でなく、煉瓦蔵の近くにいたいってことですよ」

うんざりした顔で三人の会話を聞いていた水瀬社長が、ぶっきらぼうな声で間に入った。

「いや、劇団員には積極的に暮らして欲しい。周辺の人と打ち解けた生活をさせたい。近くの銭湯に行かせ、商店街で買い物もさせたい。稽古の期間中は、もちろん自炊をさせる。僕が劇団員に求めるのは、表現力としての肉体なんです」

強い口調で沢田が水瀬社長の言葉を遮った。あくまでも自分独自のイメージに固執するつもりのようだ。夢想を実現できる人材などいるはずがない。派遣した人材と劇団とのトラブルが目に見えるようだ。傷がつくのが分かっていて大事な商品を派遣することはできない。だが、水瀬社長の顔をつぶすわけにもいかなかった。即座にMは、自分自身で処理することに決定した。

「お申し出の件は、ただ人材を派遣して済むこととは思えません。どちらかというと環境をコーディネートする仕事です。費用はいくらか割高になりますが、劇団合宿の環境づくりとしてお引き受けしたいですね。よろしければ私が直接担当します。ただし、人材の派遣ではないので、いつも現場に人がいるというわけにはいきません。あくまでも、九人の劇団員で一ヶ月の稽古合宿ができる環境の整備と管理をお引き受けします。いかがですか」

「僕は賛成です。かえって自然な暮らしが楽しめそうだ。何よりもMさんが担当してくれるなら安心できる」

沢田が身を乗り出して賛意を表明した。Mに向けられた大きな目が一段と燃え上がっていいる。白いものが混じった長めの髪が慌ただしく揺れた。早口のバスの語尾も甘く震えていた。沢田が納得したこと、水瀬産業には何の異議もない。かえって、やっかい払いができる、ほっとしたという雰囲気さえ社長のまわりに漂っている。今日の案件はすべて終了した。和やかな表情で席を立った三人をMは玄関へと見送る。

シーマの横で水瀬社長と短く言葉を交わしていた極月が戻ってきて、Mの横に立った。
「今日の仕事は終わったわ。社長の許可をもらったから、私はMと一緒に帰る。いいでしょ？」

Mの都合も聞かずに極月が一方的に言って、走り出したシーマに頭を下げた。Mも慌てて頭を下げる。後部座席に座った沢田が無遠慮にMの全身を見つめていた。

「沢田って男、変わっているでしょう」

バイパスをしばらく走ってから、助手席の極月がMに声を掛けた。ずっと黙っているMの態度に、さすがの極月も気詰まりにならしかった。

「あなたたちが連れてきたお客様よ。私に押し付けておいて、変わっているもないもんだわ」

「Mに叱られるゆえんはないと思うわ。少なくとも、一か月で延べ九十三人の人材を派遣できる客を紹介したのだし、客の中には変わった人がいても不思議はない。私は、私の印象を確かめたかっただけよ」

Mのなじる言葉に極月が冷静に答えた。相変わらず明快な性格が今のMには新鮮に映る。ねちねちと絡みついてくる睦月とは正反対だ。この後待ち構えている睦月との対決の前に、極月に会えてよかったと心から思った。話し掛けられるまで黙っていたことが悔やまれてしまう。Mは素直に兜を脱いだ。

「そうね、私にも変わった人に見えたわ。沢田さんことを、詳しく教えてちょうだい」

普段どおりのMの声を聞いて、固くなっていた極月の体がほぐれる。リラックスした答えがオープンにした車窓から流れしていく。

「沢田正二、五十歳。劇団・真球の主宰者で演出家。旧財閥の御曹司の外孫で資産に恵まれているわ。これまでに国際演劇祭で五回の入選歴があり、今回は満を持してグランプリを狙う。実際はこんなことしか知らないの。ごめんね、無責任かな」

「どんなジャンルの演劇なの」

「アヴァンギャルドよ」

「なに、それ」

「知らないわよ。本人がそう言ったわ。前衛かなんかじゃないの。ヌードも出るそうだから。詳しいことはMが直接聞いてよ。きっと、うんざりするほど解説してくれるわ」

極月の無責任な声が、暮れかかったような暗鬱な空に消えていった。まだ四時を回ったばかりなのに、スマートランプを点灯した対向車も目立って増えてきた。季節が冬に戻ったような天気だが、気温だけがやけに蒸し暑い。水瀬川に架かる大橋を渡りきって市街地に入り、織姫通りに合流する信号でお定まりの渋滞に巻き込まれた。

「極月の課長昇進を祝ってディナーをおごりたいわね。今夜の予定はあるの」

真っ直ぐ前を向いた極月の横顔にMが呼び掛けた。途端に極月の頬が赤く染まる。

「やはり、移籍の件で腹を立てたのね。Mは気短になったわ。歳のせいとは言わないけれど、良くない傾向よ。中小企業の名刺の肩書きなんか、全員が課長か部長だわ。水瀬産業に派遣されて持たされた名刺があれなの。ちょっとMをおどろかせてみたかっただけよ。やきが回ったんじゃないの」

気短なのは極月のほうだとMは思う。有能なビジネスマンとして評価されるようになつても、Mの前では悪振りたいのだ。昇進して移籍することを指摘されて照れているだけだった。即座に筋書きを作ってしまう頭の回転の良さには舌を巻いてしまう。しかし、水瀬産業では派遣社員に名刺を持たせた前例はない。Mはことさら冷たい声で尋ね返した。

「そう、一緒に食事をしたくないのね」

「私はそんなことは言ってないわ。でも、ディナーをおごられるのはいや。Mの部屋で手作りの料理をごちそうになる」

ことさらに首を曲げてMを見た極月の口が、意地悪そうに笑っていた。Mは心底怒りたくなる。

「極月の嫌味は年期ものだわ。私がレトルトパックの料理しかできないことを、とうに知っているでしょうに。当てつけとしか思えない」

「ハハハハ、またすぐ怒る。まだ宵の口にもなってないわ。料理は私が作る。Mは私の料理でもレトルトパックでも、お好きな方を選べばいい。とにかく、レストランでなくMの部屋で食べましょうよ」

極月の笑い声が響き、前の車が発進した。いつもの生意気な物言いに閉口しながらも、アクセルを踏み込むMの気持ちは爽快だった。

最高のローストビーフを作るという極月に付き合い、Mは肉屋とスーパーと酒屋に寄り道した。MG・Fの狭いトランクに、大きな牛肉のブロックと様々な香味野菜の入った袋と、ブルゴーニュのルージュと冷凍のフライドポテトを入れた袋が仲良く並んだ。Mは自分の食生活の貧しさを思い知らされるようで情けなかった。でも、誰が作るにせよ本格的なローストビーフは大歓迎だ。メインデッシュの横に添えるフライドポテトを、できるだけ慎重に揚げようと思った。足取りも軽くアパートの階段を上がり、Mと極月はキッチンのテーブルに向かい合って座った。Mの肩越しに流しを見た極月の眉が上がる。

「いくら忙しくても、食事の後片付けは出掛ける前にしておいたほうがいいわ。帰って来てからしようとしても、うんざりしてしまって、次の料理がしたくなるでしょう。この悪循環は、必ず繰り返すわ」

Mは返す言葉もなくうつむいてしまった。すべてもっともな話で、いつも悔恨にとらわれてしまう事実だった。よりによって進太と食べ散らかしたスペゲッティの残骸を極月に発見されるとは思いも寄らなかった。日頃の悪しき習慣を呪うしかない。上目遣いに見た時計は五時十分前を指している。睦月と約束の時刻まで十分しかない。知っていて極月を食事に誘ったことを恥じた。しかし、睦月との過酷な時間に耐えるには、楽しい食事が待っているに越したことはなかった。Mは小さな声で極月に約束を告げた。

「最大限に反省するわ。このとおり顔も上げられない。ついでに、もう一つ謝らなきやならない。私はこれから睦月と約束があるの。一時間ほどで戻るけど、流しの後片付けも料理の手伝いもできないわ。ローストビーフはどのくらいができるの。食事だけは、ぜひ一緒にしたい」

Mの言葉で極月の頬がぱっと膨れた。突き出した口から機関銃のように言葉が打ち出される。

「食事を誘ったのはMよ。おしゃべりしながら一緒に料理を作るのも食事のうちでしょう。だから私は手作り料理がいいと言ったのよ。おしゃべりなしで、私が一人で料理をすれば、確かに効率がいいから一時間ほどで出来上がるわ。でも味気ないでしょう。私はコックじゃないわ。何が睦月と約束よ。子供を虐待するのが趣味の女と会う必要がどこにあるの」

下を向いたMの頭上を非難の声が駆け抜けていく。余りにも正当な非難に、Mは顔を上げることができない。すべての感情を声にこめて極月に投げ掛けるしかなかった。

「極月、私も行きたくない。でも、今は進太のために行かなくてはならないの。睦月の虐待を止めに行くのよ。お願い、私のために最高のローストビーフを作つて待つていて。あなたと一緒に夕食を食べる楽しみが、きっと嫌な時間を耐えさせてくれる。ねえ、たった一時間よ。六時までには必ず戻る」

言い終わって恐る恐る顔を上げ、極月の顔を見た。目が合うとまた極月が意地悪そうに笑った。並びのよい白い歯が蛍光灯の光を美しく反射した。今日、何回笑われたか数え切れないくらいだった。白い歯が消え、代わりにしっかりした言葉が落ちてきた。

「端的に言うと、睦月には子供を育てる資格がない。ほかにすぐるもののない女が一人、子供にすがりついて猫かわいがりしている。もう一人の女は、大きく開けていくかも知れない将来に対する野心を抱え、足手まといになった子供を憎み続けている。つまり睦月の人格は二つに分裂している。病気なのよ。病人に育児は任せられないわ。鉱山の町に住む修太の両親が子供を引き取るべきよ。Mがやりにくければ私が連絡してもいい。Mは決断

すべきよ。そのきっかけになるのなら、私は一人で料理を作つてMを待つ。まず、睦月と会わなければならぬ理由を聞かせて欲しい」

極月の言うことはすべて、眞実的一面を言い当てていた。Mは折檻の身代わりになると
いう一点をのぞいて、今朝からの出来事のすべてを極月に話した。

「いいわ。行ってらっしゃい。帰つて来たら、進太のために最上の道を考えましょう。と
びっきりのローストビーフを作つておくわ」

極月の了承する言葉を聞いて、Mは椅子から立ち上がつた。見上げた時計の針はまさに
五時丁度を指していた。間違ひなくまた遅刻だった。

「待つ時間は、きっちり一時間よ」

極月の告げる制限時間を背中で聞きながら、Mはドアを開けて外に飛び出して行った。

睦月のアパートの前にMG・Fを駐車するのももどかしく、車を飛び降りたMは玄関ドアを激しくノックした。人通りのない日曜日の住宅街の垂れ込めた雲の下に、慌ただしいノックの音だけが空しく響き渡った。返ってこない答えにいらだち、力いっぱいノブを回すとあっけなくドアが開いた。拍子抜けした手元から耳に静寂が伝わってくる。静けさの中に遠く、陽気なリズムが忍び寄る。鼓と鉦が織りなす八木節音頭の調べだ。そういえば、八月一日から始まる八木節祭りに備え、各町会の子供たちが練習を始めたよい時期だった。多分、小学校一年生になった進太も、町内会の子供八木節のチームに誘われているはずだった。

チャカポコ、チャカポコ、遠く近く八木節のリズムが聞こえてくる。蒸し暑さが全身を被い、首筋に汗が噴き出してきた。Mは軽く頭を振って狭い玄関に入りドアを閉めた。八木節のリズムが消え去り、真っ暗な闇の先に地獄の火のような明かりが見えた。誘蛾灯に誘われる羽虫のように、Mは暗い廊下を渡ってリビングに向かう。待ち受けている試練の見当はつく。前に踏み出す足が重く、ともすれば回れ右をして逃げ帰りたくなる。

「七分の遅刻だ。言い訳は聞かない。謝罪して罰を願え」

Mがリビングに踏み入ると同時に睦月の叱声が襲い掛かった。睦月は食卓の前に座り、灯したスタンドの明かりを浴びた横顔をひきつらせている。テーブルの下の暗がりに進太の白い裸身が見えた。進太は大きなプラスチックのたらいの中に正座させられている。午後別れたときと同様、後ろ手に縛られたままだ。二の腕から薄い胸へと緊縛した二本の縄目が哀れでならない。部屋に踏み入ったMを認め、進太がうなだれていた顔を上げた。長時間泣き疲れた汚れた顔だが、大きく見開いた二つの目が光っている。

「約束どおり帰って来たわ。さあ早く進太の縄を解いて、服を着せてやってちょうだい」

落ち着いたMの声がリビングに響いた。声に反応して進太の目の輝きが増す。素っ裸で後ろ手に縛られた、悄然とした姿に不似合いな目の輝きがMの気に掛かった。Mは進太の視線を捕らえて一心に見入った。少しも希望を失わず、かといってMに縋り付くでもない、冷静な理性の輝きさえ感じさせる視線だった。疲れ切ったMの心の奥に一瞬、熱い感動が走った。約束どおり帰ってきて良かったと実感する。睦月の理不尽な折檻が繰り返される度に傷つき、その傷を梃子にして少しづつ成長していった少年の矜持を見る思いがした。

Mの足元から徐々に勇気が立ち上がってくる。眉を吊り上げている睦月の顔を見据え、Mは毅然とした声を出した。

「睦月、あなたの子供は成長したわ。進太にはもう焦燥も恐怖もない。私が帰ってきたことを、事実の一つだと認める分別がついているわ。さあ、無駄な折檻はこれまでにしなさい」

Mの冷静な声を聞いた睦月がとっさに息を飲んだ。微かな動搖が見て取れた。だが睦月は椅子を鳴らしてすぐ正面を向き、背を反らしてMを見上げた。口元に冷たい笑いが浮かんでいる。

「よく帰って来たと、ほめてもらいたいのか。威張ってないで、早く素っ裸になって遅刻を詫びろ。何度も同じことを言わせるな。私は暇じゃない」

睦月が繰り返す理不尽な要求を、Mは苦笑を浮かべて聞いた。

「遅れたことは詫びるけど、裸になる必要はないわ」

「いや、必要はある。進太の身代わりになって帰ってくるとMは言った。進太と同じ扱いを受けなければ身代わりじゃない。今度も私たち母子をだますのか」

子供と変わらない無理を睦月は言い募る。それが睦月のやり方だ。素っ裸で縛られた進太を前にして、睦月に試されているのだとMは思う。議論にならない時間が惜しい。行き着く道は一つしかないのだ。睦月の思うつぼだと奥歯をきつく噛みしめたが、すでに大きく首を縦に振ってしまっていた。

「いいわ。裸になって身代わりになる。好きにしたらいいわ。でも、睦月に割ける時間は一時間きりよ。いいわね」

きっぱりと言い切ったMが睦月を睨み、スーツとシャツを脱いで裸になった。スタンドの明かりが四十五歳の裸身を残酷に照らし出す。股間に燃え上がる黒々とした陰毛が屈辱に震える。思わずうなだれた視界のすみに進太の輝く目が映った。その瞬間、Mの裸身がピクッと震えた。進太にも試されていると改めて思い定める。Mは真っ直ぐ背筋を伸ばした。睦月の視線を正面から捕らえ直し、穏やかな声で訴えた。

「さあ、裸になったわ。進太を許してやって」

Mの言葉を無視して睦月が椅子から立ち上がった。頭一つ小さい睦月がMの正面に立つ。赤いトレーナーの下で盛り上がった乳房が大きく揺れた。

「ふん、まだだめだね。床に正座して遅刻を詫びるんだ。その後、罰を受けるのよ。進太の代わりにMを縛る。気が済むまで折檻してやるわ」

憎々しい声で命じた睦月の言葉に従い、Mは両膝を床に突いて正座した。力強く首を反らして睦月の顔を真っ直ぐ見上げる。すでに常識を逸した世界が始まっていた。荒れ狂う感情だけがMの肉体の上を通過していく世界だ。その感情は憎悪と呼ぶべきものに違ひなかった。Mは一切を見続け、堪え忍ぶことに自らの矜持を賭けるしかない。Mは再び進太に視線を巡らせ、小さく輝く両目を捕らえてしっかりとうなずいて見せた。進太が小さくうなずき返す。Mは素っ裸で正座したまま床に両手を突き頭を下げた。

「そんな、お上品な詫び方では済まないわ。もっと尻を上げて、ひたいを床に着けるのよ」

睦月の高ぶった声がMの頭上から落ちてきた。微かに語尾が震えている。言葉に従うMの耳には喜びに震えているように聞こえた。浮かせた尻がこそばゆくて仕方がない。

「よし、そのまま膝を大きく開き、股間に両手を通すんだ。そうそう、右手で右足首、左手で左足首を握るようにするの。もっと尻を突き出し、ほっぺたで床を支えるのよ」

睦月の口から次々に指示が飛んだ。Mは後方に裸の尻を突き出し、膝の間に両手を入れて身体を丸くした。ぴったり床に着けた頬が痛く、呼吸が苦しい。

「大きな尻が桃のように見えるよ。その格好で桃縛りにしてやる」

背後から睦月の声が響き、尻の後ろに屈み込む気配がした。羞恥心が全身を襲い、思わず尻の穴をすばめる。睦月の目の前で、尻の割れ目の中心に開いた赤い肛門が可愛らしくすばんだ。睦月はフンッと鼻で笑い、素早くMの右手をつかむ。二つ折りにした縄で右手首と右足首を素早く縛り合わせた。冷たい縄の感触にぎょっとして、Mは自由になる左手を引っ込めようとした。だが、見苦しい振る舞いは睦月を喜ばせるだけだと思い直し、息を潜めて目をつむった。じっと次の戒めを待つ。睦月は手慣れた縄さばきで、またたく間にMの両手首と両足首を縛り合わせた。素っ裸で尻を突き出したMは、もはや床に這いつくばったまま身動きもできない。さすがに恥ずかしさで全身が赤く染まる。

「ハハハハ、M、いい眺めだよ。大きな尻の真ん中で臭い肛門が丸見えだ。股間に顔を出した性器まで見える。まったく恥ずかしいことこの上ない」

睦月の笑い声が部屋中に響いた。剥き出しの尻が肌寒いが、全身の皮膚から汗が噴き出す。肺に吸い込む空気がやけに暑い。Mは横顔を床に着けたまま目だけ動かして睦月の姿を追った。だが、背後にいる睦月の姿は視界に入らず、見上げた位置に進太の顔が見えた。心配そうに震える進太の視線に苦笑して微笑み掛けた。恐怖にひきつった口元で、無理に微笑み返す進太の顔が大きく揺れた。途端に尻に激痛が走る。ピシッという鞭音が部屋

に響いた。

「ヒッ！」

不意をつかれたMの口から悲鳴が漏れた。いつの間にかMと進太の間に立った睦月が、乗馬鞭を握ってMを見下ろしている。

「どこまで私たち母子を馬鹿にしたら気が済むんだ。そんな恥ずかしい格好で進太に色目を使うなんて許せない。私を軽蔑している証拠だ。謝れ」

声を震わせて睦月が叫ぶと同時に、二発目の鞭が尻を襲った。

「睦月の誤解よ。私は誰も軽蔑はしないし、馬鹿にしてもいい。悲惨な目に遭っている進太を励ましただけよ」

「クソッ、悲惨な目に遭っているのはお前だろうが」

睦月の一喝と共に連続して三発、激しい鞭が剥き出しの尻を見舞った。真っ白な尻に五条の鞭痕が赤黒く残った。身体の芯まで届きそうな痛みが、ゆっくりと素肌から筋肉へと染み込んでくる。Mの目尻から涙がこぼれた。

「私はいい。我慢できる。でも、早く進太の縄を解いて、許してやって」

「また、おためごかしを言う。進太は私の子だ。Mにとやかく言われる筋合いはない。それを、ままごと気取りで母親めかし、甘えさせて喜んでいるのが許せないんだ。何が社会人だ、警備会社の主任様だ。独り者の泥棒猫が子供をくすね、仕事の気休めに遊んでるだけじゃないか。何が生活費だ。何が小遣いだ。ピアニストの遺産を独り占めにしたMが、私たち母子に金を出すのは当たり前の話だ。私だって、好きこのんで貧乏してるんじゃない。懸命に働いている。人前に裸だって晒す。今のお前より、よっぽど恥ずかしい格好だってするんだ。その私の舞台を、Mは一度でも見に来たことがあるか。Mが言うように職業に貴賤の差別がないのなら、ましてや、私たち母子の世話を焼きたいのなら、見に来るのがあたりまえ。私を軽蔑し、馬鹿にして、陰で進太に川原乞食だと吹聴しているのが関の山だろうが」

一気に言い終わった睦月が、ことさら激しく鞭を振るった。無惨に突き出た尻で鞭音が響き、陰惨な鞭痕から細く血が滲んだ。Mの目から堰を切ったように涙が流れ出した。堪らない悲しみが波のように襲ってくる。睦月の断定が悲しいのではなく、ねじ曲がってしまった心根が悲しかった。睦月の足の間に見え隠れする進太の顔も悲しい。

「睦月の言い分も少しさは分かる。確かに私はペイン・クリニックの睦月のショーを見に行っていないわ。その点は反省する。SMショーについて、私とチーフの意見が合わないの

よ。それが足を遠ざけていた理由。睦月には関係ないの。今週の土曜日には、きっと舞台を見に行く。約束するわ。でも進太のことは、すべて睦月の誤解よ。あなたが折檻をやめれば、私は進太に会う必要もない。進太はあなたの子よ。なぜ、自分の子を死ぬほど辛い目に遭わすの。今日からは、いつでも私が身代わりになる。進太を折檻することだけは許さない」

静かに訴えるMの声を睦月が再び鞭で遮った。Mの口から悲鳴が上がる。

「ショーを見に来るのはMの勝手だ。だが、進太は私の子だ。他人のMに家族への干渉はさせない。お高く止まった今までの言い振りを、たっぷり母子で矯正してやる。おまえの望みどおり進太は許す」

言い捨てた睦月が後ろを向いて屈み込み、進太を後ろ手に縛った縄目を解いた。進太は長時間縛られ続けて痺れてしまった両手を前に回す。たらいに溜まった尿で汚れた足をタオルで緩慢に拭いた。やにわに睦月が進太の頬を打つ。

「進太、のろのろしてるんじゃない。玄関のドアに鍵をかけてくるのよ。さあ、早く」

「はい」

震える声で答えた進太が玄関に向かって駆け出して行く。ふらつく足が伝える振動が、床に着けたMの横顔に悲しく伝わってくる。

「さあ、Mも上を向いて、私たちに顔を見せるのよ」

冷酷な声で言った睦月がMの両肩に手を掛け、全身を拘束された裸身を仰向けにころがした。続けて辛らつな批評が睦月の口を突く。

「ほう、すごいね。今度は乳房と股間が剥き出しだ。黒い陰門がぱっくり口を開けているよ。偉そうなことを言う上の口とは正反対で、下の口は行儀が悪い。大好きな進太に手酷く罰してもらうといい」

玄関から戻ってきた進太は、睦月の後ろに恐る恐る立っている。

「ほら、進太。もっと前に出ないと仰向けになったMには、お前が見えないよ。ママの前に来なさい」

命じられた進太が、うなだれたまま大きく開かれた股間の前に立った。睦月があざけった、ぱっくり開いた陰門が進太の目に晒されていると思うとMの顔は羞恥で赤く染まる。意識に関係なく陰部の奥が熱くなり、しどに濡れそぼっててしまいそうだ。Mはかたく目をとじ合わせて残酷な時間に耐えようとした。しかし、火の点った官能は暗闇の中で大きく燃え上がる。

「嫌だね。Mはスケベの神體だよ。若い私だって子供の前では遠慮がある。それが、この女は四十五歳にもなって、恥ずかしげも無く股間を濡らす。よっぽど淫らな生活を送っているに相違ない。ピアニストがかわいそうだ。二人で死ぬほど懲らしめてやる」

乗馬鞭の代わりに長くしなやかな革鞭を手にした睦月が、進太の横に並んでMを見下ろす。大きく右手を振りかぶり、素早く股間に鞭を振り下ろした。鞭先は脣から陰唇に向け、真っ直ぐ陰部を縦に貫く。

「キー」

股間から髪の先まで走り抜けた激痛に、人の声とも思えぬ悲鳴がMの口からほとばしった。

「大げさなんだよ。それとも、喜びの声かい」

あざけった睦月が無造作にまた鞭を振り下ろす。今度は鋭い痛みが乳房の谷間を走り抜けた。拘束された裸身がおこりにかかったように震える。

「さあ、進太。ママと一緒に私たちの敵を懲らしめよう」

ネコナデ声で呼び掛けた睦月が進太の手に鞭を握らせ、その上に自分の両手を添える。

「ママが手伝うから、力いっぱい鞭を振るんだ。さあ、いくよ」

睦月の声と同時に貧相な鞭音がMの股間で鳴った。

「ダメッ、もっと力を入れて真剣に打つの。進太は強い子でしょう。ママは弱虫は嫌い。何のためにママが、いつもお前を折檻しているか分かる。進太に強くなつてもらいたいからなの。さあ、ママにしっかり合わせるのよ」

進太を励ます声と共に、今度は鋭い鞭が股間を襲った。Mの口から悲鳴が上がる。

「よし、その調子、進太は偉い」

睦月の掛け声と共に、続けて三発の鞭がMの裸身を縦に走った。三度の悲鳴が響き渡り、進太のかん高い泣き声が続いた。

「ママ、Mを許して。僕がMの代わりになるから。ねえ、Mを許して」

進太が泣きながら大声で訴える。睦月が進太の頬を二度打った。床に倒れた進太がなおも大声で叫ぶ。

「Mを許して、ママ、僕が代わりになるから、Mを許して」

「進太。どこまでママを馬鹿にしたら気が済むのよ。お前なんて、いつでも足手まといなだけだ」

部屋を突き破るほどの大音声で睦月が叫び、大きく肩を震わせて泣きだす。右手に持つ

た鞭を振りかぶり、鋭く進太の裸身に振り下ろした。進太の細い胴に鞭痕が走り、真っ赤な血が滲みだした。泣きながら睦月はMを振り返る。狙いも定めず股間を打った。睦月は何回も何回もMの裸身を打った。股間が、ウエストが、豊かな乳房が、その度に戦き、白い肌に醜い鞭痕が残った。絶え間ない激痛に見舞われ、逃げるように意識が遠のく。Mの股間を温かい失禁が濡らした。

突然、庭に面したガラス戸が開け放たれ、人影が躍り込んで来る。

「睦月、気が違ったか」

鋭い叫びが轟き、鞭を奪った極月が泣きじゃくる睦月の頬を打った。鋭い平手打ちの音が三回鳴った後、奇妙な静寂が戻った。

「M、帰りましょう。キチガイに殺されるわけにはいかないわ」

早口で言って極月がMの股間にひざまづく。裸身を無様に緊縛した両手足の縄を解き、Mを解放した。

「外は暗いから、Mは裸のままでいい。進太を抱いて助手席に乗りなさい。私がMG・Fを運転する」

極月の毅然とした声を聞いて、Mがのろのろと立ち上がる。全身が火で焼かれたように痛い。立ち上がって一步を踏み出すと飛び上がるほど股間が痛んだ。なりふり構わず床に倒れ伏した進太に両手を伸ばすと、子猫のように腕の中に飛び込んできた。思わずMは、涙に濡れた進太の顔に頬刷りした。

「進太は行かせない。連れていくなら、この場で死ぬ」

キッチンの前でぼう然と立ち尽くしていた睦月が、流しにあった包丁を胸に当てて叫んだ。鋭い刃先で、スタンドの光が陰惨に反射している。極月は少しの動搖も見せず、睦月の目をじっと見据える。睦月の目はおどおどとした小動物の目だった。

「死ねばいいわ」

吐き捨てるようになっていた極月がMを促して玄関に向かう。背後で睦月の号泣する声が聞こえた。

MG・Fのコンソールにある時計は午後六時二十分を指していた。素っ裸の進太を抱いて初めてMG・Fの助手席に座ったMは、痛む身体を忘れて溜息をついた。

「また遅刻ね」

今日三回目の遅刻だった。それも二十分の遅刻では極月に迎えに来られても文句は言えないとい、Mは心の中で強がってみた。進太の身体をきつく抱き締めると、鋭い出足でMG

・Fが発進した。極月は無言のままだ。辛いディナーになりそうだった。

極月がたててくれた風呂に水をいっぱい足し、温くなつた湯にMと進太はゆっくり浸かった。それでも湯は、白い肌に走る無数の鞭痕に飛び上がるほどしみた。風呂上がりにMは、無惨に爛れた鞭痕に化膿止めの軟膏を塗った。乳房も股間もウエストも、目を被いたくなる惨状だった。目に見えない尻の鞭痕には極月と進太が喜々として指を走らせた。断りの声は決して聞き届けられなかった。二人に命じられるまま床に這つて高く掲げた尻に、極月の冷たい声が落ちる。

「これだけ痛め付けられれば、Mも身にしみて分かったでしょう。睦月は異常者よ。今後は付き合うことはないわ。進太の処遇は私も考える」

反論しようとすると、極月が尻の傷を乱暴に擦る。Mは悲鳴を上げてうなづくしかなかつた。

極月が丹誠込めて作ったローストビーフを三人で食卓を囲んで食べた。進太は何事もなかつたように、はしゃぎながら平らげる。こんなおいしいものは食べたことがないと喜ぶ、最上級のほめ言葉に極月の口元も緩んだ。進太はだぶだぶなパジャマの上着を着ていたが、Mは素っ裸だった。十分反省するまで裸でいなさいと言って、極月が着衣を許さなかつたのだ。もっとも全身の傷が痛んで、とても服が着られる状態ではない。明日の出勤が思いやられる。塗り薬の効くことだけを祈り続けて食事を終わつた。進太と違つて本格的なローストビーフを味わう余裕もなかつた。極月の視線が怖い。

食事が終わつてすぐ、疲れ切つた進太はテレビの前で眠つてしまつた。待つていていたようになつて、極月が口を開く。

「鉱山の町の祖父母には私が電話をするわ。進太を引き取つてもらうの。M、文句は言わせないわよ。それが睦月のためでもあるの」

Mはうなだれたまま極月の言葉を聞いた。股間に走る無数の鞭痕が極月の言葉を肯定する。しかし、傷つかない陰門の奥で、しつこく濡れた官能の記憶がMの返事をためらわせた。長い沈黙が狭い部屋を支配する。さすがに耐えきれなくなつた極月が身じろぎした。

「いいわね、同意してもらうわ」

「来週まで待つて」

極月の催促に、やつとMが答えた。即座に極月の表情が曇る。

「何を根拠に待つてと言うの」

「私は土曜日に睦月のショーを見るわ。睦月が全身を賭けて勤める舞台よ。これまで見に

行かなかったことが悔やまれてならない。進太のことは睦月の舞台を見てから決めたいのよ」

「舞台と進太は関係がないわ」

「お願い。私に決めさせて欲しいの」

「M特有の論理ね。とても理解できるものではないけど、そんなMが私は好き。Mが決めるという以上、私がとやかく言う筋合いはない。でも、それまで進太はどうするの」

「彼が決めることよ」

「このまま帰したら、睦月が殺すかも知れないのに。無責任すぎない」

「それこそ睦月たち母子の問題でしょう」

「いつでも、どこでも、Mは強すぎると私は思う。私に言えることはそれだけよ。久しぶりで今日は楽しかった。お休みなさい」

意味深長な言葉を残し、極月は当たり前のように帰っていった。Mは強いのは極月のほうだと、喉元まで込み上げた言葉を呑み込んだ。強い女が私を好きだと言うはずがないと一瞬思い、強すぎる矜持をたちまち恥じた。

進太の寝顔は平然として安らかだった。深夜に目覚め、勝手に睦月の元に帰っていっても不思議がない意志の強さが伝わってくる。Mの心の奥に、深い悲しみと微かな寂しさが、遠く近く、波のように打ち寄せてきた。

陽気な八木節のリズムを聞きたいと唐突に思った。

土曜日の午後九時に、Mはサロン・ペインの自動ドアをくぐった。

程良く冷房の効いたフロアに客の姿はない。Mは店内を見回してから正面のカウンターに向かった。

「遅かったわね。ショーは今始まったところよ。すぐ案内するわ」

背後から声がかかり、カウンターの壁に張られた大鏡に、にこやかに笑うチーフの姿が映った。チーフはゆったりした黒いパンツに白のシルクシャツといった、お馴染みの服装をしている。細い首筋に巻いた緑のスカーフが鮮やかに見える。相変わらず短く切りつめた髪が、マニッシュでしなやかな姿態とよく似合っている。だが、何かしらふくよかな印象を与えるのは、十五年以上も店を続けてきた貫禄と言うより、三十八歳という年齢のせいに思われた。長すぎる時間が目まぐるしくMの脳裏を去来する。Mはチーフに背を向けたままスツールに座り、鏡の中を近寄ってくるチーフを待った。

「こんばんわ、チーフ。睦月のショーは十一時まででしょう。まず、マティニを飲ませてもらうわ」

背後に立ったチーフの顔を見上げてMが言った。

「まあ、夜の時間は長いわ。それに、しらふで鑑賞するほどのショーでもないか」

両手をMの肩に置いたチーフがMの目をのぞき込んで答えた。

「チーフ、誤解しないでね。私は睦月のショーを軽んじているのではないわ。でも、どうしてクラブ・ペインクリニックを再興し、SMショーを再開したのか聽かせて欲しいの」

鏡に映ったチーフの視線が落ち、肩に乗った手が優しく動いた。手は肩から二の腕を往復し、Mの首筋で止まる。大きく開いたVネックのサマー・セーターの襟へチーフの手が忍び込む。細いしなやかな手が豊かな乳房を包み込んだ。冷たい手の感触がMの素肌を這う。パープルのシルクニットで被った胸が鏡の中で怪しくうごめいている。

「時とともに、性への期待と関心が高まってきたの。理由はそれだけ」

Mの耳に唇を寄せてつぶやいたチーフが素早く乳首を摘んだ。絶妙のタイミングと力の入れ方だ。下半身に熱が込み上げ、Mの頬がうっすらと赤く染まった。

「すぐ、ドライ・マティニをつくるわ」

鏡の中で片目をつむったチーフが言い残し、素早く身を翻していく。上手に翻弄された

Mだけがスツールに残った。カウンターの中に入り、てきぱきとグラスを出しシェーカーを用意するチーフの動作を目で追いながら、Mはチーフの言葉を反芻した。確かに、手持ち無沙汰の夜などに、独り身の性を焼く衝動を感じることはある。思えば、その衝動を正直に受容し、官能へ導いていくのがMのスタイルだった。いつの間にか歳を重ね、仕事を持ち、社会的に積み重ねていった暮らしがMの前に立ちはだかっている。抑圧という文字が目の前に浮かんだ。自らの意志で官能を追い求めてきた自分が、今や性の衝動を意志して抑圧するのか。消えずに残る下半身の微かな疼きがMを笑う。性への期待と関心は消え失せたのではない。チーフの言うように、時と共に高まってきたのが事実に相違なかった。Mのスタイルの方が変化してしまったのかも知れない。急に寒気が全身を襲い、Mは一瞬全身を震わせた。

「今夜は天田が進太を温水プールに連れていったの。金曜日と土曜日はショーのことで睦月は頭がいっぱいなのよ。進太が邪魔をすると鬼のように折檻をするわ。私たち夫婦も気を使ってるのよ」

シェーカーを振る前に、チーフが問わず語りに進太の行く先を話した。Mの頭の中では、温水プールで戯れる少年と中年男はイメージできない。チーフの話を無視するようにMは言葉を投げた。

「睦月はSMショーが本当に好きなの。性を演じるというのは官能を抑圧することでしょう」

チーフの答えは返らず、シェーカーで鳴る氷の音がリズミカルに響いた。目の前の美しいカクテルグラスに薄い黃金色の酒が注がれ、オリーブが添えられる。

「Mはおかしなことを聞くわ。私が答えれば釈迦に説法になってしまうでしょう。でも、ずっと前に話したとおり、私の三年間の経験では、SMショーで官能が燃え上がったのは心中を誘われた最後の舞台だけよ。私は無知で野心もなかったから、性を演じることはただのビジネスでしかなかった。でも、頭のいい睦月は違う。自分の肉体で官能そのものを表現するんだって言っているわ。客に見られることで燃え上がり、官能に昇華していく性を体現するんですって。難解すぎて理解できない。私の解釈では、公私混同したビジネスをしたいだけのような気がするわ」

難しい表情で苦しそうに説明したチーフに微笑み掛けて、Mはマティニを一口啜った。ジンの香りが顔の前に立ち上り、陶然とした気分になる。

「おいしい」

一言つぶやくと、チーフの表情が和んだ。

「チーフも睦月も家族があるからね。わたしの思う官能と、あなたの方の言う官能は違ったものかも知れない」

「M、残酷なことを言わないでよ。私はMと一緒に。大きな声では言えないけれど、亭主の天田より、Mが好き」

Mの思い付きに鋭くチーフが反応した。たちまち笑いが込み上げ、しばしの間Mは酒に咽せた。

「笑わないでよ。私の言ったことは真実。いつだって祐子に聞かせてやるわ。そうそう、今夜は祐子も二階に来てるのよ」

「えっ、どうして。チーフが誘ったの」

痴話話の最後に、思わぬ事実を聞いたMが鋭い声で問い合わせた。

「嫌だな。祐子と聞くと、Mはすぐ真剣になる。私の嫉妬が面白いの」

「違うわよ。テキスタイル・デザイナーの祐子が、自発的にSMショーに来るとは思えなかつたの。だって、ショーの衣装は縄だけでしょう」

「ハハハハ、Mは面白いことを言うね。少し差別発言だけど許せるわ」

チーフの言葉でMの頬が赤く染まる。意識しているわけではないが、どうしてもSMショーに偏見を持つてしまうらしい。苦笑してチーフの目を見つめ、答えを促す。

「今度、祐子は有名なデザイナーに素材を提供するのよ。そのデザイナーが祐子の生地で国際演劇祭で使う舞台衣装をデザインするの。今夜は、その演劇の演出家が二人を誘って、地方都市の前衛ショーを見に来たってわけ。来月早々、祐子のマンションの前の煉瓦蔵で芝居の稽古が始まるって聞いたわ」

「そう、沢田さんが連れてきたの」

歯切れの悪いバスで、自分の思惑ばかり口にしていた長身の男がMの脳裏に浮かんだ。まさか、沢田の前衛劇の衣装に祐子の織物が使われるとは思いも寄らなかった。とにかく、国際演劇祭のグランプリを目指す演劇衣装の素材に選ばれたのだ。祐子にとっては名誉なことには違いなかった。

「すごいわ。Mは演出家と知り合いなのね。ちょっと渋くて、いい男に見えたわ。M好みなんじゃない」

「何言ってるのよ。沢田さんとは仕事で一ヶ月付き合うだけよ。それより、有名なデザイナーは誰なの」

「大久保玲。若いけれど新進気鋭のデザイナーなんですって。評判になったパリ・コレクションの記事が写真入りで週刊誌に出ていたわ。有名人に囲まれて、今夜の睦月は燃えているわよ。Mも早く行ってやりなさいよ」

浮き立つ気分で話すチーフに引き替え、Mの気持ちは急速に冷え込んでいく。不吉な予感が忍び込み、身体を這い上がっていく気配がする。このまま帰ったほうがよいと、久しぶりに脳裏に現れたピアニストが告げていった。

「ショーではなく、ピアノを聴きたい気分だわ。チーフ、もう一杯マティニをちょうだい」

鏡の隅にピアニスト愛用のグランドピアノが映っている。Mが最後にここで聴いた曲はショパンでなく「エリーゼのために」だった。それも、ピアニストが祐子のために弾いたのだ。しかしあう、ピアノを弾く人はない。グラスに残っていた温いまティニを啜るとなぜか、涙の味がした。Mの瞼が涙で膨らむ。突然、フロアにピアノの音が鳴り響いた。それもショパンの調べだ。軽々と着実に「スケルツォ・第二番・変ロ短調」のパッセージをクリアしていく。Mの全身が戦慄し急速に弛緩した。チーフが目の前に新しいマティニを置く。

「チーフ、意地悪が過ぎるわよ。私に内緒で自動演奏装置を付けたのね。もう、ピアノは引き取らせてもらうわ」

「またすぐ怒る。ピアノが聴きたいって言ったのはMよ。いつまでも思い出にひたっていいではだめ。そんな様子ではピアノは渡せないわ。とにかく睦月の舞台を見てやってよ。私もずいぶんアドバイスしたショーなんだから、逡巡するのはMらしくないわ」

確かにチーフの言うとおりだった。Mはマティニを一息に飲み干して立ち上がった。

「ショーの料金はいくら」

「ドリンク込みで一万円ぽっきりよ」

「睦月の取り分はどのくらいなの」

「客がどんなに飲んでもフィフテーよ。五千円」

Mは大きくうなずいて、カルチェのセカンドバックから三万円を取り出す。

「今から三人分の客が入るわ。睦月には内緒よ」

「そうはいかない。ゲストのMは当然無料よ」

「いいえ、料金は払うわ。私と、ピアニストと、修太の三人分よ。初めて見に来たのだから、私の好きなようにさせてちょうだい」

「分かったわ。この三万円は睦月に渡す。でも、決して睦月のためにはならないと思うわ。

案内は要らないわね」

Mは黙ってうなずき、チーフに背を向けてフロアの奥のクラブ・ペインクリニックに続く扉に向かった。少し酔った頭の隅に、怒ったようなチーフの表情が残り、気に掛かった。しかし、軽く頭を振って重いウォール・ナットの扉を力いっぱい開けた。

畳二十畳ほどの二階のスペースには、かつてのクラブ・ペインクリニックがすっかり再現されていた。赤と黒で構成されたインテリアの中で、向かい合った壁に張られた大鏡がひときわ目を引く。フロアの中心には高さ五十センチメートルの黒く塗った円形の舞台がある。舞台の上にはシングルの分厚いマットレスが敷かれているだけで誰もいない。照明を落としたマットレスの上に散らばる無数の縄や鞭、革製の拘束具だけが、ついさっきまで繰り広げられていたに違いない、淫らな舞台を物語っていた。Mは丁度、幕間に入場したようだ。

薄暗いフロアの椅子に掛けた観客の何人かが、振り返ってMを見た。暗さに目の慣れないMには表情までは分からなかったが、曖昧にうなずき返す。ひそひそと交わされる会話だけが雑然と耳に響いた。Mは入口から横手に続くカウンターの前のスツールに座り、フロア全体を見回す。舞台を取り囲むように巡らした椅子とテーブルは二十脚ほどで、その半数が客で埋まっていた。暗さに目が慣れると、客が二つのグループになっているのが分かった。舞台の左手に五人の客が固まり、右手に二人の客がいた。それぞれ勝手に会話を続けている。五人のグループは一人を除いてMの顔見知りだった。その中の極月がまた振り返り、Mを手招きした。祐子の恥ずかしそうな笑顔も見えた。祐子の隣りには見知らぬ若い男が座り、沢田と煉瓦蔵の支配人が前の椅子に座っている。若い男がデザイナーの大久保玲に違いなかったが、すぐ前を向いてしまった。極月にまた曖昧にうなずくと同時に、Mは込み上げてくる疲労を感じた。睦月の前衛ショーを見ると言うより、日常の暮らしが待ち構えていたような気分になる。少しうんざりしてフロアに背を向け、カウンターに肘をつこうとした。

「やっと見に来たのね」

突然カウンターの中から呼び掛けられ、Mはぎょっとして腰を浮かせた。中をのぞき込むと、幅一メートルほどの空間に座り込んだ睦月が片手で缶ビールを突き出してきた。睦月は素っ裸だ。

「舞台裏をのぞかれては困る。Mも早く席に着いてよ。すぐ二幕目を始める」

睦月の言うようにクラブ・ペインクリニックには控室も樂屋もない。カウンターの中を使うしか方法はないのだ。狭い空間に座り込んだ裸身が哀れに見えててしまう。意に反しても席に着く以外に行く場がなかった。Mは睦月に手渡された缶ビールを持って二つのグループの間の後方の席に座った。少なくとも、Mのほかに七人の客が入っている。今晚の睦月の稼ぎは六万五千円になるはずだ。割の悪い仕事ではないと思い直し、Mはショーの再開を待った。

五百ミリリットルの缶ビールのフルトップを開き、一口飲むと異様な音響が流れてきた。音楽かと思われた音響が、木魚と鉦をバックに齊唱されたお経だと理解できたとき、目の前の舞台が明るく照らし出された。舞台右手の暗がりから回り込んだ睦月が正面を向いて舞台に上がる。

三年振りに見る睦月の裸身は若々しくて、輝くように美しかった。二十代後半の女性だけがかいま見せる一世一代の艶姿だ。背は小さいが完璧なプロポーションと肉好きの良さが妖艶な美を演出している。身にまとう衣装は黒い麻縄だけだ。細いウエストを二巻きした縄が臍の下で股間に延び、痛々しく陰部を割って食い込んでいる。薄い陰毛を透かして、二条の縄に挟み込まれた性器が見えた。バックに流れるお経に合わせ、睦月が悩ましく腰を動かす。黒い縄目が目の前できしみ、性器が戦き、陰毛が揺れた。薄く目を閉じた端正な顔が苦痛と官能の入り交じった表情に変わる。ウッと小さい喘ぎが口を突いた瞬間、睦月が観客に背を向けた。途端に客席から下品な笑いが漏れる。

「ムツキちゃん。こっちに来てヨーク見せて」

Mの右前に座った二人連れが、感極まった声を投げた。

二条の縄が尻の割れ目を走る、Tバックのようなスタイルを想像していたMは、しばしほう然とし、あきれ返ってしまった。後ろを向いて直立した睦月の尻の割れ目には小さな菱形の縄目が開き、その中心に赤黒い肛門が露出しているのだ。普通に立てば尻に隠れる肛門を、無理に晒してしまう緊縛術が睦月のアイデアといえた。それは悲惨なほどユーモラスで淫らな眺めだった。Mの喉元に酸っぱいジンの味が込み上ってきた。見るに耐えなかつた。

席を立とうとした瞬間、舞台の上の睦月が動いた。照明の加減で、滑らかな右肩に残る星形の弾痕が醜い影を見せた。完璧な肌に残る唯一の瑕疵だ。その醜い傷の責任の一端がMにはあると、見るに耐えかねた睦月の姿態が問いかけてくる。ウッと喉元に上がってき

たものを必死で耐えると、舞台を降り掛けた睦月の目が予期していたようにMを見た。右手に小さな竹籠を持った睦月は腰をくねらせながら近寄ってくる。Mの前まで来ると、顔をのぞき込んでじっと睨み付けた。大きく見開かれた闇の中で、燃え上がる憎悪がMの全身を射すくめる。

「肩の傷を見つめていたね。Mが修太を殺した恨みの傷だ」

他の客には聞こえぬ声で低く呼び掛けた顔が、妖艶に笑っている。

「ショ一は面白いでしょう」

大きな声で甘えるように言い、睦月が尻を見せた。無惨に露出された肛門が淫らにうごめきMを笑う。

「イズミヤさんも、シマダヤさんも、おまちどうさま。さあ、ヨーク見て、よかつたらこれをしてね」

Mの席を離れ、二人連れの客のテーブルに移っていった睦月が、尻を振りながら嬌声を上げた。

「もちろんしてやるよ。ムツキちゃんのお尻は色っぽいよ。はいこれでね」

客の一人がテーブルに置かれた竹籠から五本の洗濯ばさみを取り、代わりに五千円札を入れた。

「シーテ、シーテ」

舌足らずのネコナデ声で甘えながら、中腰になった睦月が腰をくねらす。二人の中年男も椅子から立ち上がり、睦月の乳房の皮膚を摘んでは洗濯ばさみで挟む。その度に睦月の顔が苦痛で歪み、淫らな呻きを漏らす。洗濯ばさみに吊り下げられた小さな鈴が、裸身のうごめきに連れて怪しく鳴り響く。ふっくらした乳房に五本の洗濯ばさみを吊した睦月が立ち去ろうとすると、二人の中年男が尻の後ろにひざまづいた。睦月が悩ましそうに尻を突き出す。中年男は交替で白い尻を抱え、縄目の間から露出した肛門を舐めた。睦月の口からまた嬌声が漏れる。

「大久保さん、これはアブストラクトですよ。いい女優です。使えますよ。ほんと、そう思いません」

左手から聞き慣れた歯切れの悪いバスが聞こえてきた。早口の興奮した声だ。演出家の沢田に違いないとMは思った。

「そうですかね」

幾分かん高い、聞き慣れぬ声がぶっきらぼうに答えた。

「まあ、SMショーでは衣装の出番はないからね。大久保さんが冷たいのは分かる。でも、祐子さんは違うでしょう。無縫な麻縄の代わりに、祐子さんが開発したステンレス・ファイバーの糸で撚った縄が使えますよ。ね、そうでしょう」

「ステンレス・ファイバー繊維は私が開発したものではありません。私は糸を織り上げるのが仕事です」

沢田のとんまな問いに、デザイナーの大久保も祐子もべなく答える。聞いていたMは初めて痛快な気持ちになった。

「シーテ、シーテ」

また、睦月の嬌声が上がった。舞台左手に回った睦月が、興奮している沢田に狙いを付けたようだ。先ほど右手で繰り返された光景が沢田の手で再現される。しかし、さすがに沢田は睦月の尻は舐めなかった。洗濯ばさみとワンセットで五千円だとすると、沢田は二千五百円の損だ。馬鹿な話だと思い、Mは席を立った。

入口に向かって三歩歩いたとき、素早く追ってきた極月と祐子がMを挟んで並んだ。

「M、これで決心できたでしょう。修太の両親に電話するわ」

極月が平静な声で事務的に告げた。Mが小さくうなずく。

「電話はいいわ。私がする」

Mの答えに極月は反応を見せず、黙って席に帰っていった。残されたMと祐子は立ち止まって向き合う。離れた舞台のほうから、相変わらず鈴の音色と睦月の嬌声が聞こえてくる。

「祐子の生地が採用になったんだって、おめでとう。国際演劇祭の応募作品の衣装だもの、世界に発信する日が来たのね」

Mの賛辞に祐子は答えようともしない。暗く沈んだ目でMを見つめた。

「睦月から進太を引き離すつもりなの」

唐突に祐子が言った。祐子に相談したこともない話を持ち出されてMは戸惑う。

「睦月は進太の母親よ。睦月が何をしたって言うの。性を商品にした芝居を見せてお金を取るのが、そんなに悪いことなの。性に嫌悪感を持つなど教えてくれたのはMよ。寄り添って生きることの大切さも教えられた。なのにMは、実の母子を引き離そうとするの。家族って、簡単に引き離せるものじゃないと私は思う」

軽いめまいがMを襲った。確かに醜悪なショーは嫌いだし、売られる性を見るのも嫌だった。しかし、何にも増して、ズカズカとどこにでも踏み込んでくる祐子の態度が不快だ

った。

「ねえ、祐子。あなたが言っている意味が分からぬけど、ここで議論をするつもりはないわ。大事なのは、このままでは進太が睦月に殺されるかも知れないってことだけ」

「Mが心配することではないと思う」

「どうして」

「母が子を殺すことは誰でも止めるべきよ。でも、殺すかも知れない母を子から引き離す権利が誰にあるというのかしら」

Mの顔が苦悩でゆがむ。進太のあどけない顔が脳裏に浮かび、ピアニストの悲痛な顔が瞼を掠めた。喉元まで込み上げてきた叫びを必死で押さえる。

「私が家族を持ったことがないから、何も分からぬと祐子は言いたいのね」

「ちがうわ」

祐子の悲鳴がフロア全体に響いた。

「Mは何よりも大切な私の家族よ」

すがるように言った祐子は、そのまま床に泣き崩れてしまう。Mは黙って見下ろしていた。勝手に造り上げた理想はもろい。いつでも簡単に崩れ落ちてしまいMを頼るのだ。祐子のむせび泣く嗚咽が長く低くフロアに流れしていく。Mは顔を上げ、背筋を伸ばしてドアに向かった。

「M、帰ろうたって、そうはさせないよ」

祐子の泣き声をかき消すように、舞台の上から睦月の怒声が飛んだ。

「私が客に見せてることはすべて、Mがこれまでしてきたことだ。しっかり見て、批評をしてくれなくては私の立場がない。それとも、素っ裸になって舞台に上がり、私と競演するかい。私は望むところだ。散々見せ付けてきた恥ずかしい姿を今さら隠そうたって無駄なことだ。さあ席に戻って、お前のやってきたことを最後まで見ろ」

怒り狂う睦月の声を背中で聞き、Mは階下に続くドアを開けた。無性に流れ落ちる涙で階段も見えない。熱い悲しみだけが全身を浸していた。

「卑怯者」

一際大きく叫ぶ睦月の声が響き渡り、背後でドアが閉まった。

煉瓦蔵の裏口に回る横町をトラックが曲がった。急に道幅が狭くなり、左右に立ち並ぶ塗りの剥げた土壁が息苦しさを増幅する。建物の短い影が、かろうじて助手席に射し込む日を遮ってくれた。Mは待っていたとばかり車窓を開け放ち、冷房の効きの悪い車内に外気を入れる。だが、飛び込んできたのは肌に粘り着く熱風だった。蒸し暑さが全身を被い一気に汗が噴き出してきた。

「参ったわね。たとえリサイクル・ショップでも、運搬用のトラックぐらい新しいのにしてよ」

うんざりしたMの声が狭い車内に響いた。

「そう言わないで下さいよ。僕は毎日これに乗ってるんですから」

運転している汗みずくの男が、これもうんざりした声で応じた。途端にトラックの前輪が煉瓦蔵の裏庭に続く門扉のレールに乗り上げ、大きく車体が揺れてエンジンが止まった。後ろの荷台で大きな金属音が響く。

「あああ、全部倒れちゃった。アルバイトに積ませるとすぐこれだ」

リサイクル・ショップの店長が運転席から身を乗り出し、荷台を振り返って情けない声を出した。スタンドを立てて整然と積んであった十台の自転車が荷台の上で将棋倒しになっている。すべての自転車がきれいに整備してあったが、どことなく全体にみすぼらしく見える。一台五千円のリサイクル品を三千円に値切って買ったものだから仕方ない。それも、一ヶ月後に返品すれば、一台千円で引き取ることを条件に付けてある。リース会社で借りるより、よっぽど割得だった。Mの口元に微笑が浮かぶ。とにかく裏庭は、コンクリートの照り返しで焼け付くように暑い。

「このままでいいから、煉瓦蔵の向かいの管理事務所に行ってちょうだい」

Mの指示どおりトラックは裏庭を突っ切り、建坪二百坪の細長い煉瓦蔵の横にある広場に向かう。寄せ棟造りの管理事務所兼休憩室は煉瓦蔵側面の大きく開け放れた扉の向かいにあった。広場の中央には樹齢百五十年といわれる高さ十メートルもある巨大なクスノキが枝葉を広げ、涼しい木陰をつくっている。管理事務所の出入口は木造に似せて作ったアルミサッシだ。幕末から昭和二十年の終戦までの間、日本の近代化に貢献した建造物として、近代化遺産に指定された煉瓦蔵には似合わない。しかし、盛夏の暑熱と厳冬の寒冷に

耐えられなくなった現代人にはうれしい建具だ。都市ガスを使ったエア・コンデショナーの効率もいい。素通りのガラス越しに、涼しそうな顔で白い応接セットに座った沢田と、煉瓦蔵支配人の姿が見えた。

荷台の自転車を管理事務所の横に降ろすように店長に頼んでから、Mはトラックを降り、アルミサッシの引き戸を大きく開けた。汗の浮いた頬に、よく冷えた部屋の空気が心地よい。

「ご注文どおり、自転車を運んできました。新品ではないけれど、かえって気兼ねなく使えます」

二人に声を掛けると、素早く支配人が立ち上がる。

「暑いのにご苦労さまでした。まあ、座って下さい」

Mは言われるままソファーに座り、正面の沢田の顔を見た。沢田は一瞬、何事が起こったのかという怪訝な表情をしたが、すぐMの目を見つめて頬を緩めた。

「ああ、自転車ね。助かります。参ってたんですよ。地方都市では自転車が足なんだね。これで役者たちも好きなところに自由に行けます」

「済みませんでした。当然、私のほうで気付くべきでした。地方都市の住人は車に頼った生活がすっかり身に着いてしまって、近所を出歩くこともなくなっていたようです」

Mは沢田の言葉にうなづき、軽く頭を下げて詫びた。確かに、劇団員の毎日の暮らしの足を確保することも、合宿稽古のコーディネイトを請け負ったMの仕事だった。車を持たない暮らしに、思いが及ばなかったことが恥ずかしかった。

「Mさん、この街は車で通り過ぎるのはもったいないよ。商店街で買い物したり、銭湯に行ったりして、暮らしを楽しむようにできるんだ。地元の人が街の価値を知らないなんて、本当にもったいない」

言い募る沢田の言葉にMは一言も無い。つい三年前、遊郭跡の富士見荘に住み、車を運転しない生活を体験したことが懐かしく思い出された。

「まあ、ミスと言うほどのことはない。Mさんはよくしてくれている。十二人に増えてしまつた劇団員の宿舎の手配や家具の運搬、調理器具の準備まで、よく目が行き届いていますよ。お陰で快適な気分で稽古に専念できます。まさか、自転車が必要品だったなんて、私も二日暮らすまで気付きもしなかったよ」

もう一度頭を下げたMに、沢田はよく通る美しいバスで言葉を続けた。だが今日も、せっかくのバスが台無しになるほど早口で歯切れが悪い。Mは尻のあたりが妙にむず痒くな

ってきてしまう。この街に根ざしていない暮らしを指摘されたようで居心地も悪い。まだ汗は引ききっていないが、忙しい素振りを見せて席を立った。

「他に必要なものがあったら、いつでも言って下さい。何でもご用意します」

「Mさん。せっかくだから冷たいものを飲んでいって下さいよ」

市立図書館長を昨年退職して煉瓦蔵に再就職した支配人が、麦茶の入ったグラスを差し出す。思わずMの渴いた喉が鳴った。

「そうだ。せっかくだからMさんにも芝居の見直し案を聞いてもらおう。さっき支配人に資料を見せられて、僕は脚本を直そうと思うんだ」

また自動的に早口のバスが繰り出された。深々と椅子に座ったまま、沢田がMの顔を見上げた。このまま帰るか、座り直すかを決め兼ねているMに構わず、沢田が話を続ける。仕方なくMはまたソファーに腰を下ろした。

「今度の芝居の主調音は八木節です。題名もヤギブシと付けたくらいだ。この市でも来月早々八木節祭りが行われる。この土地には八木節がよく似合うんです。だから、ここで合宿稽古することにしたんだ。Mさんもご承知のとおり、八木節は新保広大寺節から派生した口説き節と言われている。越後の農民たちの戯れ唄を、瞽女や物売り、門付け芸人たちが各地に伝えたものだ。八木節もその一つで、越後と江戸を結ぶ三国街道から例幣使街道に伝わり、下野八木宿でアレンジされたものらしい。僕が調べた限りでは、その八木宿の女郎が唄っていた節を、街道を往来する美声の馬子が広めたとされている。僕の芝居はそこからヒントを得た。ストーリーは簡単なものだ。宿場女郎が若旦那に身請けされる寸前に、唄のうまい馬子がその女郎をさらって逃げるというものだ。ダステイン・ホフマンが主演した卒業という映画みたいなものだ。だが僕の芝居では、舞台を二つ作る。まったく同じ芝居が、違う配役で、一定の時間差を持って二つの舞台で進行するんだ。客は席に着くことなく、二つの舞台を巡りながら一つの芝居を見る。役者も双方の舞台を自由に行き来して演じる。二つの芝居の絶妙な時間のずれが、新たな時間の流れと空間を創造するんだ。ねえM、面白いだろう。でも、支配人から八木節の由来を見せられて、ただの女郎がヒロインでは物足りなくなってしまったんだ。何よりも衝撃力がない。せっかく凝縮した時間が拡散してしまうよ。そこで僕は、縛られ女郎を創作しようと思う。SMショーの睦月ちゃんに、ぜひ芝居に出てもらいたいんだ。どう思う」

長い話の最後に睦月の名が出て、どう思うかと尋ねられたMのほうが面食らってしまった。八木節の講義の後に難しい演劇論、挙げ句の果てに睦月を芝居に出演させたいと言う。

面食らわないほうがおかしい。手に持ったままの麦茶のグラスに口を付け、一口飲んだ。

まだ十分冷えていて最高においしかった。長い時間がたったわけではなかったのだ。

「Mさん、自転車は降ろしました。もう、帰っていいですか」

突然戸が開き、外の熱気と共にリサイクル・ショップの店長が顔をのぞかせた。絶妙のタイミングにMは喜び、ソファーから立ち上がろうとしたが、支配人に先を越されてしまった。

「ご苦労さん、帰ってください。ほら、これが沢田さんにお見せした八木節発祥の口説き節ですよ」

支配人はMの横に腰を下ろしながら紙切れを差し出した。店長が黙って頭を下げ、戸を閉めて出ていく。Mこそ、芝居小屋に監禁されたヒロインのようだ。仕方なく目の前の紙片の文字を目で追う。題辞には「八木節由来くどき」と書いてあった。

一、ころは幕末 安政時代

越後在なる 農家の茂作

続く不作に 涙をのんで

一人娘の お雪を身売り

お雪流れて 八木宿郭

つらい務めに 故郷が恋し

赤城曇れば まぶたに浮かぶ

二、雪の越後の あの空模様

今日も荒ぶる お雪の心

茶碗片手に 冷酒あふり

昔恋しい 越後の「くどき」

今日も唄うよ 郭の窓で

暗い苦しい 郭の暮らし

越後恋しや かかさん恋し

三、心まぎらす あの「くどき節」

節もおかしく 唄ってあれば

街道筋なる 八木宿中に
宿場宿場に 広がりまして
いつか明るい 盆唄音頭
土に根をはる 暮らしの歌で
老いも若きも 手に手を取りて

端正な万年筆書きの歌詞は五番まで書かれていた。Mが三番まで読み進んだとき、Mがあらわれるまでの続きのように支配人が沢田に話し掛けた。

「この由来のとおり、沢田さんの芝居は史実にものっとってますよ。お雪という女郎も、いわゆる飯盛り女郎だったに違いない。しかしですよ、沢田さん。縛られ女郎というのは初耳です。私には突拍子もないとしか言えません。それに、あの睦月さんという人は素人じゃないですか。いやいや、それより何よりヒロインが縛られ女郎では、八木節の情緒が損なわれてしましますよ。もう一度考え直してくれませんか」

昨年まで図書館長をしていた支配人は、まるで故郷の歴史が汚されてしまうといった表情をしている。

「いや、違いますよ。由来くどきを支配人に見せてもらったお陰で、想像していた以上に時間の凝縮が必要だと理解できたのです。郭で泣き暮らす悲運の女郎が、若くて力強い馬子に、自由の世界に連れ出されるだけではいかにも冗漫です。由来にあるとおり、いつか明るい盆歌音頭になってしまった八木節が、芝居のバックに流れ続けるのですよ。長い時間の流れが凍り付くような舞台を創造するには、縛られ女郎に限ります。それに、あのアブストラクトな自縛ショーに私を誘ってくれたのは支配人じゃないですか。煉瓦蔵の中に作る舞台と、外の広場に作る舞台の間を、素っ裸で後ろ手に縛られた女郎のイメージが巡り歩くのです。間違いなく異数の世界が開かれるでしょう。最高のイメージですよ。いくら支配人が初耳でも、郭の客に縛られ弄ばれることを業とした女郎も、きっといたはずです。やはり脚本は直しますよ。Mさん、どうだろう」

話が突然、またMに振られた。どちらでも大差がないと答えたかったが、睦月がからんでいては話とは別だった。温くなった麦茶を一息に飲み干し、じっと手元の紙片を見つめた。古ぼけた八木節由来くどきの文字の影から、高島田に結い上げた髪が崩れ、伏し目がちに内股で歩む睦月の裸身が浮かび上がった。妖艶だが、みずみずしいほど新鮮な白い裸身だ。先日クラブ・ペインクリニックで見た猥雑なイメージはなく、楚々として哀れな美

しい姿だった。

荒廃してしまった睦月の心が変わるかも知れない、と急に思った。何よりも睦月は芸術に憧れているのだ。そして、M自身の評価はともかく、沢田の演劇が国際コンクールのグランプリを狙える水準にあることも事実だった。そして今、一つのチャンスが足元に落ちてきたのだ。睦月が変わって欲しいとMは願った。虐待に耐えている進太のためにも絶好の機会だと思った。

「睦月のショーに目が止まるなんて、さすがは沢田さんね。磨き上げれば、睦月は十二分に輝くわ」

心にもないことを言って、Mは沢田の目を見つめた。沢田の目が無邪気に輝き出す。早口のバスが興奮に震えた。

「Mさん、すぐ睦月ちゃんの家に案内してくれ。僕が直接出演を依頼する。きっと、すごい芝居になるよ」

まだ何か言いたそうな支配人に目もくれず、立ち上がった沢田がいち早く管理事務所の戸を開け放った。暑い外気が室内に押し寄せ、引いたばかりの汗がまたMの首筋に滲み出した。煉瓦蔵の扉の奥からチャカポコ、チャカポコと、八木節のリズムが聞こえてくる。沢田に続いてMも外の広場に出た。全身が焼け付くように暑い。

「まだ稽古を初めて三日目だからね、役者には好きに踊ってもらっている。キャストを決め、脚本読みを済ませてから、ここに乗り込んできたからね。八木節の風土の中にどっぷり浸かり、土俗の雰囲気を身に染み込ませることが大切だと、全員がわきまえている。時間差を付けて同じ芝居が二つの舞台で進行するんだ。すべては肉体でリズムを刻めるようになってからだよ。立ち稽古は来週からでいいんだ」

沢田が薄暗い蔵の中に目をやって、問わず語りに稽古のスケジュールを説明した。正午の日射しを浴びて精悍な目が輝き続けている。一緒に外に出てきた支配人が目をしょぼつかせ、肩をすくめてから管理事務所に戻っていった。脚本の行方はすでに決まってしまったのだ。

Mは腕の時計に目を走らせる。やっと睦月が起きたした時刻に思われたが、寝入っているはずはない。

「睦月の家は、ここから歩いて二十分の距離です。どうします。この暑さでの車だけど、私の車で行きましょうか」

裏口の駐車場で直射日光を浴びている、オープンにしたMG・Fに目をやりながら、M

がうんざりした声で尋ねた。

「Mさん、せっかく自転車を持ってきてもらったんだ。自転車で行きましょうよ。女性と一緒にサイクリングなんて何年振りだろう。この街は本当に楽しい」

沢田がはしゃぎ回って青い自転車にまたがった。オフホワイトのパンツも紺の綿シャツも、すでに汗が滲んでいる。Mも諦めて緑色の自転車にまたがる。黒いジーンズのウエストに巻いたバックから、レイバンのサングラスを取り出す。自転車に乗るのは恐らく二十年振りのことだ。今さら乗れるだろうかといぶかり、不安が掠める。まぶしい空を仰ぐと、オレンジ色のサングラス越しに巨大な積乱雲が見えた。雲は赤黒い煉瓦壁の上の黒い瓦屋根の上に、覆い被さるように膨れ上がっている。八木節のリズムに隠れて小さく遠雷が聞こえた。短かった梅雨が明け、熱い夏が始まったのだ。

「さあ、行こう」

元気な声が響き、方向も分からぬまま沢田が自転車をこぎ出す。猛暑の街は一面の蝉時雨だ。

二人は織姫通りを北に上り、天満宮の手前の交差点まで一気に自転車をこいだ。全身から気持ち悪いほど汗が吹き出し、無帽の頭が日射しに灼ける。あいにく信号は赤だ。止まつた途端、道路から熱射が襲い掛かり、全身を被う。右手の機屋横町から微かに山根川の川風が漂ってくる。横を見ると、先ほどまでの元気もなくし顔を火照らせた沢田が、川風に誘われるよう機屋横町の方を見ている。

「逆に曲がるの」

Mは意地悪く声を掛け、青に変わった信号を山手通りに左折した。命門学院高等部を過ぎ、動物園への上り口を通り越すと、やっと左手に睦月のアパートが見えた。玄関前のちっぽけな日陰にうずくまっている進太の姿があった。

「Mっ、やっと会えたね。ずっと会っていなかったから、僕、お腹が空いちゃった。昼飯を買うお金をおくれよ」

Mが自転車から降りないうちに進太が立ち上がり、うれしそうな声で金をせがんだ。進太と会うのは、ほぼ一週間振りだった。Mと会っていなかったから、お腹が空いたという進太の言葉が胸に痛い。

「以前のように、いつでも私のアパートに来ればいいのよ。私こそ進太が来ないので心配していたわ」

答えてからMは、出任せな言葉を反省する。この一週間は仕事が忙しく、進太のことを思いやったことはなかった。しかし、頓着もなく進太が答えを返す。

「Mの家に行ってはダメだと、ママが言うんだ。約束を守らないと、またMを折檻すると言ったよ。だから、僕はMの家に行かない。でも今日は別だ。Mが来た。ねえ、お金をちようだい」

泣きそうな声で訴える進太に、Mの背後から回り込んだ沢田が千円札を差し出す。

「これで好きなものを食えよ。僕たちはママに話があるんだ」

顔の前に差し出された千円札を無視して、進太は沢田の顔を睨み付けた。人見知りをしない進太を見慣れたMには奇妙な光景だった。

「進太。お金はとっておきなさい。後で私が返しておくわ」

Mが取りなしても進太は表情を固くして、沢田を睨み付けている。沢田が苦笑して後ろに下がり、Mはウエストバックから千円札を出して進太に与えた。

「ありがとう、M。ゆっくりしていってね。コンビニでご飯を食べたら僕もすぐ帰ってくるよ」

打って代わった和やかな顔でMに微笑み掛け、進太は高等部の隣にあるコンビニエンス・ストアの方角に駆け出していく。釈然としない気持ちを抱えたまま、Mは沢田と連れ立って玄関に入った。

「こんにちわ睦月、Mよ。上げてもらうわね」

短い廊下の奥に声を掛けると、睦月の怒声が帰ってきた。

「性懲りもなく、あの泥棒猫に金をやつただろう。どこまで私を馬鹿にするんだ」

憎悪のこもった睦月の怒声を聞いて沢田が肩をすくめた。

「睦月さん。先週ショーを見せてもらった沢田です。ぜひ、お願ひがあつたんですよ。Mさんに案内を頼んだのも僕です」

沢田が大声で呼び掛けた。奥のリビングで睦月が緊張する雰囲気が玄関まで伝わってくる。しばらくの沈黙の後、異様に目を輝かせた睦月が廊下に出てきた。裸身に大振りの男物のシャツを羽織っただけの姿だ。かろうじて下に赤いショーツを穿いている。

「演出家の沢田さんが、私にどんな用事でしょう」

わざわざ職業まで添えた睦月の声は、先ほどの怒声に比べようもない。媚びを含ませるテクニックなのか、語尾が震えていた。

「はっきり言いますが、ぜひ、僕の芝居に出て欲しいんだ」

「えっ、何ですって、もう一度言ってくれますか」

聞き返す睦月の声が本当に震えた。沢田が苦笑して同じ依頼を繰り返す。

「合宿稽古を始めたばかりの今度の芝居に、ぜひ出演して欲しいんだ。もちろんギャラも出します。僕は睦月ちゃんのショーを見て、インスピレーションが湧いたんだ。あなたのために脚本を書き直します」

睦月の顔がまたたく間に輝き出す。

「あの舞台を、先生が認めてくれたんですか」

感に堪えた声で尋ねる呼称は、すでに先生に代わっていた。

「いいショーだったと僕は言った。あのままでいいんですよ。演技は僕が付ける。そして、出演してもらう以上、メルボルンで行われる国際演劇祭にも行ってもらう。予定どおりグランプリが取れれば、全国を回って凱旋公演をします。海外公演もするようでしょう。長い期間、付き合ってもらうことになる。そのことを理解した上で、ぜひ承諾して欲しい」
「出ます。ぜひ出演させて下さい。先生、出演させていただければギャラなんて要りません。ここにいるMに劇団の費用だって負担させます。ぜひ、出させて下さい」

とんだところで名前を出され、Mは辟易とする。沢田の顔にも当惑の表情が浮かんだ。
だが、そんなことが眼中に入る睦月ではない。

「ねえ、M、聞いたでしょう。私が認められ、世界に羽ばたけるかも知れないのよ。資金は絶対出してもらうからね。用意するのよ」

先を続けようとする睦月を、沢田が怖い声で遮る。

「ギャラを出すと僕は言ったはずだ。睦月の役は重要な役だ。それなりの金額は当然支払う。Mさんには、劇団・真球は十分お世話になっているんだ。劇団の費用だなんてとんでもない。こちらが礼を言う立場だ」

沢田にたしなめられて睦月の態度ががらっと変わる。

「先生、済みません。Mには貸しがいっぱいあるものだから、つい私の替わりに先生の劇団に返させようとしてしまいました。お怒りにならずに、よろしくお願ひします」

裸身同然の身体を喜びに震わせ、睦月が何度も何度も頭を下げた。沢田はおうようにうなずき、今夜の特別稽古から参加するよう告げた。コンテスト出場までの丸一ヶ月のギャラも二十万円に決まった。無名の新人にしては破格の額だ。今度の芝居に賭ける沢田の意気込みがMにも十分伝わってきた。

喜びにも慣れ、早くも鼻高々とした自負心を顔にのぞかせてきた睦月に送られ、Mと沢

田は表に出た。発達した積乱雲が頭上を被っていて、外は夕方のように暗い。

「降りますね」

ポツンとつぶやいて自転車にまたがった沢田が、Mには急に大きく見えた。あれほど気にはかかっていた歯切れの悪いバスも心地よい。自分の表現に一切を賭ける、強引な男の匂いが鼻先を掠める。

ゴロゴロッ、ドッカーン

鋭い雷の音が耳の底に響いた。

「よく知りもしない睦月を入れてしまって、芝居も変えるという。沢田さんに不安はないんですか」

返ってくる答えを予期した上でMが尋ねた。

「不安はない。芝居は大きく羽ばたきますよ。僕が毎日、睦月に特別稽古をつけるんです。役は決まってるんだ。五日もあれば、Mさんの言ったように睦月は輝きだします。立ち稽古が始まる前に、Mさんもぜひ見に来て下さい」

自信に溢れたバスが響き、鋭い雷の音が消していった。

降り始めた大粒の雨が頬を叩く。進太はまだ帰ってこない。確かな力で沢田が自転車のペダルをこいだ。先を行く大きな沢田の姿をMの自転車が追った。

先週に続いて、七月の第二週の日曜日もMは会社に出勤した。八月一日から始まる八木節祭りに向けて、毎日忙しい日々が続いている。例年市の職員が行ってきた祭りの進行と交通整理の仕事を、今年からMの勤める警備会社が請け負うことになったのだ。最近の行政改革ブームで、やっと市役所も人件費を計算に入れるようになった。たとえ手の空いている職員に交通整理を任せたり、時間外勤務で夜祭りの裏方をさせたりしても、すべて人件費の支出につながる。高給取りの多い市役所では、これが膨大な金額になる。どう計算しても、民間企業に業務委託したほうが効率もよく、安くついた。後は委託した仕事を指揮監督すればよい。それこそ役所本来の仕事ともいえた。お陰でMの会社はこの暑い時期に忙しく、繁盛することになってしまっていた。

せっかくの日曜日を朝から、商店街の代表や、八木節チームのリーダーたちとの打ち合わせに費やし、Mがアパートに帰ってきたのは暗くなつてからだった。いくら日が落ちたと言っても、昼間閉め切っていた室内はうだるような暑さだ。Mは北向きの窓を大きく開け放ち、エアコンのスイッチを最強にした。汗を吸って重くなつた市役所支給の紺の祭り半纏を脱ぎ捨てる。この半纏も祭りを盛り上げるために市があつらえたものだった。しかし、昨年までの市の担当者は照れくさがつて、祭りの当日しか着なかつたという話だ。委託を受けたMの会社では、祭りの二週間も前から宣传のために、派手に着て歩くことにしていた。

黒いTシャツと紺のショートパンツになって、窓から半身を突き出す。生暖かい風が素肌を渡るだけで爽快感はない。闇夜の水道山の中腹で、動物園の明かりがぼんやりと滲んで見えた。進太と睦月の顔が浮かび上がる。沢田の主催する劇団・真球に参加して十日たつた睦月にも、あの日コンビニに行くと言って走り去つた進太にも、ずっと会つていなかつた。気掛かりなことは確かだが、仕事の忙しさにかまけて後回しにしているのが本音だつた。何となく腹立たしくなり、窓を閉めてショートパンツとTシャツを脱ぐ。素っ裸の身体にエアコンの風を浴びてから、シャワーを使つて風呂場に向かった。

無造作に出した冷水を頭から浴びて、Mの全身が冷たさに震える。慌てて三十度に水温を上げた。冷水に耐えられなくなつた柔な素肌が憎らしくなる。

「M、お腹が減つたよ。何かつくつてよ」

乱暴に玄関ドアが開く気配がし、シャワーの音にも負けない進太の声が響いた。心なし投げやりな声の響きを聞いて、Mは眉をひそめる。返事をしそびれていると、キッチンのほうから乱雑な音が聞こえてきた。

「チクショウ、ろくな物がない」

大きな舌打ちと共に、聞こえよがしに毒突く声が聞こえた。精一杯淒んでいる口調のボーイ・ソプラノが言葉に馴染まず、ユーモラスだ。Mはとっさに冷蔵庫の中を思い描いた。五百ミリリットルの缶ビールの他にある物と言ったら、プロセスチーズとサラミソーセージ、それからアンチョビの缶詰。野菜は葉のしおれたセロリだけだ。食パンはおろか牛乳さえない。子供の進太が失望するのも当然だった。Mは口元に苦笑を浮かべ、濡れた髪にバスタオルを掛けただけの格好で風呂場から出た。真っ直ぐキッチンに行くと、進太がテーブルの前に立ったまま、左手に持ったサラミソーセージをかじっている。右手には栓を開けた缶ビールを握っていた。Mの顔が一瞬のうちに真っ赤になる。

「進太、何やってるの。ビールなんか飲んで、すぐやめなさい」

目にした光景に泡を食って狼狽したMの怒声に、進太は動じる気配もない。妙に悪びれた動作で振り返り、凶暴な目でMを見上げた。

「ウルセイナ、捨てればいいんだろう。裸なんか見せやがって、馬鹿みたいだ」

言うが早いか右手を振り上げ、流しの中に缶ビールを放り投げた。荒々しい動作と、あどけないボーイ・ソプラノに違和を感じ、Mは言葉もない。見上げる進太の視線をじっと見つめた。一呼吸おき、Mは独りでうなづく。右足で一步を踏み出し、力いっぱい進太の頬を張った。皮膚を打つ大きな音が響き、進太の口からかん高い悲鳴が上がった。白い頬に真っ赤な手形が浮かび上がる。進太は顔をくしゃくしゃにして泣き叫び、Mの裸身に縋り付いてきた。

「ママが打たなくなったらMが打つ。僕はどうしたらいいんだ。もう、分からぬよー」

小さな肩を震わせて泣きながら、鼻を啜って訴える。シャワーを浴びて汗を流したMの裸身に、また大粒の汗が噴き出す。蒸し暑さが全身を包み込み、頭全体が混乱した。

「進太、どうしたの。興奮することはないわ。小学校一年生がビールを飲んでるのでは、打たれて当たり前よ。今夜の進太は変よ。何を悪ぶってるの。テレビに出てくる不良のような言葉を使ってはだめ。睦月なら泣いたぐらいでは済まらないわよ」

いくらか落ち着いた声でMが諭したが、進太の返事はない。相変わらずMの裸身に小さな身体を埋めて泣きじゃくっている。

「ママは、ママは、もう僕を打ちはしないよ。何をしたって無視するだけさ。僕はつらい、つらいんだよー」

泣きながら切れ切れに訴える進太の言葉から推察すると、どうやら睦月は子育てに关心を無くすほど芝居に熱中しているらしかった。沢田の顔が急に目に浮かんだ。聞き慣れたバスが耳元を掠める。実際の沢田の声とは違って心地よいセクシーな響きだ。進太の胸が押し付けられた下半身の奥で、いきなり熱い小さな火が点ったのが分かる。

ひとしきり泣きじゃくってから、進太がようやく話し始めた。

「ママがいつも知らんぷりだから、今夜は僕、思い切ってテーブルをひっくり返してやったんだ。でも、ママは叱りもしない。そんなことをしたら、立ち上がりなくなるほど折檻されたはずだよ。それが、じろっと僕の目を見ただけで、黙って煉瓦蔵へ出掛けてしまったんだ。僕、どうしていいか分からなくなって、何も食べずにMの家へ来た。ママにしたのと同じようなことをしたら、そうしたら、Mが初めて僕の頬を打った。やはり僕は、Mにだって打たれるほど悪いことをしたんだ。僕が今までと違ったわけじゃない。ママが変わってしまったんだ。いつも知らんぷりをして邪魔にするんだ。ママは今日、鉱山の町のお祖父ちゃんと、お祖母ちゃんに会いに行こうって誘ったんだ。僕を鉱山の町にやるつもりなんだ。僕は嫌だと言って泣いて断った。僕はママの所がいい。裸にされて折檻されても、僕が悪いんだからいくらでも我慢できる。僕はママと、ずっと一緒に居たい、居たいんだよー」

思いの丈を話しきったのか、進太は途端に身体の緊張が解けてMの足元に座り込んだ。裸身に縋り付いていた小さな熱い身体が離れ、剥き出しの下半身をエアコンの冷気がなぶった。頭の中の混乱は一層深まるばかりだ。

睦月の虐待を見るに見かねて、Mが進太を鉱山の町の祖父母に預けることを決心したのは、つい二週間前のことだ。それが、今度は睦月のほうで進太を手放したがっている。あれほど母に虐められ、母を怖がっていた進太が、泣きながら母を慕っている。思えば理不尽だけが進太の小さな身体を翻弄しているのだ。胸の底から悲しみが込み上げ、Mも泣いた。家族とは理不尽以外の何物でもない。その理不尽と、これまで無縁で生きてきた我が身も悲しかった。

「きっと、あいつのせいだ。あいつが、僕からママを取った」

進太がMの足元で、ふと冷たい声でつぶやいた。不気味なボーイ・ソプラノだった。Mの脳裏をまた沢田の姿が掠めていった。

Mはブラックジーンズと黒のタンクトップを着て、思い出したように啜り上げる進太を外に連れ出した。進太は白いTシャツに白い半ズボンを着ている。夏らしい、こざっぱりとした格好がMを落ち着かせる。二人連れ立ってコンビニエンス・ストアに向かった。進太の好物のスパゲッティ・ミートソースの弁当とウーロン茶を買い与え、アパートの前まで送っていった。

玄関ドアの前で別れるときになって、進太がMの顔を見上げた。目尻にこぼれた涙の粒が街灯の明かりにキラリと光る。

「M、家に寄っていってよ」

「ありがとう。でも、睦月がいるときに寄るわ。進太の気持ちも、その時睦月に話す。もうすぐ祭りよ。泣いてばかりいたらだめ、強くなるの」

陽気な声で進太に答え、Mは真っ直ぐ自分のアパートに向かった。背中に張り付いてくる進太の視線が針で刺されるように痛い。堪えきれずに空を見上げると、真っ黒に垂れ込めた雲の中で青白く稻妻が走った。遅れてゴロゴロという低い雷鳴が腹の底まで響いてきた。今夜も一雨降りそうだった。蒸し暑さが足元から這い上がってくる。

重い足取りでアパートの前まで来た。一階の駐車場に停めたMG・Fの横で、Mを待っていたように銀色の自転車が稻妻の光を反射した。リサイクル・ショップの店長に頼み、つい昨日納品になった五段切り替えのスポーツ車だ。中古で九千円と値が張ったが、ステンレス製のフレームを持つ輸入品だった。銀色に輝く車体を見ていると急に初乗りがしてみたくなる。左手首の白いホイヤーの時刻はまだ八時前だった。とても寝られる時刻ではなく心境でもなかった。缶ビールよりサイクリングを選ぼうと思った。

今にも降り出しそうな夜空が気になったが、日中の熱が残るハンドルを握り、自転車にまたがる。織姫通りの方角に向けて力いっぱいペダルをこいだ。煉瓦蔵に行って、睦月の特別稽古を見ることに決めた。

「ダメダメ、ダメッ、何度やったら分かるんだ。そこで身体をよろけさせるまでに十五秒も遅い。出になってまだ二分だよ。十五秒も遅れたら芝居が滅茶苦茶だ。やり直しだ」

激しくなってきた雷鳴を縫って厳しい叱声が飛んだ。重いバスの響きが睦月の背筋をむず痒くする。これでもう十回目のやり直しだった。睦月は振り返って暗闇の中に立つ沢田の黒い影を見上げた。沢田は大きく開け広げられた煉瓦蔵の側面の扉をバックに、両足を

広げて仁王立ちしている。蔵の中から漏れる微かな明かりが、コンクリートの広場をぼんやりと灰色に照らし出している。煉瓦蔵の広い構内には沢田と睦月の他に人影はない。他の劇団員たちは七時半に引き上げ、すでにそれぞれの宿舎に帰ってしまっていた。睦月のための特別稽古が始まってから一時間になる。睦月の耳にも沢田のいらだちが伝わってきた。

枝葉を広げたクスノキの下で、地面に片膝をついた睦月は素っ裸だ。厳しく後ろ手に縛られている。それも両手を後ろに回して合掌した過酷なポーズだ。身体の柔軟さには自信がある睦月だったが、背面合掌縛りの強烈な責めが三十分も続いていては、さすがに痛みが両肩を襲う。だが、本番では延べ二時間の間、様々な縛りに耐えて演技をしなくてはならない。弱音を言っているときではなかった。沢田の芝居の中で、私は重要な役を担った役者なのだ。期待に応えなければ明日は開けないと思い、睦月は歯を食いしばる。

背中に突き上げてきたプライドに胸を張って、睦月は立ち上がった。ふくらした乳房の上下を走る二条の縄が無惨だ。顔に流れる汗を拭うこともできず、目に入る汗を顔を振って飛ばした。

「いいよ、いい、その動作は自然だ。芝居が流れる時間に乗って、さり気なく演技を入れていくんだ。周りを見ながら演技しようという日和見が一番だめだ。いいね、芝居の時間は身体で覚えるんだ。僕が決めた時間の流れの中では、どんなアドリブをやってもいい」

ほめられた睦月の顔に他愛なく笑顔が浮かぶ。悪びれぬ態度で素早く沢田の所に戻った。背の高い沢田から半歩下がって睦月が並ぶ。後ろ手に緊縛された小さな裸身を引き連れ、沢田は薄暗い煉瓦蔵の中に入っていった。

「よし、もう一回やろう。何と言ったってクライマックスなんだ。できるようになるまで特訓する。いいね、中の舞台から外の舞台への出だ。二つの舞台では二分三十秒の間隔を置いて、縛られ女郎が馬子に救出される場が進行している。睦月はこれまでの出の中で一番過酷な、背面合掌縛りに緊縛されて二つの舞台を巡礼する。イメージとしての縛られ女郎が将来への夢も希望もなくし、悄然として折檻部屋に曳かれて行くんだ。いいかい睦月、これが最後の出だぞ。芝居も終わる。睦月は迫真の演技で、中の舞台を見ている客のすべてを外の舞台に誘導して来るんだ。つまり、屋内の舞台で演じている役者を完全に食わなくてはならない。凄惨な美しさで百人からの客の先頭に立ち、客と同じ地平を歩いて外の舞台に連れ出すんだ。外の舞台は中の舞台に二分三十秒遅れて芝居が進行している。連れ出された客には何の違和感もない。外にいた客と混じり合って全員がラストシーンに熱狂

するんだ。ああ、本当の馬が使えないのが悔しくてならないよ。立ち稽古が始まれば、最終幕では織姫通りに面した正面の鉄扉を開け放す。本来はイメージとしての馬子が馬に乗って現れ、イメージとしての縛られ女郎を別世界に連れ出すんだ。だが芝居は映画と違う。馬に演技はさせられない。縄を解かれた睦月が鉄扉の外に駆け出して行くだけで終わりだ。同時に舞台も終わる。メルボルンの本番でも仕掛けはまったく同じだ。さあ睦月、本番の気持ちでやってみよう」

黒々とした煉瓦壁に囲まれた空間に、熱のこもったバスが反響した。睦月の背筋を今度は熱い快感が駆け抜ける。大きくうなずいて見上げた沢田の目はギラギラと熱く燃え上がっていた。

二人は並んで暗く細長い空間を歩く。照明は天井から落ちるピンスポットが一灯あるだけだ。閉じられた正面入口寄りのコンクリートの床に、屋内舞台の位置が白いチョークで印されている。睦月の興奮が否応もなく高まる。

「先生、今度は蝋燭も使わせて下さい。本番と同じ条件で、身体に時間を刻みつけたいんです」

睦月の真剣な声が蔵の中にこだました。微かに笑って沢田がうなずく。ほのかな明かりに映える白い歯が、睦月の目に新鮮に映った。今度こそ稽古を一発で決めようと思う。

沢田は正面入口の横に積み重ねた道具入れの中から、太い蝋燭を取り出して戻って来る。直径が五センチメートルもある真っ赤な蝋燭は、睦月がSMショーで愛用していたのと同じ品だ。後ろ手に合掌して緊縛された手に、沢田が赤い蝋燭を握らせる。床に這った腰繩の繩尻を拾い上げて、沢田が睦月の顔を見つめた。

「僕が曳き立ての主人役をしよう。縄を曳いて後ろからついていくが、腰繩は気にするな。メルボルンの本番では照明が輝き、八木節の音色も響く。当然、触れ合う距離に沢山の外国人客がいる。すべて気にせず、客を引きつける演技だけに集中するんだ。いいね」

声が終わると同時にライターの金属音が響き、裸の背中に熱い感触が走った。睦月は軽く目を閉じる。まぶたの裏に花道を行く自分が見える。馬子との密通が露見し、厳しい折檻の待つ部屋に素っ裸で曳かれしていく、縛られ女郎の姿だ。背面合掌縛りの過酷な縄目を受け、我が身を責め苛む郭の主人の足元を照らすために、後ろ手に蝋燭まで持たされてくる屈辱の姿だった。一步一步絶望へと歩む凄惨な姿がすべての客を引き付け、外の舞台へ誘導するのだ。

「よし、スタート」

力強い沢田の声を聞いて睦月は歩き出した。心持ちうなじを下げ、重心を落として舞うように歩む。背中で灯された大きな蠟燭の明かりが白い肌を妖艶に照らし出す。ふっくらした尻の割れ目の陰影が歩みに連れて揺れる。汗の噴き出した素肌が怪しく光っている。上下を麻縄で緊縛されて高く盛り上がった乳房が震え、突き立った乳首が闇に戦く。睦月は何も思わず、何も考えず、ただ肉体だけになって一心に歩いた。裸身を緊縛した縄目と、背中で合掌した手で握った蠟燭のじりじり燃える音だけが、素肌を通り過ぎる時間を制御していた。

煉瓦蔵側面の扉の前まで歩むと、ひときわ白く稻妻が走った。間髪をおかず耳をつんざく雷鳴が轟く。しかし、睦月の裸身は動じようともしない。連續して闇を貫く稻妻に照られ、一層妖艶な姿でクスノキの下の舞台を目指す。降り出した大粒の雨が白い裸身を叩き、ストロボライトのように稻妻の閃光が闇を切り裂く。蠟燭からこぼれ落ちた赤い蠟涙が白い背中に点々と落ちた。

睦月の足が雨水に滑り、緊縛された裸身が微妙に揺れる。揺れは足から膝、腰へと伝わり、裸身がよろよろと地面に倒れかかった。思わず片膝をつく。無惨に割り開かれた股間を青い稻妻が照らし、しどと濡れた陰門の先で赤い性器が悩ましそうに尖っていた。

「プラボー、プラビッシモ、それでいい。睦月はハーメルンの笛吹きだ。すべての客が後を追ってくるよ。最高だ」

雷鳴に負けぬ叫びを上げて沢田が睦月に駆け寄る。地面に片膝を突いてうずくまる裸身を、背後から両手で強く抱き締めた。背中で合掌した睦月の手から、雨に打たれて火の消えた赤い蠟燭が落ちた。

「先生、先生」

二度名を呼び、絶句した睦月が首を捻って沢田を見上げる。視界いっぱいに沢田の濡れた顔が広がり、睦月は激しく口を吸われた。沢田の両手が激しく乳房をまさぐる。睦月は緊縛された両手をもどかしく動かし、後ろ手で沢田の股間を探った。一瞬沢田の身体が離れた後、背中で合掌した手の間に熱く燃えた肉の棒が握られた。睦月はすべての感情を込め、合掌した手で揉むように固く突き立った沢田のペニスを愛おしんだ。

風雨に揺れるクスノキの葉陰の下で、滑稽なほど凄烈なシーンが展開されていた。Mは事務管理室の横で自転車にまたがったまま、しのぎを削る男女の姿を見ている。睦月も沢田も全身から異様な熱気を上げていた。夕立も最盛期を迎えていた。十メートル離れた闇

の中にたたずむMに、二人に気付かれる気遣いはない。連続して走る稻妻の光が足元までズボンを下ろした沢田の痩せた尻を照らし出す。沢田は中腰になって激しく腰を振っていた。股間からのぞく突き立ったペニスは、背中で合掌した睦月の手の中にある。睦月が両手でペニスをしごく度に、雷鳴に負けない獣のような叫びが沢田の口を突いた。その叫びに睦月の喘ぎが被さる。沢田の舌が睦月のうなじを這い、前に回した手が乳房をなぶり股間を責める。二人の動きがひときわ激しくなった。睦月は両膝を大きく開いて地面に着け、高く尻を掲げて後ろに突き出す。剥き出しの股間を豪雨が洗った。沢田が股間にひざまずき、顔を陰部に押し当てて舌で舐め回す。地面に横顔を押し当てた睦月の口から高いうめき声が流れる。堪えきれなくなった沢田が中腰になり、睦月の尻にペニスを押し当て力いっぱい挿入した。愛液にまみれた陰門を激しくペニスがスライドする。繋ぎ合った肉の間を雨水が絶え間なく洗って流れ去った。

ひときわ鋭く稻妻が闇に走り、轟音が続いた。Mの鼻孔に甘酸っぱいにおいが漂ってくる。近くに雷が落ちたらしい。Mは肩をすくめて空を見上げた。天からぶちまけたような雨で、まるで顔を洗っているようだ。男と女の生業もこのくらいにしてもらおうと、気掛かりだったクスノキの根元を見つめた。太い根元の陰でMに背を向け、白く小さい影が雨に煙っている。身体を固くしてうすくまり、母の痴態に見入る進太の後ろ姿だ。来たときから気付いていたが、ありのままを見ることが進太にとって最上の道だと、その時Mは判断したのだ。たとえ睦月と沢田から三メートルと離れていない場所であっても、見ようと決心したことは子供でも一切を見るべきだった。突然、白い影の手元で何かが稻妻に反射して鋭く光った。ナイフという言葉がMの口元まで突き上がってきた。光の加減から見てカッターナイフに違いない。萬一人を刺したとて軽傷しか与えられない刃物だったが、Mは素早く自転車をこぎ出した。でも、Mのいる距離ではもう進太を止めることはできない。

睦月と沢田の営みも、ようやくクライマックスを迎えていた。二人が官能を極める叫びが、恥ずかしげもなく雷鳴と混ざり合う。後ろ手に合掌して縛られた睦月の手が激しく宙をつかんだ。進太の白い影がクスノキの根元から立ち上がる。大股に二歩、前に踏みだし、小さな身体を真っ直ぐ伸ばした。怒らせた肩先を非情な雨が打つ。

「バカヤロウ」

かん高い叫びと共に、進太はコンクリートの地面にカッターナイフを叩き付けた。足元で小さな水しぶきを上げ、貧相なナイフが跳ね上がった。睦月の裸身に被さっていた沢田が、はじかれたように立ち上がる。進太はすごい勢いで回れ右して一目散に駆け出した。

Mの自転車と擦れ違っても何の反応もない。固く両目をつむって下を向き、一心に走る。痩せた身体に、濡れた服がべったりと張り付いていた。

「あっ、Mさん。来てくれたのか」

自転車で駆け付けたMを見て、沢田が間の抜けた声を上げた。萎びたペニスの先から雨水が流れ落ちている。今さら悪びれもせず、腰を屈めてズボンを上げた。睦月は後ろ手に緊縛されたままで自由が利かない。相変わらず地面に這いつくばったままだ。さすがに高く掲げていた尻を落としたので、雨の中のカエルのように見える。地面に押し付けた顔が屈辱と憎悪で歪んでいた。恥辱に赤く染まった肌で雨の滴が蒸発してしまいそうだ。何気ない素振りでMは自転車を降り、睦月の後ろに屈み込んだ。雨で濡れて固くなった縄目を苦労して解く。

「素晴らしい演技だったでしょう」

背中からとぼけたバスが聞こえた。Mが振り返ると、真剣な顔で沢田が答えを待っている。

「そうね、いいセックスだったと思うわ」

冷ややかな声で答え、睦月の裸身に手を添えて立ち上がらせる。

「セックスの話じゃない。僕は睦月の演技のことを聞いている」

「良かったんだと思うわ。睦月の息子が見つめ続けたあげく、セックスの落とし前も着けずに逃げ帰ったくらいの迫力はあった」

答えたとおり、凄まじい演技だったと思う。確かに進太は、睦月の迫真の演技に免じてナイフを捨てたのだと、改めてMは感じた。落とした視線の先で、刃の欠けたカッターナイフが小降りになった雨に打たれていた。

「睦月、進太に演技から見てもらえて幸いだったわね。もうすぐ雨も上がるわ。一緒に帰って進太の話を聞きましょうよ」

目に入った雨を片手で拭って、Mは睦月に優しく声を掛けた。

「M、誰に物を言ってるの。私は女優よ。Mに命令されるゆえんはない」

鋭く言い切った睦月は、ぐっしょり濡れた裸身をそびやかせて胸を張った。股間に張り付いた薄い陰毛がやけに惨めに見える。

Mは黙ってうなずいて自転車にまたがった。母と子の問題は母と子で解決するしかないのだ。たとえ奥深くまで介入したとしても、Mは一人の他人に過ぎなかった。ただ、行く

場をなくして苦しむ進太の胸中を思うと、何もできぬ自分が悔しく悲しくてならなかった。

七月二十九日の金曜日は終日忙しく、Mは夜九時にアパートに帰り着いた。身体も神経も疲れ果てていたが気持ちは高揚している。先週末に、やっと祭りの仕事を軌道に乗せることができたのだ。後は八月一日から三日まで、三日間の八木節祭りの開幕を待つだけよかったです。スケジュールの詳細さえ決めてしまえば、後は現場で生じる微妙な手直しだけで済む。特にMでなくてはできない仕事はないはずだった。しかし、今週早々振って沸いたように浮き上がったイベント計画には難渋をさせられた。八木節祭りの運営をMの会社に委託して気が楽になった市長が、劇団・真球の稽古合宿の成果を公演してくれるように沢田に頼んだのだ。沢田は即座に市長の依頼を受諾した。滞在予定を延ばし、八月一日の午後七時三十分から煉瓦蔵で、メルボルンの国際演劇祭と同様の公演をすると約束したのだ。市は即座に公演の冠に八木節祭り協賛と打った。これで、また一つMたちの仕事が増えた。自信家の沢田は、無料の公演では観客が多すぎて混雑すると言つて、五千円の入場料を取ることに決めてしまった。チケットの製作・販売もMの仕事になった。

頭の痛い一週間だったが、多くの心配が杞憂に終わった。メルボルンに持っていく予定の舞台セットも衣装も、八月一日を待たずに完成した。疑問視されたチケット販売も、地域に密着した一ヶ月の合宿稽古の反響があつて、売り出しと同時に二百枚を完売した。チケットを買い損ねた市民から、再公演を望む声が上がるほど好評だった。お陰で今年の八木節祭りは例年と違い、初日からの盛り上がりが期待されるようになってしまった。もちろんMに異論はない。熱心に取り組んだ仕事の、当然の結果だと思っている。

気分良くシャワーを使い、素っ裸で冷えたビールの栓を抜いたところで電話のベルが鳴った。また仕事の話かと思い、眉をひそめて受話器を取ると、祐子の気忙しい声が聞こえてきた。

「お帰りなさい。Mに聞いてもらいたいことがあるの。今日の午後、修太のお父さんから電話があったわ」

どう話し出したらよいか迷ったように、祐子が口をつぐんだ。

Mの脳裏に記憶の不確かになった陶芸屋の顔が浮かんだ。まるで怒っているのか、泣いているのか分からない顔だ。胸の底が小さく痛み、酸っぱい物が口に込み上げてきた。

「陶芸屋が、何の用事だったの」

助け船に出したMの声も冷たく響いた。祐子がしばらく沈黙した後、乾いた声で話し始める。

「睦月に頼まれて、日曜日に進太を引き取りに来るんですって。その前に私から詳しい話を聞きたいというの。一日早く市に来て、明日の午後、私のマンションを訪ねたいって言ったわ」

「祐子はなんて答えたの」

「お待ちしてますって言ったわ。私が、修太のお父さんの頼みを断れると思う。三人しかいない幼なじみの中で、生き残っているのは私一人よ。私は自閉症だったから、修太のお父さんにも散々世話をになった。でも、今はもう、みんな思い出したくない。修太も光男もいないんだから、私の記憶も消してしまいたいくらいよ。本当は陶芸屋さんなんかに会いたくはない。死んでしまった二人が悲しすぎる。でも、私はとても、そんなことは言えなかつた」

受話器の中から祐子の啜り泣きが聞こえてきた。名前を聞いただけのMがつらくなつたくらいだ。陶芸屋の内声に接した祐子の胸は、張り裂けそうになつたに違ひなかつた。

「祐子、電話では話しきれない内容よ。これから祐子の家に行くわ。いま、どっちにいるの、アトリエ」

一瞬、電話口の祐子が躊躇する雰囲気が伝わってきた。

「帰ったばかりでMはお疲れでしょう。明日の午前中でいいわ」

「明日の午前中は仕事なのよ。私は疲れていない。すぐ行けるわ」

また沈黙が流れ、祐子の投げやりな口調が帰ってくる。

「マンションのほうよ。でも、連れがいるの。デザイナーの大久保玲。軽蔑しないで欲しい」

祐子の戸惑った声に、またMの胸が痛む。鋸屋根工場のアトリエでデザイナーと一緒にいるのなら当たり前だが、自宅のマンションだという。恥ずかしそうに告げた祐子が哀れでならない。祐子も二十八歳になる。自由に恋を楽しんでも、後ろ指を差されるゆえんはない。だが、ついさっき話題になった修太も、光男も、恋を楽しむことなどできはしない。祐子の心情を思うと涙がこぼれ落ちそうになる。

「軽蔑する者などいない。祐子、二十分後に着くわ」

返事を待たずにMは電話を切った。急に疲れが全身を襲つたが、必死に耐えてドレッサーを開き服を探す。二人のデザイナーに見栄を張るような気がしたが、迷わずアイボリー

のワンピースを選んだ。シルクと麻で織った、Mの体型にぴったり合った短い丈の服だ。素肌に着て姿見を見る。最近では珍しい装いに、妙に若返った気分になる。大きく開いた襟から乳房の谷間がのぞいている。何となく寂しそうな感じは歳のせいだと諦め、首筋に太めの金のチェーンを飾る。初めて使う装身具だった。

着替えに思わぬ時間をとり、慌てて外に飛び出す。素肌に張り付いてくるような蒸し暑さに眉をしかめる。オーブンにしたMG・Fに乗り込んだ瞬間、キーを持ってこなかったことに気付いた。仕方なく車から降り、銀色の自転車を引き出す。祐子のマンションまでなら自動車と大差ない時間で行ける。プレスの効いた服につくに違いない、サドルの跡が気に掛かる。だが、今さらデートに出掛ける小娘のような気になるのも情けない。よっぽど見栄張りなどと、心の中で笑ってからペダルをこぎ出す。相変わらずゴロゴロと響く遠雷の音が耳につく。織姫通りの方角からは、八木節の陽気なリズムが響いていた。

煉瓦蔵の前に建つマンションの六階でエレベーターを降り、Mは祐子のフラットに向かう。よっぽど煉瓦蔵に寄って、特別稽古をしているはずの睦月を引っ張って来ようかと思ったが、情緒が不安定な今の祐子を交えた会話では、話がどこへ飛んでいくか分からないと思い直して断念する。

玄関のブザーを押すと、待っていたように祐子がドアを開けた。左手首のホイヤーを見ると、約束したとおり二十分が経過していた。何となく気詰まりな空気を感じ、改めて祐子の顔を見る。明るい玄関灯の光を浴びて、祐子はじっとMの服装に見入っている。祐子は相変わらずブルージーンズにTシャツといった飾らない格好だ。祐子の顔に寂しい笑いが浮かぶ。

「M、いらっしゃい。夜分ご迷惑を掛けます。ごめんなさい。さあ、暑いから早く中に入って」

少々他人行儀な言い振りが気になったが、Mにとって祐子も他人には違いない。案内されるまま広いリビングに通った。寒いほどエアコンの効いた室内の白いソファーに痩せた青年が座っている。長く伸ばした髪を黒いサマーセーターの後ろで束ねている。Mの姿を見て優雅な仕草で立ち上がった。クラブ・ペインクリニックで見たはずだったが、記憶より端整な顔立ちだった。

「こんばんわ。大久保玲です。どうぞ、ゆっくりしていって下さい。僕はもうすぐ帰ります。祐子が、独りになるのは嫌だと言うものですから、Mさんが来るまで待っていたんで

す」

一言一言はっきり発音する、落ち着いた口振りだった。いつの間にか大久保の横に立った祐子の頬が赤く染まり、泣き出しそうな顔になった。

「玲の作った舞台衣装を見せてもらっていたの。生地はみんな、私の織った物よ。Mも見ていいって」

取って付けたように祐子が言って、椅子を勧めた。卓球台ほどもあるテーブルの上にカラフルな衣装が広げられている。Mは祐子が勧めてくれた、ゆったりとした椅子に浅く座る。Mが座るのを待っていたように、向かいのソファーに祐子と大久保が並んで座った。三人の目の前に華麗な衣装が広げられている。

「沢田さんの芝居によく似合いそうな衣装ね。色の使い方が落ち着いている。でも、デザインは大胆ね。とても女郎や、馬子が着る服には見えない」

豪奢な衣装を目の前にして、Mが仕方なく感想を口にした。一瞬脳裏に、私は何をしに来たのだろうかと疑問が掠める。

「Mさんは、八木節の法被や和服のイメージが頭に染みついてるんですよ。まあ、一般的にはそうしたものなんですが、沢田さんも僕も、今度の公演では一切の既成概念を払拭することが狙いなんです。芝居の筋は思い切ってレトロにして、仕掛けで前衛を走るのです。面白いですよ。今から胸がときめきます。でも、これ、これならMさんもイメージできるでしょう。睦月さんが使う衣装です。SMショーで使うような、ただの縄じゃないんですよ。四色のステンレス・ファイバーの糸を祐子が縄に撚り上げたんです。照明の加減でシルバー、ブラウン、パープル、ゴールドの四色に光ります。それも金属の糸だから、重々しく沈んだ色で光を反射する。そりゃあもう凄惨な緊縛美が演出できます。睦月さんは芝居がうまいから今から楽しみですよ」

大久保が質感のある直径八ミリほどの金属の縄を手に持って、熱心に説明する。横に座った祐子の頬がまた赤く染まる。手製の縄で緊縛された睦月を想像したのかも知れない。ひょっとするとMをモデルにしたのかも知れなかった。これまで祐子は、あまりにもMの身近に居すぎたのだと、不当なことを承知でMは思った。

「金属の縄で縛られるなんて、睦月もかわいそうね。さぞ痛いででしょうね」

つい陳腐な感想がMの口に上った。縛られ慣れた身体が言わせたものだ。慌てて祐子の顔を見る。祐子はうつむいていた。

「いいえ、金属の縄と言っても麻縄と変わりませんよ。かえってしなやかかも知れない。」

触ってご覧なさい」

大久保が答えて中腰になり、長さ十メートルほどの縄の束をMに手渡す。手にした金属の縄は重く、素材が分からぬほど無機質な触感がした。まるで、縛られる者の肌の一部となって、ねつとりと深部まで拘束してくるような感じだ。

「股間を縦に縛ったって大丈夫ですよ。陰部が傷つくこともない。Mさんも縛られることがお好きなんですかね。祐子に聞きましたよ」

Mはしばし、あ然としてMの目をのぞき込む青年の視線を受け止めた。黒い瞳の奥に見慣れた官能の炎が揺れている。祐子に求めきれないものをMに求める、男の理不尽な目だ。

「ええ、素っ裸で縛られるのが好きよ」

大きくうなずいて、平然と答えたMの声が部屋に響いた。居たまれなくなってしまった祐子が立ち上がった。大久保は背筋を伸ばし、Mを見つめたまま言葉を続ける。

「Mさん、ありがとう。今夜は最高に楽しかった。ぜひ、睦月さんと一緒に縛られ女郎の役で芝居に出て欲しいな。沢田さんも喜んで、また脚本を書き直しますよ。これで僕は帰ります。お邪魔しました」

Mの返事も聞かずに大久保が立ち上がり、深々と頭を下げてからドアに向かった。

「玲、待ってよ」

鋭い声で祐子が呼び掛け、大久保が振り返る。

「いいよ祐子、送らないでくれ。独りに耐え兼ねたら、いつでも僕を呼んでくれ。すぐに飛んでくる。でも、僕は祐子を誘わない。僕は孤独に強い」

大久保の鮮明な声が響き、ドアの閉まる音がした。突っ立っていた祐子の膝が崩れ、ソファーに腰が落ちる。静けさの満ちた部屋に遠雷の音が聞こえてきた。

「祐子の作った縄はいい縄だわ。私にも作ってくれるというの」

天井のライトを重々しく反射する金属の縄を見て、Mが優しく尋ねた。

「今夜のMは意地悪だわ。ちっとも私の気持ちを考えてくれない」

Mの問いに答えず、なじる調子で祐子が言った。

「どうして私が、祐子の気持ちを探らなくちゃいけないの。言葉なんて当てにならないものよ。明日でなく今夜訪ねてきたことを言ってるのなら、祐子も合意したことだわ」

「違うわ。そんなことは言っていない。今夜のMとは話が擦れ違う。きっと、玲にMの過去を漏らしたせいね」

「それこそ、祐子の邪推というものよ。祐子が何を話しても私は気にしない。祐子がイメ

ージした私の姿がどう語られようが、私が責任を取ることはできないわ。すべてを祐子の人格が決め、責任を取ればいいことよ」

「M、突き放さないで。修太のお父さんの電話を受けた私の身になってみてよ。つらい、本当につらいの。みんな死んでしまい、残された私が全責任を負うのよ。残酷だわ。どうして私が、修太が残していった子供の話を小父さんにしなければならないのよ。自分の孫なんだから、黙って鉱山の町に連れていけばいい」

祐子が興奮して話す内容は、いつしか進太のことへ移っていた。自分の感情が整理できない、相変わらずの祐子がMには悲しい。努めて冷静な目で取り乱す祐子の顔を見つめた。祐子の目尻から涙がこぼれ落ちた。

「祐子、まず自分の言ったことは、言ってからでもよく考えなさい。大変な間違いをするわ。二十日前の祐子は、睦月から進太を奪うことは誰にも許されないと言って泣いたのよ。それが今度は、黙って鉱山の町に連れて行けと言う。無責任に過ぎないかしら。何よりも、進太のことを考えていないわ」

「母である睦月が決めたことよ。仕方がないじゃない」

即座に、叫ぶような答えが返ってきた。Mの背筋を冷たいものが走りすぎる。

「それでは、進太への虐待も母が決めたことだから仕方ないと思ったのね。親子というのは親が決めればすべてで、子供は黙って従うべきなの。家族というのはそんなものじゃないわ。互いに歩み寄って、互いに寄り添うのが家族でしょう。祐子も小さかったころを思い出してみるがいいわ」

「私には、Mがいたわ」

Mの言葉が終わらないうちに祐子が叫んだ。涙がこぼれ落ちる顔を左右に振って、啜り上げながら祐子が話し始める。

「Mがいたから私は生きてこられた。Mがいなければとうに死んでいたはずよ。きっと自殺したわ。Mは自分の生き方を曲げてまで歩み寄り、私を支えてくれたわ。今Mが言ったようにして、幼かった私を家族の一員として迎えてくれた。何もできない私だけれど、そんなMに報いることだけを考えて生き続けた。もう二十年近くMに甘えてきて、やっと分かったわ。Mのような人は他にはいない。私は、そんな素晴らしい人と巡り会えた稀有な例だって。でも、Mの家族になれない人は大勢いる。Mの素晴らしさを認められない人もいる。例えば睦月。ずっと勝ち続けて生きてきた睦月には、初めての挫折で人に縋る勇気がなかった。すぐ側にMがいるのに、素直になれなかつた。Mを憎むことで挫折に打ち勝

とうと思ったのよ。それに睦月は進太の実の母よ。二人きりの家族だもの、いくら過酷な道でも二人で歩むべきだわ。睦月が家族を大切にしている限り、どんなことがあっても母子二人で生きるしかないと、あの時は思ったの。でも今は違う。睦月は子供より野心を取った。進太を捨てて夢を拾ったのよ。家族を解体した睦月にとって、進太はただの邪魔者だわ。進太はまだ幼すぎる。小学校一年生の子供が誰の家族にもならずに生きていくことはできない。少なくとも、鉱山の町に行けば家族がいるわ。Mの言うように、進太のことを一番に考えるなら家族を捜してやってから言うべきよ。幸い、私はMの家族になれたから生きてこれたわ」

勝手な論理が祐子の織りなす布のように流れ出た。自分の言葉に陶酔した祐子は泣くのも忘れ、ひたすらMを責め続けた。

「ひょっとして祐子は、私に進太を引き取れと言うの」

祐子の紡ぎ出す言葉が途切れたとき、静かな声でMが尋ねた。祐子は答えず、じっとMの目を見た。断固とした答えに出会い、Mは目を反らして窓の外を見た。暗い夜空に遠く稻妻が光った。

「Mが決心してくれれば、私はどんなことでもする。でも、Mが踏み切れないのなら、捨てられた進太をひろってくれる家族が鉱山の町にあるわ」

つぶやくように祐子が言って口をつぐんだ。Mは溜息を押し殺して立ち上がる。

「祐子の気持ちは分かったわ。陶芸屋には私が事情を説明する。私は、今の進太には睦月が必要だと確信しているわ。明日の午後、陶芸屋が訪ねてきたら、すぐ私に電話をちょうだい。もちろんナースも来るんでしょう」

「ナースは来ないわ。小父さんは陶芸をやめたって言ったわ。ナースが看護婦に復職して暮らしを支えているらしい。とても忙しくて、来られないと言っていたわ」

「そう」

Mは上の空で答えて玄関に向かう。陶芸をやめたという陶芸屋がイメージできなかった。

「大久保さんって、祐子にお似合いだったね」

靴を履きながら祐子を見上げ、さり気なく声を掛けた。大久保のことで生じた気詰まりを解いておこうと思ったのだ。

「ええ、私には大切な人よ。でも、彼にとって私は違う」

にべもなく答えた祐子の声に悲しさが溢れた。Mは自分のことと同時に言われたような気がして、背を向けてドアを開けた。

盛夏の日射しが土曜日の駅前広場に降り注いでいる。高架になったプラットホームから見下ろす広場に人影はない、人影どころか、動くものもないコンクリートの広場は、影さえなくして静まり返っている。

陶芸屋は不自由な右足を引きずってプラットホームをゆっくり歩く。前を行く乗客の姿は階段に飲み込まれ、すでに見えない。振り返って見ても、後に続く者はいない。ちっぽけな二両編成のディーゼルカーが、まぶしい光を浴びて停まっているだけだ。茶色に煤ぼけたトロッコのような車両は、鉱山の町から終点の市まで一時間三十分をかけて陶芸屋を運んできた。

「車に乗れたらな」

思わずつぶやきが漏れ、その弱々しさに肩をすくめる。いつの間にか曲がっていた背筋を伸ばし、陶芸屋は目の前に広がる市街をもう一度見つめた。息子の修太の命をあっけないほど簡単に奪い去った憎々しい街だ。ありったけの憎悪を持って対峙しようと思うが、熱射に灼ける街はただひたすらだるく、眠っているように見える。大きく髪が後退した額から流れ落ちた汗が目に沁み、涙が滲む。ぼんやりと霞んだ市街が陽炎のように揺れた。

陶芸屋は左手に握ったステッキに力を入れ、自由にならない右足を踏み出す。固くなつた右半身がわずかに弧を描き、地を這うように硬直した右足が一步を踏み出す。曲がつたままの右腕が胸の前で震える。全身から汗が滴り落ちる感触がつらい。しかし、独りで歩けるまでに回復した喜びもあった。もう少し頑張ってリハビリテーションを続ければきっと、身体障害者仕様の自動車が運転できるようになるに違いない。その思いだけが今の陶芸屋の生きる希望だ。果たされないかも知れない希望だった。脳梗塞は治癒したわけではない。いつまた勝手気ままな脳の血管が詰まるか分からない。かろうじて残った発語機能が奪われる恐れもあった。それどころか植物人間になる可能性もある。右片麻痺の後遺症が残った陶芸屋は別に死は怖れなかったが、全身の不自由を極度に怖れた。

階下の改札口に続く長い階段の入口が、やっと目の前に現れた。思ったより急な階段だ。天井の中程に宙づりにした横断幕が微かな風に揺れている。明後日から始まる八木節祭りを、真っ赤な文字で仰々しく宣伝した陳腐な幕だ。陶芸屋は祭りより、まず階段を下りることを考えねばならない。灰色の化粧タイルを張った階段の側壁に身障者用のリフトを格

納した金属の箱が見えた。黄色の文字で、使用の際は駅員に連絡するように書かれている。白い送話器を入れた透明な箱が笑っているように見えた。陶芸屋は苦笑を浮かべ、大きな金属の箱に書かれた文字を三回読んだ。

「俺は、身体障害者か」

声に出して陶芸屋がつぶやいた。先ほどの弱々しいつぶやきを取り消すような、高くいらだたしい声だ。

「いや、俺は病気なだけだ」

頭の中で答えが響き、陶芸屋は不自由な身体を横にして、階段に硬直した足を下ろした。身体障害者仕様の自動車を運転したい気持ちとは別に、右片麻痺という障害を受容たくない思いが強い。特に他者の助けを借りる場合はなおさらだった。負け惜しみと言った方がよいほどのプライドが、急に頭をもたげる。二年前に襲った障害を受容できるのは、今でも妻陽子の前だけだった。今日は服も白い麻の作務衣を着てきた。作務衣なら何とか一人で脱ぎ着ができる。陽子以外には、誰にも弱みを見せたくないと思う。

陶芸屋は長い時間をかけて一段ずつ急な階段を下りる。見ている者は誰もいない。時折、はるか下方で直角に曲がった階段から風が吹き上げてくる。暑く湿った風だが、汗まみれになった肌に心地よい。歯を食いしばって踊り場まで下りると、左手の十段ほどの階段の先に改札口が見えた。駅員もいない改札口の向こうに人影がたたずんでいる。駅前広場から入る強烈な光を背中に浴びた人影は、真っ黒な影になって陶芸屋を見上げた。

「小父さんなの、修太の小父さん」

陶芸屋の姿を認めて、黒い影が大声を出した。

耳に飛び込んだ呼び声が陶芸屋の全身にこだました。左半身が戦き、感覚を無くした右半身が震える。胸の芯がキュッと痛んだ。

「祐子」

喉の奥で答えた瞬間、全身がふらつき、陶芸屋は階段を転げ落ちた。全身を激痛が襲う。コンクリートの地面に這いつくばって見上げた目に、走り寄ってくる祐子が見えた。驚くほどゆっくりブルージーンズを穿いた長い足が走る。白いタンクトップの胸がゆったりと揺れている。

「ああ、何ものが遠く、ゆっくりしている」

無言でつぶやき、脳裏に懐かしさが込み上げ、悔恨と交差した後、陶芸屋の意識はフツと遠のいていった。

「小父さん、しっかりして。どこか痛む」

祐子の声がはっきり聞こえてきた。意識を失ったのは、ほんの一瞬だったようだ。陶芸屋は黙って大きくうなずき、左手で無意識にステッキを捲す。無惨に痩せてしまった脇の下に祐子が手を差し入れ、立ち上がるのを介助しようとする。一瞬手を払いのけようとしたが、思い直して身をまかせ、ふらつきながら陶芸屋は立ち上がった。

「もう大丈夫だよ。しばらくぶりに祐子を見て、きれいになっていたんで驚いてしまった。情けない姿をお見せして本当に済まない」

精一杯の強がりに祐子は答えようともしない。陶芸屋の脇から手を抜き、正面から無遠慮に全身を見つめた。大きな目に涙が溢れている。陶芸屋の胸がまた激しく痛んだ。

「小父さんは無茶よ。電話で身体のことを言ってくれていたら、鉱山の町まで迎えに行つたのに、本当に無茶よ。他人行儀だわ。あんまり遅いので到着時刻を間違えてしまったかと思った。踊り場に現れた小父さんを見たときも、始めは分からなかったわ。怪我がなくて本当によかった」

声を震わせて祐子がなじった。陶芸屋はまるで、娘に意見されているような気になる。確かに息子の幼なじみだった祐子は、あのころは娘のようだった。しかし、いやおうなしに歳月は流れ、息子は死んだ。もはや遠すぎる時間の彼方にあるお伽噺の世界のようだ。実際、美しい女に変わって目の前に立つ祐子に、陶芸屋は昔のように話し掛けられないのだ。何もかもがまぶしすぎた。

「俺だって、改札口にいる祐子が分からなかったよ。大きくなって、美しくなった。まるで他人のようだ」

陶芸屋の正直な感想を聞いた祐子の目に新しい涙が浮かんだ。

「いやよ。私も、修太も、光男も、鉱山の町ではみんな家族同然だったわ。今さら他人のようだなんて言われたくない。何よりもMが許さないわ」

祐子が何気なくMの名を口にした。忘れることのなかった名を聞いて陶芸屋の全身が緊張する。暑さの中で頬がさっと熱くなるのが分かる。赤く染まった顔を祐子に見られたような気がして、陶芸屋はまた少年のように頬が熱くなった。

「小父さんを迎える前に、Mに電話したのよ。一時半に私のマンションに来てくれるわ。進太のことはMが話してくれる。私には、修太の息子の話なんて悲しすぎてとてもできない。さあ、早く行きましょう」

出会いの衝撃を吹っ切るように、明るい声で祐子が言って、陶芸屋の脇に力強く腕を回

す。すでに抵抗する気力も無くした陶芸屋は、半身を祐子に預けたまま暑熱がこもる駅舎の外に歩き出した。他人のように成長した祐子の手が脇の下でくすぐったい。二人の間に時間の大きな断絶があった。たとえ、かつての祐子と同じ年代にある孫の進太を引き取ったにせよ、あのころに戻ることはできないと陶芸屋は思う。半身不隨になり、年老いた自分が若返ることもないのだ。離散した家族は二度と帰って来ない。

陶芸屋はMと会うことに、ふと不安を感じた。

Mは織姫通りの歩道に沿ってMG・Fを駐車した。幸い、真夏の土曜日の昼下がりは極端に交通量が少ない。幌をかけて冷房を効かせた車内から路上に降り立つ。猛暑の夏はスポーツ車にとっては地獄だ。せっかくのオープンカーも形無しだった。急いでエレベーターホールに向かう。午前中いっぱい、四つの商店連盟の理事長の店を巡り歩いたMの服装は、白いショートパンツに紺の祭り半纏姿だった。傍目には涼しそうに見えるが、これが結構暑苦しい。半纏を脱いだTシャツ一枚の格好が、やはり真夏の定番だった。

玄関に出迎えた祐子に従ってリビングに通る。白いスニーカーを脱ぐとき横目にした、登山靴のような黒い革靴がMに違和感を与えた。いくら陶芸屋が山深い鉱山の町から下りて来たといっても、いささか大仰すぎる。

リビング正面の白いソファーに、針のように痩せた男が疲れ切った表情で座っていた。固く曲げた右手を胸の前で握り締め、男はまぶしそうな目でMを見上げている。前頭部の髪が大きく後退した広い額の下で、見覚えのある大きな目が苦しそうに笑った。

「M、久しぶりだね。相変わらずきれいだ」

語尾を震わせて挨拶の言葉を口にした陶芸屋が、硬直した右足を引きずって立ち上がる。祐子が素早く駆け寄って肩を貸す。Mは小さく口を開いたまま声がない。全身が冷気に触れたようになに寒い。熱い悲しみが徐々に胸に込み上げてくる。

「十六年振りに会ったんだ。M、何か言ってくれないか。あまりに無様な姿を見て声も出ないのかい。俺もまだ五十二歳だが、こんな様になってしまった。でも昔のよしみだ、何か言ってくれないと涙がでるよ」

すねた声で陶芸屋が答えを促した。Mの目に大粒の涙が溢れる。涙は頬を伝い、小さく開いた口に流れた。塩辛い海の味が舌を刺す。ピアニストの骨の味が甦り、遠くで陶芸屋の精液の味がした。Mの顔が泣き笑いにゆがむ。

「そうね。しおたれた格好に度肝を抜かれた。七十二歳には見えるわ。陶芸屋さん、お久

しぶりね」

「相変わらずMは元気だ。憎まれ口を聞いて俺も安心したよ。だが、俺はもう陶芸屋じゃない。陶芸は二年前にやめたよ。そんなことより明後日から市は祭りだってな。Mの祭り半纏を見て、あの時の裸祭りを思い出したよ。懐かしいな」

相変わらず泣き出しそうな声で陶芸屋が言葉を続けた。十六年前の猛暑の鉱山の町の、廃社となった神社の境内で繰り広げられた裸祭り。素っ裸で後ろ手に緊縛されたMが御輿の上に直立していた。その御輿を担ぐ陶芸屋に緑化屋、村木の三人。大うちわを持って御輿の周りで囁き立てる修太、光男、祐子の三人の子供。全員が素っ裸だった。遠い夏の日を大勢の家族で祝った祭りが今、歳月を越えて三人の脳裏をそれぞれに横切っていく。今は亡い修太と光男の幼い顔が、部屋中に広がっていった。

祐子の啜り泣く声が流れ、陶芸屋の目から涙が滴り落ちた。Mの涙腺も堰を切って開く。大粒の涙で霞むMの視界で死者たちが嗤った。感傷に浸る生者の驕りを高らかに嗤う。Mの喉元にまた熱い悲しみが込み上ってきた。

「違うわ、みんな違う。陶芸屋は今でも陶芸屋よ。何が陶芸はやめたよ。聞いてあきれるわ。手足で作れなければ口で作ればいい。泣き言をいっている暇があったら長い時間をかけて土をこねたらいい」

うつむいていた顔を振り上げ、鋭い声でMが叫んだ。涙の滴が飛び散り陶芸屋の頬を打った。

「M、残念ながら俺は病気だ。こうしているうちに、いつ脳の血管が詰まってしまっても不思議じやないんだ」

陶芸屋の惨めな弁解の声がMの耳元を弱々しく掠めた。

「私だって毎日車を運転している。事故死する可能性は陶芸屋より、よっぽど高いわ。でも、そんなことは考えたこともない。陶芸屋も私も同じよ。過ぎ去ったことばかりしのんでいても未来は開けないわ。希望を持ってやり遂げるのよ。人は誰でもいつかは死ぬ。動けなくなるのが怖いのなら、その時は私が陶芸屋を殺してやる」

殺氣をはらんだMの声が陶芸屋の耳を打った。

「俺にも希望はある。リハビリで努力をすれば、Mのように元気で美しくなれるだろうか」

独り言のように陶芸屋がつぶやいた。

「無理ね。それはただの夢よ。希望と夢は違うわ。現在の自分を受容するところから希望

は広がるのよ。地に足が着かない夢とは違う。さあ私を見なさい。陶芸屋が五十二歳なら、私も、もう四十五歳よ。陶芸屋が美しいと言ってくれた身体も変わった。私の裸をしっかり見なさい」

陶芸屋の目を見つめて言ったMが、汗と涙で濡れた祭り半纏を脱ぎ白いTシャツとショートパンツを脱いだ。

陶芸屋の目の前に素っ裸のMが、無防備に両手を下げる立っている。確かに記憶の中の裸身とは違っていた。豊かに盛り上がっていた乳房は、いささか張りを無くし、弾力感がない。生意気そうに上を向いていた両乳首も、申し訳なさそうにうなだれている。脇の下から二の腕に着いた肉も重そうに見える。細く引き締まっていたウエストのラインも丸みを帯び、腰から腿にかけても余分な肉が目立った。以前と変わらぬ白い肌のそこかしこに、焦げ茶色の色素が染みのように沈着している。だが、見苦しいところなど一切ない。完璧な裸身に思える。何も構わなくなってしまった陽子の裸身とは雲泥の差だった。目前にした生身の肉が陶芸屋の無くした性を責めつける。

二人の横に立ちつくす祐子は、繰り広げられる異様な光景に声も出ない。陶芸屋の熱い視線に、堂々と四十五歳の裸身を晒すMの真意を計りかねた。Mに命じられれば、いつでも惜しみなく裸身を晒す覚悟が祐子にはある。何よりも祐子の裸身は非の打ち所がないほど美しいはずだった。だが、陶芸屋の目に灯った怪しい搖らめきを見ると、見る者を性の高まりへと誘う裸身は美しさだけがすべてではないような気がする。妙に頭の中が混乱し目がくらみそうになった。突然、露骨な言葉が祐子の耳に飛び込んできた。

「後ろを向いて、尻を見せてくれ」

高ぶった震える声で、陶芸屋がMに頼んだ。

「いいわよ。陶芸屋はお尻が好きだったわね」

無造作に答えたMが後ろを向いた。豊かな丸い尻がゆったりと息づいているが、やはり陶芸屋の記憶より位置が低い。決して垂れ下がっているわけではないが、尻の割れ目の切れ込みも浅くなったように感じられた。

「中も見て」

背を見せたまま言ったMが両足を開き、腰を曲げて尻を突き出す。黒い色素の浮いた肛門が笑い、陰唇の間に赤黒い肉襞がのぞいた。黒々とした陰毛の根元に、小さく尖った性器が見える。全体に乾いた感じのする陰部だった。

「かわいそうに」

小さくつぶやいた陶芸屋が右足を引きずって進み出る。Mの股間に苦労して屈み込み、尻の割れ目に顔を埋めた。不器用な舌が止めどなく股間を這う。切羽詰まった陶芸屋の喘ぎがMの耳に聞こえてくる。いつしかMの股間は陶芸屋の唾液でしつづに濡れた。だが、官能の高まりはやってこない。熱い悲しみが胸の底から股間に下りてきただけだった。Mは背筋を正して振り返り、陶芸屋を見下ろした。

「陶芸屋の裸も見たい。脱ぎなさい」

Mの声に陶芸屋の顔が歪み、頬が赤くなつた。

「俺はいいよ。とても見せられた裸じゃない。こうしていられるだけで勇気が湧く。それ以上は要らない」

「ひょっとして、ペニスが役に立たなくなつたの」

Mの残酷な声が響いた。陶芸屋の顔が真っ赤に染まる。

「そうだ。勃起するどころか何も感じない。すべてを頭で感じるだけだ」

即座にふとくされた苦渋に満ちた声で陶芸屋が答えた。

「脱ぎなさい」

冷静な声で、またMが促した。

「M、おかしいわよ。さっきから見ていると、病気の小父さんに異常なことばかりするわ。小父さんがかわいそうで、私は見ていられない」

耐えきれずに祐子が叫んだ。全身が微かに震えている。

「祐子は子供に返っておとなしくしていなさい。これは、私たち大人の問題なの。今を盛りの祐子は後学のために、大人のすることをじっと見学しているがいい」

冷たい声で言いきったMが、祐子を睨み付ける。気圧されて引き下がった祐子は力無くソファーに座り、両手で頭を抱え込んでしまった。静まり返った部屋に祐子の啜り泣きが響く。やがて分かる日も来ると思い定め、悲しみのこもった目でMは祐子を見た。大人に訪れる機会は数少ない。陶芸屋はこの一瞬に希望の芽生えを賭けるしかない。今を逃がすことはできないのだ。喪失した機会は二度と来ないかも知れない。もうそれほどの歳月を生きてしまったのだ。

Mは視線を陶芸屋に戻し、裸になるよう無言で促す。陶芸屋が自由になる左手で作務衣の紐を解き始めた。痩せこけた醜い裸身がMの前に現れる。右半身は硬直し、筋肉も落ちてしまっていた。かろうじて生き残った左半身も目を被いたくなる惨状だ。股間に垂れ下がった萎びたペニスは見るに耐えなかった。Mは表情から驚愕を追い払い、毅然とした顔

で陶芸屋の全身を見た。たとえ涙が溢れても、目を背けないことだけを強く決意する。すでに陶芸屋も泣いているのだ。涙はちょうどよい潤滑油になる。

「元気がないことは確かね。でも、ペニスはちゃんとぶら下がっているわ。私も舐めさせてもらうわね」

優しい声で言って、Mは陶芸屋の股間にひざまずいた。小さく萎みきって排泄の用しかできなくなったペニスを、両手で愛おしみ唇をつける。

「M、小父さんにはナースがいるのよ。忘れないで」

ソファーから祐子の最後の抗議の声が上がった。

「私はフェラチオが下手よ。でも、ナースは上手。嫉妬に狂ったナースがその気になれば、陶芸屋のペニスも高々と勃起すること請け合いよ」

大声でMが答え、萎びたペニスを口に含み舌の先で転がした。上目遣いに陶芸屋を見ると、落ちてきた涙が目に入り視界が霞んだ。

「ありがとうM。俺もまだ生きられそうだ」

官能に左右されぬ、生の喜びだけが響く声がMの頭上に落ちてきた。

「あたりまえよ」

ペニスをしゃぶりながら、Mは声にならぬ答えを胸の中で言った。家族はいいものだと心の底から思う。耳の底で、幼いころの修太、光男、祐子の笑い声が響き渡った。

窓の外は明るいが、もう午後五時を回っていた。

Mは祐子のリビングで、進太の置かれた状況と母の睦月の行動を陶芸屋に詳しく話した。積極的に不自由な身体を乗り出して、陶芸屋は熱心に耳を傾けた。話が睦月の虐待に及ぶと眉をしかめ、苦しそうな顔で遠くを見た。まるで孫の痛みに息子の痛みを重ね合わすような悲愴な表情だ。すぐ決心を固め、大きくうなずいて口を開く。

「考えるまでもないことだ。進太は鉱山の町に引き取る。俺たちだって進太のことを忘れていたわけじゃない。これまでだって、いくら頼んでも睦月が会わそうとしなかったんだ。俺たちは祖父母だ。引き取る権利があるし、義務もある」

興奮した陶芸屋は、すぐにでも進太を引き取りに行きそうな剣幕だ。しばらく間を置いてからMが口を開く。

「結論を急ぐ陶芸屋の気持ちは分かるけど、私はもう少し待って欲しいと思っているの」

Mの言葉を聞いて陶芸屋の顔が曇った。Mの真意を計りかねるように、鋭い視線でMを

見つめた。

「はっきり言うと事情が変わったのよ。睦月が母子二人の生活を見失って、気まぐれとしか思えない虐待を続けていたときは、私も進太を陶芸屋に引き取ってもらおうと決心したの。でも今は違う。睦月にとって進太は、ただの邪魔者になってしまった。だから、陶芸屋に進太のことを頼み込んだのよ。頼んだのは睦月で、私でも祐子でもない。それが問題なの。進太は母に見捨てられたと思っているわ。すごく感情が不安定で怖いくらいよ。このまま陶芸屋が進太を引き取れば、小さな胸に仕舞いきれないほどの傷が残る。今初めて、進太に睦月が必要なのよ」

陶芸屋は訝しそうな顔でMの話を聞いた。たとえ心に傷が残っても、進太はまだ小学校の一年生だ。時間をかければ、母に捨てられた傷などきっと癒えると思った。

「子を虐待する母が母なら、子を捨てる母も母だ。どっちも許されることでない。事情は何も変わらないよ。俺たちが進太を引き取ればすべてが解決する。後は時間が進太を癒すだけだ」

「時間をかけても癒えない傷があるのよ。母を慕いだして、何とか関心を引こうとまでしている進太にとって、自分を引き取ろうとする陶芸屋はきっと敵に映るわ。無理をしたら二度と心を許すことはないと思う」

「では、どうしたらいいんだ」

「分からぬわ」

力無く答えたMの声に悲しさが滲む。

「進太に会わずに帰れと言うのか」

陶芸屋の声に怒気が滲む。どうやら小さな進太に、大きな希望を見出したようだった。Mの悲しさが募る。

「いいえ、帰ることはないわ。明日は陶芸屋と一緒に、私も睦月と進太の母子に会う。睦月の前で進太が同意しない限り、決して鉱山の町へ引き取らないと言って欲しいの」

Mの頼みに陶芸屋は答えようとしない。長い沈黙の時間が流れた。

「明日までに決心してくれればいいわ。今夜は、狭いけれど私のアパートに泊まっていってね。さあ行きましょう」

Mの声にはじかれたように、祐子が立ち上がった。

「何で小父さんがMのアパートに泊まるの。私は、ここに泊まつてもらう予定だった。私はアトリエに行けばいいんだから、それが普通でしょう。今日のMはおかしい。汚く見え

る」

「汚いものを見たと思うから祐子はそう言うのよ。確かに私たちは、祐子の目に汚い行為を見せた。性の高まりはなかったけれど、私が官能を望んだことも事実よ。陶芸屋は私の部屋に泊まるわ」

「私は何をしたらいいの」

祐子の悲痛な声がMの耳を打った。Mは厳しい眼差しで祐子を見上げる。

「ここに、大久保さんを呼ぶといいわ」

自分の耳にさえ冷たく響く言葉がMの口に上った。祐子がかん高い声を上げ、ソファーに泣き伏す。代わりにMが立ち上がった。いつまでも子供でいられるわけではない。まだ七つに過ぎない進太が、大人の世界の入口に立たされようとしているのだ。

Mは厳しい表情を崩さず、陶芸屋に介助の手を差し伸べた。無言で立ち上がった陶芸屋がMと一緒に泣き崩れている祐子を見下ろす。二人の大人の目から、また涙がこぼれた。いくら待っても、もう先ほど耳の底で聞こえた、修太と光男、そして祐子の三人の子供の笑い声は戻って来ない。

Mと陶芸屋は午後になってから睦月のアパートに向かった。

七月最後の日曜日の昼下がりも相変わらず暑い。かろうじて日陰になった一階の駐車場で、二人はオープンにしたままのMG・Fに乗り込む。照りつける日射しを遮る術はないが、熱のこもった締め切った車よりはましだった。睦月のアパートまでは車で三分とかからない。カー・エアコンが効き始める前に着いてしまう。だが、右片麻痺の陶芸屋と歩けば、ゆうに二十分はかかるに違ひなかった。

「この時刻にならないと、睦月は起きないので。暑いけれど我慢して」

助手席に座った陶芸屋に弁解するように言ってから、Mはアクセルを踏み込む。水道山から吹き下ろしてくる微かな風を切って、真っ赤なMG・Fが発進した。家並みの連なる山手通りが暑熱の中で揺らめいて流れ去る。

コンクリート平屋造りのアパートの前にしゃがみ込んだ、進太の小さな姿が見えた。ドアの上から張り出した庇が路上に小さな影を落としている。今年の夏の進太お気に入りの場所だった。進太の姿を認めたMの顔に微笑みが浮かぶが、決して涼しくはない路上の日陰で、昼になってから起き出してくる母を待つ進太の気持ちを考えると悲しい。睦月にMの部屋への出入りを差し止められた進太が、虐待のやんだ今でも約束を守っているのが哀れでならなかった。

小さくクラクションを鳴らすと、はじかれたように進太が立ち上がる。いつものように手を振って喜ぶかと思うと身を固くし、近付いていくMG・Fをじっと見つめてから背中を見せてしまった。そのまま慌てたように玄関のドアを開け、中に入ってしまう。

「俺は嫌われたようだ」

車を止めた瞬間、助手席から陶芸屋の落胆した声が響いた。無頓着な陶芸屋にしては鋭すぎるほどの反応だった。血の繋がりはやはり凄いとMは思い、舌を巻く。しかし、なに食わぬ風を装って横を向き、陶芸屋の顔を見た。肉親に対する強固な信頼と不安が交差した不思議な表情をしている。Mの知らない顔だった。

「気を落とすことはないわ。照れたのかも知れない」

Mが声を掛けると、即座に陶芸屋の顔付きが明るくなる。何の理由も知らない。ただ、血を巡る信頼が不安に勝つただけに見えた。陶芸屋の頭の中で勝手な思惑が一人歩きを始

めようとしている。理不尽な家族がまた、新しく生まれる予感がした。Mの胸の底に悲しみが込み上げてくる。それにしても暑い。

Mは車を降りて玄関のドアに向かう。助手席から降りようとして苦闘する陶芸屋の気配がMの背中を打つ。構わず手を伸ばしてドアのノブを回した。ノブはカチッと音がしたきり回ろうとしない。何度ノブを回しても同じだった。進太が錠を下ろしたのだ。ようやくMの背後に立った陶芸屋が、事情を察して身を固くしたのが分かる。

「進太、Mよ。ドアを開けなさい」

一枚の鉄のドアを挟んで、すぐ前に進太の居る気配がする。だが答えようともしない。仕方なくMは、この家を訪れて一度も使ったことがないインターホンを押した。三回押すと、インターホンを通して睦月の声で返事があった。まるで広大な邸宅を訪ねていったような気分になる。

「こんにちわ睦月、Mよ。修太のお父さんをお連れしたわ」

Mが応えると同時にインターホンが切られ、短い廊下を走ってくる足音がドア越しに聞こえた。

「進太、何で鍵なんかかけるのよ」

睦月の怒声と玄関から立ち去る小さな足音が聞こえた後、ドアが開かれた。煉瓦色のジーンズにピンクのTシャツを着た睦月の小柄な身体が、二人を押し戻すようにドアの外まで出て来た。

「まあ、お義父さま。暑い中を、遠い所からよく来てくださいました。今まで進太もここで待っていたのですよ。あの子は照れ性だから、お義父さまにお会いするのが急に恥ずかしくなったんですね。閉め出したりして本当に済みませんでした」

睦月はMの横に並んだ陶芸屋に深々と頭を下げ、使い慣れぬ言葉を機関銃のように連射した。歯の浮くような台詞にMが辟易とすると、急に矛先がMに向かってくる。

「Mは気が利かないわね。こんなちっぽけな車では進太を乗せられないじゃない。もう荷物も用意してあるんだから、祐子から大きな車を借りてきてよ。進太はすぐにでも鉱山の町に発てるわ」

「とにかく俺を進太に会わせて欲しい。まだ会わせてもらったことがないんだから、早く顔が見たい。睦月さん頼みますよ」

睦月の勝手すぎる態度にたまりかねた陶芸屋が、満身の思いを込めて頼んだ。

「あら、お義父さまは進太と会うのは初めてでしたか。でも、これからはずっと会ってい

られるのだから急ぐこともないわ。M、早く車を借りてきてよ」

「睦月こそ急ぐことはない。私も陶芸屋と一緒に進太と会うわ。とにかく中に入れてちょうだい」

Mと陶芸屋に言い寄られた睦月が、珍しく折れた。黙ってドアを開け、二人を先に中に通す。進太を引き取ってもらう手前を考えたのかも知れない。目の前にメルボルンがぶら下がっているのだ。明日は稽古最後の一般公演の日だった。Mは陶芸屋に肩を貸して、狭く短い廊下をリビングに向かう。蒸し暑さで滲み出た汗が寄り添った二人の肌をぬめぬめと濡らした。

進太はリビングの食卓でうつむいて座っていた。入ってきたMに縋るような視線を浴びせ、またうなじを下げた。陶芸屋には一瞥もくれない。Mはリビングの奥の二人掛けの椅子に陶芸屋を座らせ、その横に立った。

「さあ進太。お祖父ちゃんが迎えに来てくれたわ。早くご挨拶しなさい。きっとかわいがってくれるわ」

睦月が言って、座っている進太の頭を小突いて立ち上がらせた。両手で背中を突き、陶芸屋の前に押し出す。ふてくされた態度で従った進太の代わりに、睦月が食卓に座った。

「進太、照れていなくて、お願ひしますって、ちゃんと言うのよ」

実の息子の気持ちも推し量れなくなった睦月が、妙に機嫌のいい声を出す。声に促され、進太が初めて大きな目で陶芸屋を見つめた。憎しみのこもった冷たい視線だった。

「ねえ、お義父さま。大きな目から口元にかけては、死んだ修太と生き写しでしょう。私はいつも、見ていてたまらなくなったり。男らしい気持ちもそっくりなのよ」

睦月がしんみりした声で陶芸屋に話し掛けた。睦月はいつも、心の赴くままに言葉を紡ぎ出す。じっと、まばたきもせず進太を見つめていた陶芸屋の耳を、睦月の言葉が打った。二メートル前に立つ少年は確かに、幼い修太が甦ったと見まがうほど生き写しだ。陶芸屋の喉元に熱いものが込み上げてくる。次々に喉に込み上げてくる感情の波が目に涙を溢れさせる。陶芸屋の口を声にならぬ叫びが突いた。不自由な身体が嘘のように、椅子から腰が上がり、立ち上がった。

「修太。進太」

息子と孫の名前を同時に口にして、陶芸屋は自由になる左手を大きく横に開いた。

「進太、俺と鉱山の町に行こう。お父さんの暮らした土地で一緒に暮らそう」

喘ぐように陶芸屋は言って、硬直した右足を引きずり、修太の思い出と合体した進太の

前に歩み寄る。

Mの目の前で進太の震える足が一步後退した。足の震えは全身に伝わり、身体全体が泣き出したように震えた。進太のすぐ前に、左手を突き出し、足を引きずった陶芸屋が迫る。

「死ね、鉱山の町なんかに誰が行く。お前なんか死んでしまえ」

憎悪に満ちた叫びを上げ、進太が頭から陶芸屋にぶつかっていった。渾身の頭突きを受けた陶芸屋の痩せた身体が後ろ向きに吹っ飛ぶ。今まで座っていた椅子に後頭部が当たり、鈍い音が響いた。

進太は無様に床に倒れた陶芸屋を、肩で息をしながら見下ろす。意外なくらい心は平静だった。床を汚した赤い血が鮮明に目に映った。慌てて陶芸屋に駆け寄ったMが何事か叫び、硬直した身体を抱き起こしている。視線を巡らして食卓の母を見る。睦月はぼう然とMと陶芸屋を見ている。大きく見開いた目に、たちまち失望の色が広がっていくのが分かった。部屋の中央に立ちつくす自分だけが、まるで別世界にいるような気がした。

「誰も僕のことは構ってくれない」

ふてくされた少年の声が進太の頭の中で響いた。これまで聞いたことのない低い声だが、自分の声に相違なかった。

「睦月、陶芸屋は頭を打ったわ。意識はあるけど、念のため、救急車を呼んで」

進太の耳に初めて他人の声が聞こえた。冷静なMの声だ。睦月の応える声がして救急車を要請する声が続いた。電話をかけ終えた睦月が進太の横に立った。進太は母の顔を見上げた。目と目が合う。睦月の目に特に感情はない。きっと僕の目もママと同じだと進太は思った。思った瞬間、口元に笑いが浮かんだ。睦月の右手が挙がり、力任せに進太の頬を打った。皮膚を打つ高い音が部屋を満たす。

「進太は馬鹿よ。黙って鉱山の町に行けばいいんだ」

低く押し殺した声が頬の痛みを耐える進太の耳を打った。

「ウルセイ、みんな、みんな、死んでしまえ」

大声で叫びながら進太が外に駆け出していく。妙に乾燥したボーカル・ソプラノの余韻がMの耳に残った。遠くから救急車のサイレンが近付いてくる。途端に蒸し暑さが甦り、全身から汗が噴き出してくる。

明日は祭りの初日だった。

進太は山根川の川原づたいに、山地に向けて歩いていた。遮る物の何もない川原を渡る

風は心地よかったです。日光の直射が散々に痛め付けた。無帽の頭がじりじりと灼け、全身が汗にまみれた。出つくした汗が塩に変わると無性に喉が渴いた。全身が乾ききり、素肌が焦げ始めるような気がした。このまま炎熱の中に倒れ、死んでしまってもいいとさえ思う。どうせ僕は邪魔者なのだとふてくされると、沸き上がる焦燥が日射しにも増して進太の心を熱く灼いた。一時的に高まった破滅への衝動は、猛暑の中では長続きしない。工学部の先の橋下の日陰まで出たところで、ついに我慢ができず、進太は裸になって川に飛び込んでしまった。

山地の沢水を集めた山根川の清流は、進太の裸身を優しく包み込んだ。冷たい水が火照りきった肌を一瞬に冷やす。素肌全体が歓喜の声を上げた。喜びが全身に伝わる。このまま死んでもいいと思えるほどの心地よさで、進太は流水と一体になり親和した。脳裏に渦巻いていた焦燥も、またたく間に吹き飛んでいった。だが、平安はつかの間に過ぎない。進太の冷ややかな意識の中で、熱い怒りが膨らんでいった。激情を育むには、人は快適な環境を必要とするらしい。快適な水浴びで自足した進太の心に芽吹いたのは、パステルカラーの殺意だった。

どれほど関心をねだっても、これまでとは手の裏を返すように進太を無視する母。それでも進太は母の側に居たかった。つい一か月前までは、癌ができるほど折檻されても、食事を与えられなくても、進太は母の存在を全身で感じ取ることができた。素っ裸にして鞭打つ母も、進太と同じ地平にいたのだ。進太に絶食を命じたときは母も食事をしなかった。母子二人だけの默契が、毎日の虐待を用意していたのだ。それは母か進太の自立で終わるはずだった。どちらかの自立が家庭の自立につながる。しかし、睦月は母を捨て、女であることを選んだ。明後日のメルボルン行きを前にして、進太を鉱山の町に売ろうとしたのだ。その母を誘い、進太を捨てさせた男が演出家の沢田正二だ。沢田は性を武器に、母を一人の女に変え、進太から奪った。そして嫌がる進太を鉱山の町に引き取りに来た祖父。あの粘り着くように進太に迫る理不尽な態度は決して許すことはできない。母から進太を引き離そうとする第一級の敵だ。その敵に会心の一撃をくれたとき、Mは真っ先に敵を救いに駆け寄ったのだ。そして母は、母は足手まといになった進太を振り払うように打った。あの時進太は完全な孤独を実感した。孤立無援の中で何をしたらよいか分からず、一散に逃げ出してきたのだ。やはり死のうと進太は思う。世界中に僕のいられる場所はないと思い定めた。死ねば母と一緒に世界に戻れそうな、甘い予感が進太を彼岸に誘う。

進太は冷ややかな流れの中を、一番の深みを目指して泳いだ。橋の中央の濃い緑色に見

える淵まで泳ぎ、目を固くつぶって身体を硬直させた。見る間に頭が下がり、裸身が流れに引き込まれた。目の前が真っ暗になり、息苦しさが募る。水中で身体が不安定に浮遊する。吐く息がなくなり、じっと息を詰めたが空しく、苦しさに負けて小さく呼吸した。途端に鼻と口から水が侵入し、苦しさに咽せた。目の前が真っ赤になり、まぶしい光が急に輝きだした。橋から五メートル下流に進太の頭がぽっかりと浮かび上がった。進太は上流に泳ぎ戻り、二度、三度と自殺を試みたがすべて失敗した。最後は、さすがに全身が冷え切り、唇が震えているのが分かった。突然、このままでは溺れてしまいそうな恐怖に駆られた。自殺はしたいが溺れるのはいやだった。泡のような殺意は急速に萎んでいった。

疲れ切った進太はコンクリートで固めた護岸に上がり、うつ伏せに寝ころぶ。熱く灼けたコンクリートが冷え切った肌に気持ちよい。背から尻を炙る斜めになった日射しも心地よかった。仰向けになって空を見上げると、山地の方角に巨大な入道雲が立ち上がっていった。進太も立ち上がり、皮を被ったペニスを川面に向けてのびのびと放尿した。飛び散る尿を浴びたコンクリートの裂け目の水たまりで、赤黒い物が動いた。屈み込んでのぞくと大きな鉄を上げたザリガニが進太を威嚇している。無造作に手を伸ばし、進太はザリガニを掴もうとした。湯のように暖まった溜まり水の中で、ザリガニは素早く進太の指先を挟んだ。鋭い痛みが指から脳に走る。今度は慎重にザリガニの背を摘んだ。手に持ったザリガニを目の前にかざして見ると、相変わらず大きな鉄を振り立てて進太を威嚇している。細長い足で必死にもがき、荒々しく尾ヒレを振り立てている。なんとも醜悪な姿だった。この醜いちっぽけな生き物が鋭い痛みを与えたのだと思うと、怒りが込み上ってきた。ザラザラとした固い殻を摘んだ親指と人差し指に力を込める。ピシッと小さな音が響き、指先の抵抗が消えた。潰れたザリガニの胴から、ぬるっとした粘液が足元に滴り落ちた。驚愕と快感がない交ぜになり、真っ赤な感情となって膨れ上がる。進太は右手を高々と振り上げた。そのまま力いっぱい、ザリガニをコンクリートの地面に叩き付ける。生物が碎け散る何とも言えない物音が響き、裸の足や股間にザリガニの体液や内臓の破片が跳ね返ってきた。ねつとりとした感触を素肌に受け、進太の背筋が一瞬に凍り付く。続いてえもいわれぬ残酷な快感が吹き出し、尻の穴の周りがむず痒くなった。外向きの殺意は肛門を中心になされた。ペニスの先にへばりついた赤黒い液体を指に取り、鼻先に持っていくと腐った魚のにおいがした。足元のコンクリートの地面にザリガニの残骸がごみのように転がっていた。大きな鉄で指先を挟まれた事実が、まるで嘘のようだ。ザリガニの死骸を無表情に見て進太は立ち上がった。死骸になってしまってはやり、醜悪な姿は一向に変わらない。た

だ、死を契機にして一切の関係が絶たれたことだけが唯一の変化だった。

進太は火照ってしまった裸身を再び川面に浮かべた。流れに逆らってゆっくり泳ぎ、脱いだ服を置いた橋下に向かう。冷えていく意識の底にザリガニになった沢田と祖父が見える。進太の口元が歪み、心地よさそうな笑いに変わる。Mに聞いたことがある山地のピアニストの家に行こうと思った。ピアニストの家は歯医者だ。歯医者には毒薬がある。毒薬があれば簡単に大人を殺すことができる。とにかく武器を手に入れることだと進太は思った。そうすればもう、何でも進太の思いのままになるような気がした。冷たい流れの中で、進太はまた楽しそうに笑う。幼すぎる殺意は甘い味がした。ようやく夕暮れがやってきた川面を涼しい風が渡っていく。不意に全身の寒さを感じ、進太は身体を震わせて身近な岸に上がった。

「こらっ、泳いでいるのは誰だ。山根川は遊泳禁止だ。どこの学校の生徒だ。先生に連絡するぞ」

はるか頭の上から怒声を浴びせられ、進太はぎょっとして空を見上げた。

頭上四メートルの橋の上で、自転車に乗った制服警官が欄干から身を乗り出し、進太を睨み付けている。夕焼けで赤くなった空をバックに、警官の姿は恐ろしいほど大きく見えた。進太は毒薬のことを見透かされた思いがした。恐怖が全身を走り抜ける。脱ぎ捨てた服を搜すのも忘れ、進太は素っ裸のまま芦原の中に逃げ込んでいった。

ヘッドライトの光を浴びて雨上がりの路上が輝いている。オープンにしたMG・Fの車内に、山根川を吹き下ろす涼しい風が巻き込んできた。雨のにおいがチハルの鼻をくすぐる。森林の香りと一体になった、雨の山地特有のにおいだ。久方ぶりに感じた懐かしさが、アクセルを踏むチハルの右足に力を与える。鋭い加速が小気味よい。車は成田空港で借りたレンタカーだ。チハルは二年振りの帰省にフェラーリを選びたかったがレンタルなどない。仕方なく空港の前のローバーの店で強引にMG・Fを借りた。借りてしまってから不意にMのことを思い出し、暗然とした気持ちになってしまった。おまけに車体の色も真紅だ。だが天候には恵まれ続けた。雷雨の多いこの地方に入ってからも、不思議と雨上がりの道ばかり走った。まるで遠ざかる雷雲を追い掛けてきたみたいだ。Mの悪運の強さに思いを馳せ、思わずたわいない笑みが浮かぶ。別に会いたくはないが、Mにはもう六年会っていない。チハルがコスモス・アメリカに赴任した年に会ったのが最後だ。その後の話も、時折祐子から国際電話で聞かされたが特に关心はなかった。アメリカの仕事は忙しい。今

のチハルはコスモス・アメリカの副支配人だった。お陰で、これまで欠かしたことがない夏の帰省も、二年振りになってしまっていた。

MG・Fは山地にただ一つあるコンビニエンス・ストアの前に差し掛かった。大きな水溜まりのできた広い駐車場に、車は一台もない。徐行して店内をのぞき込んだが、客もない。これで商売になるのかとチハルは思い、益々過疎になっていくらしい山地の将来を危ぶんだ。時刻はまだ午後八時を過ぎたばかりだ。

「私には関係ない」

大きな声でつぶやくと、両側から迫った山塊の上に稻妻が光った。続けて間延びした雷鳴が轟く。チハルは正面の闇の先に目を戻し、再びアクセルを踏み込もうとした。突然、左手の黒い林の中から白い影が飛び出す。チハルは慌ててブレーキを踏み込んだ。四本のタイヤがけたたましい音を響かせ、MG・Fは道路の中央で急停止した。ヘッドライトの光を浴びて、小さな裸身が路上に突っ立っている。雨上がりの涼しい山間で震える裸身は、あきれるほど幼く見えた。緊張しきったチハルは拍子抜けし、続けて笑いが込み上げてきた。

「坊や、山地に露天風呂でもできたのかい」

運転席から身を乗り出し、チハルがぶっきらぼうな声で言った。

「何だ、Mじゃないのか。面白くもない」

素っ裸の子供がふてくされた声で言って首をすくめた。チハルの表情がまた緊張する。

「えっ、もう一度言ってみな。Mってのは、これと同じ、赤いMG・Fに乗っている女かい」

黙ってうなずく裸身をチハルが手招きした。

「面白いね、素っ裸なのがいいよ。さすがにMの友達の坊やだ。参ったね。さあ、車に乗りな。乗せていくよ。どこへ行くんだい」

親しげに話し掛けたチハルに誘われ、震える裸身が近寄ってくる。

「俺は進太。歯医者へ行きたい」

ひときわ高いボーイ・ソプラノで答え、進太は素早く助手席に座った。雨で濡れた髪から肩にかけて水が滴っている。全身に鳥肌が立ち、寒さに歯を鳴らしていた。チハルはヒーターを入れ、着ていた麻の白いジャケットを脱いで進太に手渡す。

「いいよ。汚れてしまうよ。僕は裸でいい」

ジャケットを押し返す進太の口調が、やっと年相応の話し振りに感じられた。チハルの

口元にまた笑みが浮かぶ。

「黙って着なさい。素っ裸では私に失礼だろう。いくら小さくとも、女の前でチンチン丸出しでは先が思いやられる。まあ、進太の友達のMも、素っ裸で股間丸出しのスタイルが好きだったが、真似しない方がいいよ。私はチハル。祐子の友達だよ。祐子を知っているだろう」

チハルの言葉で進太の頬がポッと赤く染まった。押し返したジャケットを手元に引き寄せ、股間から胸を覆った。下を向いたまま照れ隠しのように早口で答える。

「祐子は良く知ってるよ。チハルさんが祐子の友達なら、Mとも友達だね」

「さんは要らない。チハルでいいよ。それから、Mは友達ではない。さあ家に送ろう」

チハルの厳しい声に進太が黙る。チハルは無造作に後ろを振り向き、MG・Fをバックさせてコンビニエンス・ストアの駐車場に入った。

「だめだよ。僕は家に帰れない。山地の歯医者に行くんだ。お願ひ、連れていってよ。お願ひだよ」

進太の泣き声が深閑とした駐車場に響いた。あまりの激情に驚き、チハルは進太の横顔をのぞき込んだ。

「山地の歯医者って、ピアニストの実家の蔵屋敷のことかい」

「そうだよ。死んだピアニストのお父さんさ。僕のお父さんも死んだけど、ピアニストと一緒に住んでいたんだ。だから、きっと歯医者は僕を泊めてくれる」

進太の言葉は遠い昔の記憶をチハルの胸に甦らせた。思い出したくはない記憶だが、整理できないまま捨て置いていた記憶が、堰を切ってチハルの胸中に溢れる。

「私は、進太の両親もきっと知っている。誰なんだい」

「修太に睦月」

進太がぽつりと答えた。チハルの脳裏に一人で立ちつくす、修太の青ざめた姿が浮かび上がる。思えばいつも、修太は深刻で苦しそうな表情をして、チハルの前に現れた。目の前にいる進太の目から口元にかけては、まるで修太と瓜二つだ。チハルは大きくうなずき、山地に向けて車を発進させた。急に進太の表情が輝き出す。

チハルはいわくありそうな進太をドーム館に泊めることに決めた。蔵屋敷に行っても歯科医はいない。祐子から聞いた話では、歯科医の妻が昨年交通事故で死に、歯科医は市に移り住んでしまったはずだった。

様々な人たちの思いが籠もる山地の谷に、新世代の進太と泊まるのも一興だとチハルは

思った。

ついに毒薬は手に入らなかった。

進太は浅い微睡みの中で歯を食いしばり、寝返りを打った。天井の巨大なガラスのドームから差し込む夏の光が一瞬目にまぶしい。朝の九時近くになっているに違ひなかった。だが、昨日までのように暑苦しさを感じることもない。エアコンの風が素肌を優しく撫で回していく。エアコンのノイズに混じって、微かに音楽が聞こえる。軽やかな小太鼓の響きに乗ってオーボエが心地よく歌っている。耳を澄ますと同じメロディーが何度も繰り返されていた。音楽は壁一つ離れた隣の部屋から聞こえてくる。チハルがCDをかけたのだと、進太はぼんやりした頭で思う。三拍子のリズムは進太の微睡みの中に入り込み、徐々にクレッシェンドしながら気分を高揚させていく。ラヴェル作曲の管弦楽曲「ボレロ」が進太をもう一度夢に誘った。「ボレロ」の調べに乗って真っ青な空を白い天馬が舞っている。高く低く天馬は舞い、大空を駆けて進太を宙に誘う。だが進太は空に舞い上がることができず、天馬の背に乗ることもできない。たまらない焦りが込み上げてきて、進太は慌てた。

「サクタロウ待ってよ。ぼくを乗せてよ」

大声で叫んだ瞬間、進太は完全に目覚めた。足で綿毛布を蹴ってベッドの上に起き上がる。高まる「ボレロ」の調べが、全聴覚を満たした。そっと目をつむると、キリンのサクタロウの背に乗って疾走する自分の姿がありありと見えた。夢で見た天馬よりスリリングでさっそうとした姿だ。進太はベッドの上でリズムに合わせて全身を揺すった。足を投げ出し、まるで手綱を取るように両手を胸の前に突き出し「ボレロ」の調べと一体になる。ひときわ高くシンバルが鳴り響き、管と弦が吼えた。曲のエンディングと共に進太は立ち上がり、真っ直ぐ背を伸ばし大きく伸びをした。今日は八月一日、八木節祭りの初日だ。母の睦月が芝居に出演する日だ。

進太はサクタロウに乗って、煉瓦蔵から母を連れ去る自分の姿を思い描いた。あの巨大なサクタロウと一緒になら何だってできる気がする。

「よーし、やってやるぞ」

大声で言ってベッドから飛び降りた。途端にドアが開けられ、驚いた顔でチハルが部屋に入ってくる。

「どうしたの進太、大声が聞こえたよ。祐子のベッドで怖い夢でも見たのかい。それにしつては元気そうだね。小さいくせに、今にも立ち上がりそうなオチンチンだよ」

面白そうに進太を構う言葉を無視し、進太は床に正座して喜々とチハルに頭を下げる。

「お願ひがあります。今日の夕方、僕を市の動物園へ連れていって下さい。頼みます」

素っ裸のまま神妙な顔で頭を下げる進太を見下ろし、チハルがまた面食らった顔になる。

「市は今日から祭りでしょう。何でわざわざ動物園なんかに行くの」

「僕はサクタロウに乗るんだ。サクタロウに乗って、ママをここに連れてくる。邪魔をする奴はみんな、蹴散らしてやる」

最後の言葉に鋭い殺気が籠もった。チハルの背筋を冷たいものが掠める。同時に面白いこと、この上なかった。最近にない痛快な気分になる。昨夜、進太の語るたどたどしい話を聞いて、ある程度の事情も理解できた。だが母の睦月は、進太が邪魔者を蹴散らしてまで連れ戻す価値があるとは思えない。六年前に山地の奥で見ているはずの睦月の顔を、どうしてもチハルは思い出せない。それなりの人物としか思えなかった。でも、母を慕う進太の気持ちはチハルにも分からなくはない。都会の兄の元に行つたチハルの母も三年前に死んだ。アメリカにいたチハルは死に顔も見ていない。急いで帰ってきたときはもう骨になっていたのだ。

「サクタロウって誰さ」

浮かび上がってきた母の面影を振り払うように、チハルが尋ねた。

「キリンだよ。背が四メートルもあるお父さんキリン。僕の友達。きっと背中に乗せてくれるよ」

喜々とした声で進太が答えた。即座にチハルが大声で笑い転げる。

「ハハハハハハ、最高だよ。進太は最高に面白い。いいよ、一緒に動物園に行ってやる。私もキリンに乗った進太が見たい。最高だよ。参ったね。本当に参った。ハッハハハ」

いつまでもチハルの笑いは続いた。八木節祭りなどより、よっぽど楽しいイベントになると思う。もしかしたら進太は、本当にキリンに乗れるかも知れないと思った。チハルの笑いが消え、真剣な表情が戻る。小さな夢に立ち会う喜びが、久しぶりにチハルの下半身を熱くさせた。

Mは午前十一時に織姫通りを車で往復した。これが祭りの最終チェックになる。正午からは織姫通りが車両通行止めになり、三日間の八木節祭りがスタートするのだ。相変わら

ず空は良く晴れ、空気は焼け付くように熱い。コンクリートの電柱にとまつたセミが頭上から暑苦しい鳴き声を落としている。通行止めを一時間後に控え、織姫通りを通行する車両は少ない。通りの両端の歩道から路上に、巨大な笹飾りが交互に垂れ下がっている。赤や黄、青、金や銀の原色を散りばめた吹き流しやくす玉の重みで、太い竹がたわわに曲がっている。オープンにしたMG・Fから手を伸ばせば七夕飾りを掴めそうだ。通りの左右に軒を連ねた露店では、様々な格好をした若い露店商が商売の支度に余念がない。各町会ごとに組まれた八木節の櫓は、道路の中央に押し出される時刻を今や遅しと待っている。日が落ちれば、この櫓を囲んで幾重にも八木節踊りの輪ができる。すでに街は祭り一色に染まっていた。

Mは織姫通りの準備に遗漏がないことを確かめてから、煉瓦蔵の前に車を止めた。閉められた鉄扉の間から広場の舞台が見える。舞台は青いビニールシートで覆われている。連日の雷雨に備え、公演が始まらなければセットは姿を現さない。芝居の幕は午後七時三十分に上がる。思わず山地の方角を見上げると、もうすでに巨大な積乱雲が立ち上がっていた。この分では早い夕立が予想される。宵のうちの降り上がりを、Mは祭りの成功のために願った。

スニーカーの中に汗が溜まってしまうかと思えるほど、剥き出しの足を汗が流れる。Mは車をスタートさせ、天満宮の前で左折して山手通りに入る。MG・Fをアパートに駐車し、自転車に乗り換えるつもりだ。ついでにシャワーを浴び、Tシャツも着替えたかった。しかし何よりも、昨夜から食事もしようとしている陶芸屋のことが気になる。昨日、陶芸屋は病院で後頭部の手当をした後、睦月のアパートで進太の帰りを待った。出血に驚いた割には、幸い傷は軽傷だった。進太が帰らぬまま夜中になり、疲れ果ててMの部屋に戻ってきた。その後も陶芸屋は、まんじりともしないで睦月の電話を待っていた様子だった。朝から憔悴していた顔が目に浮かぶ。

Mが部屋のドアを開けると、玄関の前に陶芸屋が立ちつくしている。真っ赤に充血した大きな目で力無くMを見つめた。

「進太が来るかと思って、じっとしていられないんだ。なあM。進太はどこで夜明かしあんだろう。俺は心配でならない。夏なのが唯一の救いだ。これが冬だったら、俺は一晩中進太を見付けて歩くよ」

進太を見付けて歩かないMを、なじるような声で陶芸屋が愚痴をこぼした。部屋の窓は開け放してあるが、クーラーは入れていない。蒸し暑さがMの気力を奪う。Mは返事も返

さぬまま部屋に上がり、エアコンのスイッチを入れて窓を閉めた。その場で素っ裸になりバスルームに駆け込む。冷たい水を頭から浴びると、やっと人心地がついた。全身から滴をしたたらせたままキッチンに行き、冷蔵庫を開ける。朝用意して置いたソーメンを取り出し、二人分テーブルに並べた。

「さあ、陶芸屋も食べなければだめよ。夜になって芝居の公演が始まれば、進太は煉瓦蔵に来るわ。絶対に来る。それまでに体力を付けておかないと、また進太に逃げられるわ。後七時間しかない。さあ早く食べて、横になって昼寝しなさい」

Mが明るい声で呼び掛けると、陶芸屋が目を輝かせて食卓に着いた。

「そうか、今夜は睦月の芝居があった。そうだ、進太は必ず来る。M、ありがとう。やっと一安心できた。よーし、俺も食うぞ」

陶芸屋の元気な声が部屋に響いた。進太が今夜、煉瓦蔵に現れることだけは確実だと誰もが思う。ただし、その後の推移は誰にも予測はできない。だが、陶芸屋の希望は大きく羽ばたいていった。Mは味気なくのびてしまつたソーメンを無理に喉に流し込む。陶芸屋はうまそうにソーメンを啜り、だし汁のお代わりまでした。憔悴しきっていた顔が嘘のようだ。食事が終われば、いびきをかいて眠るかも知れない。再び暑熱の街に出て行かねばならないMは、羨望のこもった目で陶芸屋を見つめた。

午後六時の山地の空は真っ黒だった。闇の中を鋭く稻妻が走り、雷鳴が山肌を震わせた。大粒の雨が、まるでバケツで水をぶちまけたように空から真っ直ぐに降る。チハルは幌をかけたMG・Fを土砂降りの雨の中に発進させた。助手席には緊張した顔で進太が座っている。進太はチハルの黒いTシャツを着ているが、大きすぎてワンピースのようだ。下半身は裸で、足に赤いサンダルを突っ掛けている。チハルが黒いショーツを穿くよう勧めたが、進太は頬を赤くして断ってしまった。

「ハッハハハ、恥ずかしがることはない。Tシャツは大きすぎるけど、私のショーツは小振りだから、小さな進太にぴったりだよ。スッポンポンでいるより、よっぽどましさ」

降りしきる雨を見つめる進太の耳に、チハルの笑い声が甦る。邪氣のない飾らない態度は好きだが、どうにも無神経な言動が進太の気に障る。Mと違ってチハルはデリカシーがないと、また赤く染まった顔をチハルに向け、進太は無言の抗議をした。

「女にはもてそうだけど、進太は男で苦労するよ」

進太の視線を感じたのか、チハルが前を向いたままボツンと言つた。激しい雷鳴が後に

続く言葉をかき消す。青白い閃光が狭い車内を連続して貫いた。黒い幌と窓ガラスの合わせ目から染み込んだ雨水が、幾筋もガラスを流れ去る。雨水で歪んだ真っ黒な風景の中に、沢田と陶芸屋の顔が浮かび上がった。二人ともザリガニのように醜い表情をしている。進太はチハルの言葉を幼いなりに実感した。再び閃光が走ると沢田と陶芸屋の顔が消え去り、緊張にこわばった自分の顔が映った。やはり醜く歪み、目から涙のように雨水が流れている顔だった。

「水道山を越えて行くよ。いくら土砂降りでも、祭り期間の織姫通りは通行止めだろう。でも、参ったなあ。ほとんど前が見えない。雷雲に追い掛けられているみたいだ。ずっと土砂降りだぜ」

うんざりした声でチハルが言って、鋭く右折した。MG・Fのテールが大きく左に流れれる。チハルが素早くハンドルにカウンターを当てて車体を立て直し、美術館に向かう急な坂道に向かった。ダッシュボードの白い時計は午後七時に近付いている。思いのほか時間がかかったが、水道山を越えればすぐ山手通りに出る。ここから動物園までは直距離なら二キロメートルもない。それにしても凄まじい降りだ。市街は今、雷雨のピークを迎えている。

睦月は煉瓦蔵の広場を激しく叩く鋭い雨脚を見ていた。巨大なクスノキの枝葉が風雨に身悶えしている。絶え間なく稲妻が走り、雷鳴が轟く。大粒の雨はコンクリートの地面で跳ね上がり飛び散る。風向きによって冷たい飛沫が足元を濡らした。もうじき午後七時になる。開演まで三十分しかない。早く雷雲が通り過ぎ、雨が上がるなどを睦月は祈った。

細く開けた煉瓦蔵の扉を目掛け、強まった風雨が襲い掛かかる。肌寒くなるような風に全身を包まれ、睦月の肩が震えた。きれいに結い上げた日本髪の髪も風に震えた。睦月は緋色の長襦袢を着て、細紐で前を結んでいる。まるで浮世絵から抜け出してきた遊女のように、あえかな姿だ。だが、せっかくの衣装も第一幕の見せ場で無惨に脱がされてしまう。薄紫の湯文字一つに剥かれた裸身を、厳しく後ろ手に緊縛されることになる。最終幕ではその湯文字すら許されない。背面合掌縛りに緊縛された手に赤い蠟燭を握らされ、素っ裸で折檻部屋に曳かれていくのだ。その時はきれいに結い上げた高島田も千々に乱れ、凄惨な姿になっているはずだ。ステンレス・ファイバーの繩と、ことさらに裸身を白く彩る全身に塗ったドーランだけが最終幕の睦月の衣装だった。

「ずいぶん緊張しているね。幕開きを待つ役者ほど美しい者はこの世にいない。睦月、す

てきだよ」

背中からバスが響き、睦月の背筋を熱いものが駆け下りる。黙っていると背後から優しく抱かれた。

「ほら、乳首がこんなに固くなっている」

長襦袢の胸元に入り込んだ温かな手が尖った乳首を摘んだ。沢田のささやきが睦月の耳元をなぶる。

「先生」

万感の思いを込めて睦月が喘いだ。沢田の手が乳房から放れ、長襦袢の裾を割り開く。優しい手の感触が睦月の股間に広がる。

「大丈夫、芝居はうまくいく。明日から睦月はスターだ。この続きを打ち上げの後にしよう」

沢田の力強い声と共に、股間から手が離れた。睦月の下半身が熱く燃え上がる。将来のすべてが今夜の芝居にかかっていると思い定めた。心なしか、ぼんやりと目に映る雨脚が小降りになったような気がする。しばらくすると雷鳴が遠のき、風も弱くなってきた。睦月は一切を忘れ、ひたすら開演の時刻を待った。進太のことなど、まるで胸中にはない。

チハルと進太を乗せたMG・Fは動物園の正門を迂回し、水道山の中腹にある裏門を目指した。動物園は山の形を生かして飼育舎がレイアウトされている。同じ中腹にあるキリン舎は裏門から三百メートルと離れていた。雨に煙る闇の中に金網を張った門扉がそびえている。左右に開く観音開きの巨大な門扉だ。二つの鉄パイプをチェーンで巻いて南京錠が下ろしてあった。

「だめだ、僕がキリン舎に入れても、これではサクタロウと一緒に出られないよ。正門は鉄扉だし、どうにもならない」

ヘッドライトに照らし出された高さ三メートル、幅六メートルの金網の門扉を見上げ、進太が泣き声を上げた。

「へえ、弱虫め。見ただけで諦めるのかい」

チハルが馬鹿にした声で言ってMG・Fを路肩に止め、エンジンを切った。幌を打つ雨音と雷鳴だけが車中を満たす。

「だって僕は、夜の裏門に来たのは初めてなんだ。門扉がチェーンで縛られているなんて知らなかった。もう、だめだよ」

進太の絶望の声が響き渡った。チハルの口元に笑みが浮かぶ。

「錠が下ろしてあるということは、園内の警備がないということ。それと、この夕立では何をしても見咎められる恐れはないということ。この二つがここまで来て発見できた事実だ。さあ進太、どうする。もう帰って眠りたくなつたかい。このまま帰っても私は一向に構わない」

歯をきつく食いしばって進太はチハルの言葉を聞いた。このまま帰ればただの負け犬になるだけだった。決して耐えられることではない。だが、この門扉からキリンを連れて出ることは到底無理だ。また絶望が全身を被う。進太はうなだれて黙り込んだ。遠く雷鳴が聞こえる。さしもの雷雲も遠のいていく気配がした。雷鳴に代わって急に、耳の奥で音楽が鳴った。今朝聴いたばかりの「ボレロ」の調べだ。シンバルの音が鳴り響き、進太を鼓舞する。助手席にうずくまつた小さな肩が震えた。たとえキリンを連れ出せなくとも、チハルにサクタロウを会わせる義務を感じた。それがチハルの好意に報いる進太の責任だと確信した。勇気が全身に満ち、背筋がしゃんと立った。

「濡れネズミになって無駄足になるかも知れないけど、ぜひサクタロウに会って欲しい。チハル、お願ひ。一緒に来てください」

進太が真剣な声で頼んだ。チハルが闇の中で進太の目をのぞき込む。白く冷ややかな炎が進太の目の中で燃えている。三千度の熱で輝く炎と同じ色だ。

「よし、行こう」

大きくうなづいて答え、チハルはドアを大きく開けて路上に出た。冷たい風と横殴りの雨が全身を襲う。MG・Fのトランクを開け、黒いデイバッグを引き出す。見る間に濡れネズミになったチハルの身体に、黒いパンツと黒い長袖のTシャツがへばりついた。精悍でマニッシュな、黒い裸身が突然出現した感じだ。形良く盛り上がった乳房と、位置の高いスマートな尻が進太の目にもまぶしい。ショートの髪がびっしょり濡れ、頭の輪郭が露になる。耳元のダイヤのピアスが稻妻に光った。黒いデイバッグを右肩にかけ、チハルは大股に門扉に向かう。慌てて進太が付き従う。歩きにくいサンダルを脱ぎ捨て素足になつてチハルを追った。門扉の前にチハルがひざまづき、デイバッグから巨大なニッパーを取り出す。左右二つの門扉を縛ったチェーンを無造作にニッパーの歯で挟み、渾身の力を入れて断ち切る。鋭い金属音が二度響き、チェーンと南京錠がチハルの足元に落ちた。

「これで出口はできた。さあ、キリン舎に案内しな」

背後で切断作業を見つめていた進太を振り向き、チハルが大きな声で命じた。闇の中で

白い歯が笑っている。進太は喜びを全身に現し、躍り上がって前に出た。錠を破戒された門扉を開き、周りを見回してから園内に入った。

裏門から山の上に向かって、アスファルトのだらだら坂が続いている。作業車両の専用道路なので結構広い。進太とチハルは雨に煙る園内灯の青い光の下を、足早に歩いていく。全身はもう、雨に濡れたというより服を着たままプールで泳いできたと言った方が適切な有様だった。寒ささえ感じた肌が上り坂で汗ばみだしたころ、高い石垣の切れ間にキリン舎が見えた。飼育広場のある正面からは裏手に当たる。屋根までの高さが五メートル以上ある鉄骨とコンクリートパネルで築いたキリン舎は、大きな鉄扉を固く閉ざしている。方形の飼育舎の横に小さな張り出しがあり、飼育員の出入りするドアがあった。

「ここから入るんだよ」

一声言って駆け出していった進太がドアの前でチハルを振り返り、泣きべそをかく。

「畜生。ここも鍵がかかっている。鉄のドアだから、こじ開けることもできないよ」

青い水銀灯の光を浴びた泣き顔を見ながら、チハルは平然とドアの前に立った。確かに鉄製の強固なドアだが、錠は玄関ドアと同じシリンダー錠だ。

「進太、管理棟はどの辺にあるんだい」

にっこり笑いながらチハルが尋ねた。進太の表情がまた明るくなる。

「あの小さな丘の向こうだよ。キリン舎は管理棟から一番遠くにあるんだ」

期待のこもった声で、即座に進太が答えた。チハルが黙ってドアの前にひざまづく。黒いデイバックから今度は重そうな工具を取り出した。金工用の充電式ドリル・ドライバーだった。十五・六ボルトの最強力な機種だ。チハルは空を仰ぎ、轟き続ける雷鳴を確かめてから、ドリルの先を無造作にノブの中央の鍵穴に当てた。引き金式のスイッチを握ると、途端にかん高い音が雷鳴に混じった。

進太はチハルの背中に立ちつくし、脅威の眼差しでしなやかな肩を見下ろした。チハルの精悍な姿態から、荒々しい暴力のにおいが立ち上がっている。何かしら懐かしい甘い香りが雨中に満ち、進太はむせ返る思いがした。金属を断ち切る騒音はすぐやみ、ノブの中央にポッカリと穴が通った。シリンダーを破戒された錠はもう役立ちはしない。

「ドアも開いたよ」

つまらなそうな声で言って、チハルが進太を振り向いた。

「凄いね。チハルは何でも壊してしまう。そのデイバッグは魔法のバッグだ」

感極まった声で進太が叫んだ。チハルは答えずに進太に場所を譲る。

「魔法のバッグではない。大人は子供と違い、考えられる限りの準備をして来るものだ。いずれ進太にも、きっと分かる」

チハルは心の中で言って立ち上がった。喜びに震える進太の顔を見つめる。これから先は進太が仕事をするのだ。チハルに見つめられ、緊張した表情に戻った進太がそっとドアを開けた。暑く湿った空気とすえたような獣のにおいがドアの奥から流れ出し、二人の全身を覆った。

ドアの先は広い飼料置き場だった。左手の通路の先がぼんやりと明るくなっている。進太は慣れた様子で真っ直ぐ通路を進む。チハルが遅れて後に従う。通路の先から濃厚な獣のにおいと、うごめく気配が漂ってくる。チハルは慎重に歩みを進めた。通路を抜けすると、突然開けた五メートルもある天井の下に、三頭の巨大な生き物がたたずんでいた。常夜灯の鈍い光を浴びた黒と黄の網目模様が、ひときわ新鮮にチハルの目を打った。すぐ前にいる一番背の高いキリンが大きく鼻を鳴らし、蹄で鋭く床を蹴った。大きな音が飼育舎に響き渡る。サクタロウに違いないとチハルは思った。一瞬背筋を恐怖が走った。妻のキサラギと、息子のキリタロウを守るためにサクタロウがチハルを威嚇したのだ。

「サクタロウ怒らないで。この人はチハル。僕の友達だよ。怒らないで」

進太がはっきりした声で呼び掛けると、サクタロウが長い首を回して中央にいる進太を見た。チハルはその隙に、鉄扉の前まで音を立てないように注意して走った。扉の向こうは二人が歩いてきた車両専用道路だ。

「進太、キリンが警戒を解くまで、私は石になる」

短く進太に言ってから、チハルは三頭のキリンを改めて見上げた。サクタロウの身長はどう見ても四メートルはある。少し後ろで子キリンを庇うように立つキサラギも一回り小さいだけだ。二歳になったばかりのキリタロウさえ三メートル近い。チハルは首をすくめてからTシャツとパンツを脱いだ。素っ裸になると妙に落ち着いた気分になる。キリンと言ってもサクタロウは男だ。種が違っても雄が雌を嫌いな道理はない。たとえキリンでも、雄と接するときは裸に限ると思い、引き締まった肌に浮いた水滴を指先ではじいた。

つんと上を向いた二つの乳首の根元で、金色のリングが怪しく光った。リングはきれいに陰毛を剃り上げた股間でも揺れた。床に座り込んで目を閉じると、チハルの脳裏にボギーの姿態が浮かび上がる。ボギーの大きなペニスの先にもチハルと同じ金色のリングがぶら下がっている。二人で性器にピアッキングしたのは去年の夏だ。ボギーと離れ、日本に来てからまだ二日しか経っていない。ロサンゼルス郊外の広大な屋敷で毎週末、二人は誰

憚ることなく素っ裸で戯れるのだ。燐々と日の照りつける広々とした芝生で、チハルは乳首のリングに繋いだ鎖をボギーに曳かれ、素っ裸で緑の芝生を走り回る。股間のリングを曳かれるときは本当につらい。ユーモラスに股間を突き出し、息を荒くして一心に走る。エネルギッシュなボギーの走りについていくのは並大抵のことではない。そして、ボギーのペニスのリングと、チハルの股間のリングを繋いで走るときの快感。ああ、なんてダイナミックな性なんだろうとチハルは思う。それに比べ、この国は常にせせこましすぎていると嘆きたくなる。しかし、進太のアイデアは違う。十分すぎるほど壮大なスケールだと確信し、目を開いた。間近に見上げたキリンの威容は、背筋が寒くなるほどチハルを威圧した。小さな進太がこの巨大な生き物の背に乗る姿を想像すると、涙が出るほどの楽しさが込み上げてきた。

「進太が来ない」

Mの耳元で陶芸屋が情けない声でつぶやく。もう何度聞いたか忘れてしまうほど聞いたつぶやきだ。お陰で目の前の芝居に集中できない。しかし、あれほどの風雨が嘘のように通り過ぎた後、定刻通り始められた芝居は大成功と言えた。二百人の観衆は固唾を呑んで芝居を見つめ、今、最後の幕間の喧噪が煉瓦蔵を包んでいた。Mは広場の舞台の前にいる。空気は蒸し暑かったが、雨上がりの涼しい風が広場を通り抜ける。時折頭上のクスノキの枝葉から水滴が落ちた。観衆は約半数の百人が外の舞台を取り巻いている。最終幕が始まれば、煉瓦蔵の中から百人の観衆が外に移動してくるはずだ。それも、すべてが睦月の演技にかかっている。

煉瓦蔵の前の織姫通りからは、絶え間なく八木節のリズムが響いてくる。各町会の櫓を囲んだ八木節踊りも、今や最高潮を迎えるようとしていた。

「M、進太は遅い。本当に来るだろうか」

不安に満ちた声で、横に立った陶芸屋がまたつぶやく。

「大丈夫ですよ。必ず来ます」

極月がMの代わりに確かな声で答えた。極月は紺地に朱の波頭をあしらった浴衣を着ている。帯は鮮やかな銀だ。初めて見る浴衣姿だが、しなやかな姿態によく似合う。優雅な手つきで団扇を使う様は、どこから見ても機屋のお嬢さんに見える。Mはふと、チハルのことが気に掛かった。この織物の街の祭りを伝えてきたのはチハルの先祖たちなのだ。アメリカにいるチハルが、祭りを見るために毎年帰省すると話していた祐子の言葉も思い出

された。その祭りを今年はMがコーディネートしている。チハルが目を剥く様が目の前を掠めた。慌てて周囲に視線を巡らす。しかし、いなせに浴衣を着こなしたチハルの姿はなく、相変わらず着古したブルージーンズに白いTシャツ姿の祐子の背が見えた。横に立つ大久保玲の長身に、寄り添うようにして立っている。これで進太がいれば、最高に幸せな気分になれるとMは思う。

「ほらM。最終幕が始まるわよ。ぽかんとしていたら、睦月の熱演を見逃すわよ」

直ぐ前から声を掛けられ、ぎょっとして目の焦点を合わせる。涼しそうな白い麻のパンツルックに身を固めたチーフが笑っている。隣でチーフと手を繋いだ天田が意地悪そうに片目をつむった。他愛ない幸せがMの周りを取り巻く。

「進太は、きっと来るよな」

不幸せを一身に背負ったように、陶芸屋がまたつぶやく。

煉瓦蔵の中から八木節の音色が聞こえてきた。広場の舞台にも再び鮮やかな照明が輝きだす。劇団スタッフの手で織姫通りに面した鉄扉が大きく開かれ、街の賑わいが目に飛び込んできた。幕間も終わり、いよいよ沢田正二率いる劇団・真球の国際演劇祭応募作品「ヤギブシ」の最終幕が上がった。

動物園で生まれ育ったキリンは、やはり野生と違う。進太が時間をかけて話し掛け足を撫でた甲斐があって、やっと警戒心を解いた。だが、チハルが大きく開け放した扉から外の道路に出ようとはしない。

「さあ、サクタロウおいで。一緒に外に出よう。自由に街が走れるんだぞ」

いくら進太が呼び掛けても、長い首を外に突き出すだけで出ようとはしない。まるで天気をうかがっているように見える。しかし、時折遠雷が響くだけで、空はもう、すっかり晴れ上がっている。雨で洗われた夜空には星も瞬いている。暑くもなく寒くもない、素っ裸でいるのが似合いなほどすがすがしい夜だ。

「おいでよ、さあおいで」

肌にへばりつく濡れたTシャツを脱いで、素っ裸になった進太が疲れ果てた声を出した。

「餌で釣るしかないね。食べるかどうか分からぬけど、冷蔵庫にはこれしかなかった」

開け放した鉄扉の横に立ったチハルが、黒いデイバッグからバナナを出して進太に投げた。進太は面食らった顔で、手にしたバナナを見る。猿ではあるまいし、キリンがバナナを食べるなんて飼育員の梅田さんからも聞いたことはない。だが、このままでは朝になっ

てしまいそうな恐怖が湧く。進太はバナナの皮を剥いて高々と頭上に掲げた。甘いバナナの香りがにおい立つ。好奇心の強いサクタロウが長い首を伸ばし、巨大な顔をバナナに近付ける。進太が素早くバナナを背に隠すと、ザラザラした舌で進太の顔を舐めた。バナナが欲しくて甘えている様子がありありしている。進太は急いで五メートル離れ、またバナナを頭上にかざした。今度はサクタロウが躊躇無く歩みを進めた。蹄の音が響き、黒と黄の網目模様に覆われた巨体が、扉を通り抜けて戸外に出た。進太の顔がうれしさに歪む。泣き笑いをしながら、なおも先に進む。サクタロウはバナナを追ってアスファルトの道路を歩き、飼育舎から十メートル以上離れた。キサラギとキリタロウも後に続いている。高い石垣の横まで出てから、進太はサクタロウに三等分したバナナを与えた。サクタロウは太い涎を流し、おいしそうにバナナを噛む。進太は後からついてきたキサラギとキリタロウにも、同じようにバナナをやった。二頭ともおいしそうに食べた。進太の気分は最高度に高揚する。キリン使いになったような気がして大きく胸を張った。黒いデイバッグを提げて近寄ってきたチハルが、房になった四本のバナナと長いスカーフをバッグから取り出す。

「このスカーフは祐子の織った品だよ。柔らかいシルクだからキリンの首に巻いても興奮しないかも知れない。手綱替わりになる」

チハルが言って、バナナとスカーフを手渡す。進太にはチハルの裸身が輝くようにまぶしい。ぞんざいな口調も、天の声のように優雅に聞こえた。

「ありがとうチハル。本当にありがとう。チハルのお陰で、僕は夢がかなえられる。本当にありがとう」

涙声で何回も頭を下げる進太を、チハルは笑って見下ろす。

「礼はキリンに乗ってからいいな」

涙拭って進太が大きくなづく。まなじりを決して進太は石垣を見つめた。バナナの房をスカーフに結びつけて首に掛け、力いっぱい石垣を登る。石垣の天辺に立つと、ちょうどサクタロウの背の高さと同じになった。サクタロウは無邪気に路側帯に植えられた紅葉の葉を食べている。進太はバナナを一房取って皮を剥いた。サクタロウに向けてバナナを振ると、長い首だけを伸ばしてくる。

「だめ、サクタロウ、こっちに歩いてくるんだ」

厳しく言って背にバナナを隠すと、やっとのっそり近付いてくる。サクタロウが背に乗れるところまで来たとき、進太はちぎったバナナを前方に投げた。即座にサクタロウが向

きを変え、素早く路上に落ちたバナナに首を伸ばす。進太の足先に無防備なサクタロウの背がある。進太は一瞬の躊躇もなく、サクタロウの背に飛び乗った。ブラシのように固い短毛が股間を刺す。ぱんぱんに張り切った肌が一瞬揺れた。だが、サクタロウは進太を振り落とすよりバナナを選んだ。巨大なキリンの背に乗った進太は、巨木に不安定にとまつたセミのように見える。必死の思いで太い首にスカーフを回して手綱を確保する。少し抵抗の素振りを見せたサクタロウも、小さな荷物を諦めたように進太を背にして、また紅葉の葉を食べに行った。

「進太、すてきだよ。キリンに乗った人間を、私は初めて見た」

キリンを見上げて感動の声を上げたチハルが、進太にはやけに小さく見えた。

「ありがとう、本当にありがとう。チハルも一緒に煉瓦蔵に行こうよ。ママにもぜひ紹介したい。なんと言ってもチハルは僕の大恩人だ」

キリンの背で誇らかに言った進太はちっぽけだが、チハルの目にはとても大きく見える。これで良かったとチハルは思った。夢が実現することも、この世にはあった。その事実が無性にうれしかった。

「いいえ、進太。私は行かない。これできよならだよ。進太のことはきっと忘れない」

「残念だな。でも僕は行く。きっとチハルも喜んでくれるね」

答えた進太にチハルが大きくうなずく。進太は坂の下を見つめ、ちぎったバナナを遠くに投げた。サクタロウがバナナを追ってゆっくり歩き出す。進太は手綱を握り、キリンの誘導を必死で覚えようと歯を食いしばる。

チハルの目の前を異様な一団が遠ざかっていく。三頭のキリンが街へ続く坂道を下りていくのだ。ひときわ大きいキリンの背で、ちっぽけな進太の裸身が不安定に揺れている。いつキリンが暴走を始め、進太が振り落とされても不思議はない眺めだった。振り落とされれば、多分進太は死ぬ。しかし、チハルはそれでも構わないと思った。これだけの手助けをした責任も特に感じなかった。少なくとも、絶望の淵にいた進太が夢を現実にしたのだ。夢の実現が死に繋がって悔いるのは、夢の実現を望まぬ人間の驕りに過ぎない。チハルの脳裏にMの顔が浮かんだ。どうやらMと同じようなことをしてしまったと一瞬思った。頬が赤くなる前に激しく頭を振り、Mの幻影を振り払う。明日は祐子を誘い、八木節祭りを案内させることに決めた。思えば、それが今回の帰省のただ一つの目的だった。

街へと続く家並みの向こうから、チャカポコ、チャカポコと陽気な八木節音頭のリズムが流れてくる。

カッカッカッカと蹄の音を響かせて、サクタロウは山手通りを歩む。

雨上がりの通りは閑散としている。八木節祭りの会場になった織姫通りに向かう人影も見えない。すでに市民全員が祭りに出掛けてしまったような気がする。もう午後九時に近いのかも知れなかった。

「芝居が終わってしまう」

焦りに咽せたつぶやきが進太の口に上った。しかし、キリンのサクタロウは平気な顔で、広い道路の真ん中をもの珍しそうに長い首を振りながら悠然と歩く。大きな歩みに連れて進太の裸身も微妙に揺れる。すぐ近くに赤信号を点滅させた織姫通りと合流する信号が見えているが、なかなか近付かない。

進太は首から下げた二本のバナナの房から一つを取って皮を剥いた。バナナの甘い香りが鼻孔を突く。サクタロウの背を左右の脚できつく挟むようにしてバランスを取り、力いっぱい腕を振り、思い切り遠くにバナナを投げた。途端にサクタロウがダッシュする。進太の背が後ろに引かれ、危うく振り落とされそうになる。すんでの所で前方に重心を移し、急な加速を必死で堪える。跨るキリンの背に慣れたせいか、不思議に恐怖はない。サクタロウの巨体も走る速さの割には安定している。左右への揺れは思ったほど無い。加速に伴う前後の重心移動さえ気を付ければ何とかなった。とにかく、長い道のりを振り落とされずにここまで来たのだ。煉瓦蔵までは、もう五百メートルも無い。

三頭のキリンと進太は、織姫通りの信号のすぐ手前まできた。薄暗い交差点の右手からは、明るすぎるほどの照明が差し込んでいる。けたたましい八木節のリズムに混ざり、大勢の人から立ち上る喧噪が押し寄せてくる。イカを焼く生臭いにおいと、水飴やフルーツの甘いにおいが、腹の空いた進太の鼻を襲う。キサラギとキリタロウを従えたサクタロウの足が一瞬止まった。長い首を真っ直ぐ上げ、すべての音を聞き分け、においを嗅ぎ分けようと空を見上げた。

「サクタロウ、行くんだ」

背を真っ直ぐにして、進太が叫んだ。手綱にしたスカーフを力いっぱい手元に引く。おびただしい数の露店が上げる食品のにおいが、サクタロウの警戒心に勝った。サクタロウは早足で交差点を右折する。進太の小さな裸身が斜めになり、キリンの背から落ちそうになる。必死に掴んでいるスカーフが高い衣擦れの音をたてる。大きく見開いた進太の目に、織姫通りを埋めた八木節踊りの輪が飛び込んできた。道路中央に引き出された二層の櫓が

大きく揺れる。サクタロウが風を切って走る。見る間に踊りの輪が乱れ、人々が散り散りになる。

ウッ、ウワーン

驚愕に満ちた女の叫び、男の呻き、足音、泣き声、身体のぶつかり合う音、露店の倒れる音。一切の音が渦巻き、一つの轟音になって三頭のキリンを興奮の極致に誘う。目まぐるしく風景が流れ、黒々とした煉瓦蔵のフォルムが急に大きくなる。赤黒い壁の横手に大きく開かれた鉄扉が見えた。進太は最後に残ったバナナを渾身の力で投げた。疾走するサクタロウが条件反射のように巨体を寝かせ、鋭く左に曲がる。蹄の音を高らかに夜空に響かせ、三頭のキリンは一散に煉瓦蔵の広場へ駆け込んで行った。

メルボルン国際演劇祭応募作品「ヤギブシ」の最終幕は今、最高潮を迎えようとしていた。照明を落とした煉瓦蔵側面の扉を、白いピン・スポットが照らし出している。広場のクスノキの下で約百人の観衆が静まり返り、スポットライトの先を見守る。

ひとりわ高くお囃子の横笛が泣くと、煌々と輝くピン・スポットの照度が極端に落ちた。黒く開いた扉の中から薄闇の広場に、白々とした裸身がよろめき出る。全裸背面合掌縛りに緊縛された睦月が、うつむきがちに歩く。背中で縛られた両手で握る赤い蠟燭の炎が風に揺らめく。素肌を走るステンレス・ファイバーの繩が怪しく光った。きれいに結われていた高島田が千々に乱れ、裸身をなぶる。またたく間に悽愴な美が広場を占有した。睦月に続いて、繩尻を曳く主人に扮した黒子が現れる。大久保玲がデザインした黒子の衣装は、夜目にも鮮やかないぶし銀に輝いている。睦月の素肌の滑らかさと金属纖維の輝き、そして黒子のいぶし銀の衣装。闇にまたたく銀河のようなコントラストが、観衆を異形の世界に誘う。二人に従うように、煉瓦蔵の中からぞろぞろと観衆が出てくる。

睦月の裸身がクスノキの枝葉の下でよろめき、片膝をついた。割開いた股間を暑く湿った風が渡る。広場を取り囲んだ観衆の間から、一斉に溜息が漏れた。睦月の裸身を快感が貫く。全身が戦き、暑さの中で鳥肌が立ったとき、太股の間を温かな滲が流れた。止めようもなく失禁は続き、足元に広がる。取り囲む観衆に広がる感動の嵐が睦月の裸身を翻弄する。歯を食いしばって顔を上げ、虚空を睨み付けたとき、広場の照明が一斉に灯った。舞台セットの端から白いスマーカーが立ち上る。赤を主調にした照明を浴びてピンクに染まった煙がたなびく。睦月はじっと織姫通りから現れる馬子の出を待った。

Mの隣りに立つ陶芸屋が、また大きく溜息を洩らした。静けさの中で地面を打ったステッキの音が空しく響く。

「やはり来ない」

陶芸屋の悲痛な声が耳元で聞こえた。赤い煙が立ち上る舞台の先に織姫通りの明かりが見える。

「やはり来ない、か」

陶芸屋の嘆きをMが反芻したとき、見えていたはずの織姫通りの明かりが陰った。凄まじいエネルギーが前方から迫る。巨大な影が一瞬のうちに観衆を追い散らし、広場を疾走した。凍り付いた視線の隅を鮮やかな影が三つ横切っていった。錯綜する騒音の中に、かん高い蹄の音が響いた。強烈な獣のにおいが鼻孔を突く。慌てて振り返ると、煉瓦蔵の裏庭を走り回る三頭のキリンが目に飛び込んだ。黒と黄の華麗な綱目模様が闇に浮かび上がって見える。信じがたい光景だが、現実のキリンは古ぼけた煉瓦蔵によく似合った。今、裏庭を一回りしたキリンがまた、広場に向かって疾走してくる。

「ママッ、ママ」

喧噪の中でひときわ高いボーイ・ソプラノが叫んだ。

Mは驚愕の目で疾走するキリンを見た。一番大きなキリンの背に、ちっぽけな人影を認めた。Mの顔が一瞬に歪む。

「危ないっ、進太」

陶芸屋が叫んだ。キリンの前に飛びだそうとしたMの足にステッキを投げ付け、身を投げるようにして前方に飛び出す。Mの足がもつれた。

「アッ」

声にならぬ悲鳴がMの口を突いた。疾走してくるキリンの直前に陶芸屋の身体があった。よろよろと左に傾いた痩せた身体を、サクタロウの蹄が音高く蹴り飛ばす。生き物の潰れる音を、確かにMは聞いたと思った。陶芸屋の身体が無様に跳ね上がった。スローモーション画面のように、ゆっくりとサクタロウの足並みが乱れる。大きく傾いた巨大な背から小さな裸身が落ち、宙に舞った。二百人の悲鳴が広場を満たし、三頭のキリンが一団となって織姫通りに走り去っていく。

すべてが一分間もかからぬうちに終わった。陶芸屋はキリンの蹄で頭を割られて死んだ。即死だった。ぼろ切れのような死体の横に、キリンから落ちて失神した進太の裸身が転がっている。駆け寄って抱き締めたMの腕に、進太の確かな鼓動が伝わる。ほっとして空を

仰ぐと、素っ裸で後ろ手に緊縛された睦月が進太を見下ろしている。睦月の目には相変わらず何の感情もない。ただ暗く深い闇だけがあった。

静寂の戻った煉瓦蔵に急にセミの鳴き声が響き渡る。夜になって狂い鳴くアブラゼミの音に、遠くから救急車のサイレンが共鳴した。芝居は終わった。

市民病院に収容された進太は、幸い全身の擦過傷だけで済んだ。二日後の退院と同時に、窃盗と過失致死で警察に補導され、児童相談所に送られた。いずれは教護院に措置されることになる。

睦月は予定通り八月の末にメルボルンに発った。行き掛けの駄賃のように、進太を養子にするようMに迫った。陶芸屋に先立たれたナースも、祐子も、チーフも、この養子縁組を薦めた。児童相談所にいる進太もMの養子になることを望んだ。親権の放棄を決意した睦月を責めても、今さらどうにもならない。母子二人の家族は、陶芸屋の死を契機に崩壊したのだ。

Mは進太と養子縁組をし、警備会社を辞めた。市に移り住んだ歯医者を誘って山地の蔵屋敷に住む決心をした。温かく受け入れる家庭ができなければ、進太は教護院を出ることができない。Mは戸籍上の祖父に当たる歯科医と一緒に、進太を育てようと思った。たとえ理不尽な家族が新たに生まれるとしても、擬制の家族を見続けてきたMには似合いの物と思えたのだ。ただ官能の行く末だけが寂しく下半身を被った。

夏は終わり、秋の気配が色濃かった。

完